

18
825

探檢小僧筆記

探檢小僧



東京成功雜誌社



熊其他動物等大森林に火山に事遭ふ

4

乞高野

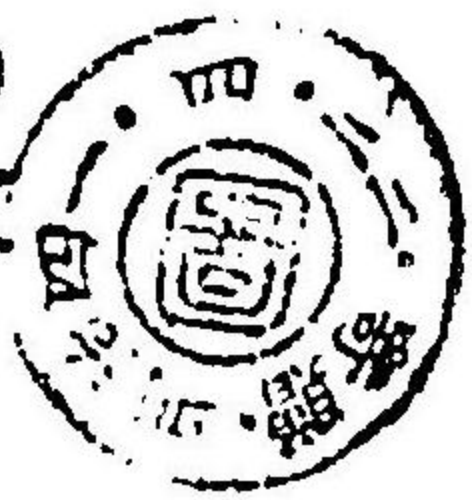


熊其他の動物等大森林に火山に事遭ふ

287

序

成功雜誌社



著者探検小説類を熊を研究するの癖あり、常に深山に入りて熊の性情を研究し、熊と相親みて恰も朋友の觀あり、是に於て大に奮發し、熊の代理と爲り、此、黒熊自傳を著す、書中記する所素より黒熊の一代記、幼時親熊に伴はれて、森林に彷徨したる歴史より深山に於て栗鼠啄木鳥等を伴侶とせし事實譚水邊に夏を過せし追懷譚、山火事に遭ひし遭難譚、冬籠の生活等に及び、更に轉じて、黒熊の人寰探検、始めて人間を見たる記、生活の危機、親心、子煩惱、飢饉、係蹄、人間掌中の物、回顧述懷、熊生觀、人生觀にあらず、等に及ぶ、人間若し本書を讀む、宇宙間、人生の外更に熊の生涯なるもの存するあつて、誠に、非常に、味ふに

足るものあるを知らん

明治四十一年四月

探 檢 小 僧 識

黒熊自傳目次

幼時	一
虎と豪猪	八
栗鼠と啄木鳥	一五
水邊の夏	二一
人間と雷挺	二四
始て人間を見る	三三
前代未聞の大珍事	三七
黒漫々	四七
莓畑	五二
變事	五七
目次	一

争闘……………六三

人寰裡の探検……………六八

永別……………七七

不和……………八二

冬籠り……………九〇

新春の生活……………九二

別れ路孤影粲然……………九七

初陣……………一〇五

生涯の危機雌熊を贏得……………一一〇

懐古人寰……………一二一

親心、狼と鹿……………一二九

子煩惱……………一三八

再び人寰に入る……………一四〇

舊冤を雪ぐ……………一四七

山羊……………一五〇

飢饉蹄係……………一五三

人間掌中のもの……………一六二

述懐……………一六九

黒熊自傳目次了

黒熊自傳

幼時

今から考へると親熊が昔は仔熊であつたとは頗る可笑しい。私は我仔の姿を見ては常にさう思つて居た。仔熊と親熊の違は只體の大きいと小さい丈の事なく、毛色から全く別である。私は自分の房々とした黒毛を眺めて、是が仔熊の薄赤色のムシヤ／＼した、汚い間の抜けたやうな初毛の後身かと思ふと不思議に堪えない。併し忘れもせぬ母熊がよく私の體を舐ぶり廻して居るが、暫すると口端に付いた毛を前肢で拭つて居た。恰女房共が仔熊にしてやるのと同じである。口を拭ひ了ると矢庭にこの頭をボカリと撲る。是は殆んど習慣と成つて居るので、舐り了る頃となると此方から用心して脚の

幼時

探検小僧筆記

間に頭を突込み、揮打の難を免れ、再び舐め初むるのを待つて居た。
 私は他の熊のやうに山腹に産れ、山腹に熊と爲つた。故郷は北海道の山奥
 で、見るもく山又山、行けどもく谿又谿、果しなく山を越え谿を涉れば、
 谿間には必ず一條の谷川が流れて、千年不斷の清泉が涔々と溢れて居る。夏
 も末に成り、流が枯れると川床は水を撒らして遊べる位に乾上る。満山は一
 面の樹木に蔽はれ、他に比類なき老樹巨幹が蔚蒼と枝を參へて居る、之を踏
 まへたら天にも昇れるかと疑はる、許である。極めて高い山は巔近くに昇る
 につれて樹木が漸々矮くなり、木並が段々疎になつて、見渡す遠近は只一望
 の緑の梢が高く低く、果なき海と波立つて見え、その間からは峨々たる高峰
 が幾つとなく空を凌いで聳え立ち、頂には三伏の夏天にも消殘る萬古の白雪
 を戴く。實に美觀である。

冬に成ると満山一白の雪に眼界を奪つて、玲瓏たる水晶世界となる。降つ
 ては積り、積つては堅まり、又其上に降積もつて、谷間は吹雪と雪崩とて矮
 い樹々は梢まで雪に埋もつて了ふ。併し熊は白いものが降り初める頃から、

洞穴の中に潜込んで、半醒半睡の生を送り、春の來る迄の冬籠を營むものだ
 から、冬季の事は餘り知らぬものである。冬籠の味が奈何なものか、目が寤
 めた時には、どの位肚が空いて、痺の切れた痛さ加減がどんなものか、經驗
 のないものには判らない。

雪は數月の間満目の色を没して、暖光ゆるく通ひ、春風に融けて流れる頃
 迄は積もつて居る。春の日の熱さが日一日と重なるにつれて、山は漸々雪の
 上衣を脱ぎ、谷の木下に置き残る鹿子斑の白雪ばかりは、夏に至るまで依然
 として存するのである。雪がどけて了ふと吾々熊共はのそりく冬睡の睡か
 ら起き出づる。此時分には到る所の土地は濕氣を帯び、溪の流れは夥しく水
 嵩を増して、日となく夜となく、混々として流れ下つて行く。

私共の棲家といふのは、小山の鳥渡小高い邊に在つたので、二本の大杉が
 上から突出た岩の下から生へて、自然に洞の門扉をなして居る。此岩の下、
 杉の根方なる雨露の凌ぎに便よき洞が、我々熊に取つては安養の樂土を成す
 のである。

諸君は私共が一緒に此安宅にぐる／＼と曲つて、脚の間に頭を衝込んで寐て居る時の心持が奈何に好いものであるか、殆んど想像に及ばぬてせう。誰ても此状況を見たら恐らくモチャ／＼した藍色と黒の大な毛の塊が轉がしてあるとしか思はないだらう。

私は實に此搖籃の裡に些許幼時の紀念を留めてある。私と妹は此裡に生れた。幼い私の眼には両親の大さは驚くべきものであつた。妹が不意に後から寐込の所を襲つて私の後脚に噛付いたのも當時である。其時は掌を以て頭をボカリと擲つて遣る。抑熊はよく自分の脚を噛むもので、天下に如斯好い心持のものはないといふ位だが、不意に咬付かれるのは餘り好い氣持でもない。妹熊を擲るのも之が爲であつた。こんな事てこの世の幕の序開もあつたが、今一つ稚ない頃の忘れられぬ出来事を話さねばならぬ。

時はまだ年も明け初めた頃であつたらしい。地は温氣を持つて柔かく、處々の窪みには雪の消残りの深かつた折。云ふ迄もなく私は未だ頑是ない稚兒であり、親熊ならば假令頑んだ所が、頭と足とて確乎と身を持耐へて、難を

免れる事が出来たのである。私は多分此時は妹と戯れて居て、如何かした機に體の均衡を失ひ、咄嗟と思ふ間もなく足を迂らして、棲家の前の崖の上から、頭轉倒と身をのめらせ、遙か谷間の雪の中に、四足を擡げた栗鼠の如に、眞倒様に轉げ落ちた。落ちてゆく内に出張つた岩角木の根杭て初は頭次は背、終に臀を充分打つて、助けて呉れつと叫ぶ間もあらばこそ、コ／＼と落ちて下に落着くと雪の中にスッポリ埋もつて終つた。

其寒いこと痛いこと。身内はし／＼に濡れて、早や寂滅爲樂を告ぐる所であつたのを、辛くも母熊に救ひ上げられ、散々の體で、追立てるやうにして連れ歸られた。此時の光景は北海道の仔熊仲間て最慘怛な辛い哀れな情ないものであつた。獅子は生れて三日、千仞の谷底へ親から突落さるゝと聞いて居るが、其苦しさはどの位であらう。

私は歸つてからはぐッすり寐込んで終日呻吟の聲を絶たない。と母熊は懇ろに勞はつて濡れた毛を立派に舐めてくれて、漸と熊心地も着いたが、以後數日間は酷く神経過敏に成つて了つた。

此事あつてより戦争の観念を得て、大概毎日妹を對手に此戯れをして遊んだ。先づ妹が杉の根方の岩が根を楯にとつて、私の昇つて來るのを妨げる。私は其持場から妹を驅立て、追落さうと試みる。實際面白い遊戯であつた。時には持場を替へて、妹が攻むれば私が禦ぐ、妹は私を追落すことは出來なかつたが、随分大膽に猛烈に懸る所は果して戯であるか、是は本氣の沙汰ではないわと思はるゝくらゐであつた。

最面白い戯は母熊と一緒に遊ぶのである。岩を負ふて立つた所を兩仔熊は双方からヤッコラシヨイと後足に取付かうとする。さうはさせぬと向ては頭を地に附け、孰かに咬付かうとする。他の一箇は其處に乗じて耳に飛付く。兩箇が一生懸命に耳に執着けば母熊は、酷く噛むだな此畜生覺えて居よ、と言つた振で咆哮つて頭を左右に振り、大どよめきにどよめく。若し孰でも勢に乗じて誤つて些酷く咬むだと思つて、ハツと氣付いた時は泣きたい位酷い掌打を二つ三つ頂戴して、左右にバタリくと茲に遊が了と成る。一體母熊は自分で撲らうと思つたら随分思切つて酷く撲る方で、よく父熊を撲る所

を見るが、若是が仔熊であつたら四十四の骨々が微塵に成るに相違ない。人間だつたら只一撲に死んで了ふだらうと思はれる。

父熊は私共と一ツに成つて遊ぶことは母熊に比べると妙ない。平素は苦虫を咬漬したやうな苦い顔をして居る、随つて容易に怒る事もない。母熊の方は何でもない事に父熊に喰つてかゝる。察するに父熊餘程母熊には弱つて居るらしい。後年に至ると私と雌熊との間柄が亦適さり此通りであつた。雌が空元氣を出す時に取つて喰ふ位は何でもないのだが、熊は皆犬も喰はぬといふ雄雌喧嘩は決して出來ないものである。若し母熊が怒り出してると、父熊も怒つた風を装ふが、後では直ぐ其非と悟ると見え、決して母熊を對手に喧嘩をせぬ。何故だか能くはわからぬが、幾ら酷く母熊から擲られても父熊は一向平氣である。人間にも恚機な風があるといふが、多分さうであらう。兎に角親仔四箇の熊は睦じく暮らして居た。私共はまた苛められるやうな事を仕もしなかつた。後に至つてはどういふ譯か、父熊との折合が面白からず成つたのだが、此時分は實に平和な幸福な生涯を送つて居た。

虎と豪猪

父母在さば遠く遊ばずといふ事は我々仔熊仲間にも行はれて、必ず獨り遊
 びをせぬ。出づるにも必ず親熊と一緒に、入るにも親熊を離るゝことはない。
 最父熊だけは離れて別に出入をするが、其時仔熊は必ず母熊の傍を去らぬ。
 何も知らぬ仔熊がムクムクした歩調で獨り出て出掛けては、得熊も知れぬもの
 を喰つて、之が爲に取返しのかぬ大事を惹起さぬとも限らない。又如何な
 災難の起るまいものでもないといふので、臆病からてはなく親熊が寸時も臆
 を離さないのである。

一體我々熊が天下に恐るべきものは人間許である。全熊族でも驚色を帯
 びた大熊と名づくる強い奴が居るけれど、私共が此熊から虐待せられたとい
 ふ噂は未だ聞かぬやうである。併し實の所近くに大熊が居ると嗅付けたら、
 窃と其場を外して行逢はぬ方が上策だ。いや臆病神に誘はれたといふ譯では
 ない、此習はしは吾々熊の祖先累代持傳へ譲受けた一種の特質である。

父熊も母熊もさうであつたといふ、私共も同然である。併し我々は熊の
 仔には随分澤山の叔伯があつて、此等と遊ぶこともあつたが、未だ一度とし
 て喧嘩を吹かけられた事はなかつた。已に一箇の熊と成つた黒熊が森林の生
 物中憚るものといつては、此を外にしては一つもない。行かうと欲する所に
 行き、仕度と思ふ所をし、驅けるにも留るにも勝手次第、思ふ儘に振舞つ
 て誰咎むるものもない、謂はば天下は我物であつた。但し仔熊はこれと異なる。
 虎の話は兩親から兼々聞いた事があつて、其臭をも丁と心得て居た。それ
 は随分嫌な奴で、私が最初に邂逅つた事は、今に肚に沈みて忘れぬ、其次
 第は怎樣である。

ある日一家擧つて出かけてゐた。時は朝も、これからといふ日の出頃、ホ
 カ／＼と暖い大變氣持の好い時刻。私は鼻を地に附着けてムグリ／＼と歩い
 て居る内、何時とは知らず連から後れて了つた。俄然ブーンと四邊に強い臭
 が鼻を衝いた。ヤレ虎だ、と取るものも取りあえず逃げようとする、脚が
 立たぬ、四脚を擴げてベタリと大地に平這つた。と飄然と風を起して後方の

木の間から奴の姿がニユツと現はれた。一二間の所まで来ると其鋭い眼球をギロリと光らせて、グツと私を睨んで立つた。是は叶はぬと思ふと總身エレンキをかけられたやうに庫れ、ワチ／＼と手足が震え、腰が竦んで一歩も動けぬ。生涯中、こんな恐ろしい思をした事は跡に二度ばかり有るは有つたが、此時程氣味の悪るかつた事はない。借それから向ふてどうするだらうと肝心もなく、一時は息も停まる迄目ばかりバチつかせて見て居ると、奴は太地にベタリと腹這つた。此時だ、恐い物見たさから怖々ながら其姿を見ると、頭の陰から黄色い胸が見えて、獅悪な眼をギロ／＼と光らせ、尻尾でバタリバタリと地面を叩いて居る。ア、私にも此尾があつたらば！

するとチリ／＼と拔足して忍び寄つて来る。眞綿で首を絞めらるゝやうな氣がして、兎角の思案も出ないので、石のやうに堅くシヤチエ張つた儘、火の付いたやうにけたましく、聲を限りに母熊の名を呼び立てた。聲が耳に入つたか母熊は、驚破勢と風のやうに、今や虎奴が飛付いて来ようとする氣勢を示した時、後の方から猛然として、樹枝を粉碎し土砂を蹴立て、現はれ

た。と見る間もなく母熊は、私の頭をはね越えて、驚然に虎に立對つた。

母熊にかゝる電光石火の早業が宿つて居ようとは、思も設けぬ所だつたから、他氣に取られて見て居ると、虎は後足でスツと立つて此新來の後援に鋒尖を向けた。併し子故に荒ぶ母熊の猛勢には敵し兼ねて、思はず後にたぢたぢとたぢろぐ。鹿を見濟し衝と寄つて、無圖と組み、曳々と練り廻して居たが、斜なりの山腹からゴロ／＼と二箇諸共一つに成つて轉げ落ちた。

虎の志は仔熊にあるので、母熊に逢つては到底敵はぬとは万も承知の上である。もと／＼力量に於て格が違つて居る、逆も喧嘩に成らぬのである。轉げ落ちても兩箇は尙離れず、磐底で上に成り下に成り金剛力を出して揉み合つて居たが、鹿を覗つて振切り様、虎は卑怯にも木立の内へ、雲霞と逃込んで了つた。

登つて來た時には、母熊は貌中を血塗に成して居る。是は最初虎に鼻柱を擲られた怪我であるといふ。一族一つに成つた後、溪川に下つて能く傷口を洗ひ落し、終日局部を冷して居た。

此で私も大に發明する所があつた。けれども物忘し易い幼者には得て有勝の過だが、咽元を過ぎて了へばいつか熱さも打忘れて、青二才の自由行動は危険だ、と悟つて自分には承知し乍ら、又もや豪猪といふ悪戯ものに虐められて、親熊に心配を懸けたのも直ぐ此事のあつた後である。

或夕暮の事。私は父熊の跡に隨いて山百合の夥しく生へて居る邊へ行つた。まだ若草の萌え初むる春も始め頃だから、若葉の根には球莖が附いて居た。山百合の根といふものは液つぼく、些しく香があつてポロ／＼と脆い、それは極めて滋味いものである。一度其味を喰ひ占めると、倍其儘には控へられない。棲居から遠く隔つたところではなし、行かう行かう、行つて掘りませうと、妹までを抱き込んで兩箇が／＼りて父熊を強請み立てるので、父熊も到頭根氣劣をして、然らば今一度連れて行かうといふ事と成り、朝未だ日の出前、一族揃ふて立出てた。妹と私は祭を前に待つて樂しむ幼者の意氣込で、球莖の希望を以て充たされて、足どり軽く勇ましく急ぎゆく。と木の間に隠れに木並の疎な所に當つて、未だ嘗て見覺のないものが居る。近寄つて見

れは蠢々動いて居る、どうも是は動物のやうだ。私共の姿が見ゆるなりヂツと停つて、體の下に手足も頭と覺ほじきものも引込めて了つた。もう些も動かない。動き出しさうにも見えない。ハテ妙な奴だ、何か變つた菌かなどではないか、それとも動物かしらん。孰れ何かの植物の化物かなどであらうもしれぬと思はれる迄、全身ビタ一面に白と黒の草樣のものが毫々と生へて居る。親熊達は脇から座つて見て居乍ら一言も發せぬ。妹は母熊の傍に物珍らしさうに眺めて居る。獸か菌か、地の隆起か、サア此變な奴、正體を顯はせと四邊の大地を叩いて見たが尙動かぬ。嗅いて見たらば吃度素性も知れるに相違ないと、別に悪る氣があつたのではない、只近寄つてヌツと鼻を差伸べる。途端に此草原が些しく動くと思えたが、ひく／＼と丸く膨れ上つて、今度は正銘まぎれなしの菌の形と成つた。此時草も一緒に伸びて、未だ届くには間があると思つた所に出して居た私の鼻にチヨクと觸れた。之が草なら随分鋭く刺々しい草の葉だと思つた。が性慾もなくまた嗅ぐ所を、菌は更に膨大して前より酷しく鼻を齧した。堪らず私は首をすぼめた。此時まで始終

黙つて見て居た父熊は、ひとりクス／＼と笑ひ出したので私は憤然とした。一體私は笑はれる事が大嫌。殊に自分の失策から他の笑を招いたと成ると業の沸ゆるもので、此時私は怒氣心頭より發し、もう思慮分別の邊もなく、力を極めて礮と擲いた。其痛い事／＼。私は聲を放つて泣いた。痛む肢を抱くやうにして三本脚で駆出して、そこら中を狂ひ廻つた。馬鹿な。此奴は豪猪であつた。私の掌には豪猪の刺が裏まで突貫して居る。

父熊は只「ヤリ／＼」と笑つてばかり居たが、母熊は私の無智を憐んで、口に啣へて刺を抜いてくれる。妹は傍で呆れて見て居るのであつた。此又抜いて貰ふ時の痛さといつたらない。私は一本肢を無くするかと思つた。その日はもう山百合の球莖さへ見れば皆て堀つて、私に呉れて慰めていた。平素どぼりに歩けるには余程日數が経つた後の事であつた。

熊は夏に成れば一つ所に停滯して居るものではない。此事のあつたのは生後三月位の頃であつたので、棲家に皆がとゞまつて居た時分に屬する。

栗鼠と啄木鳥

仔熊の産るゝのは未だ母熊が洞の中に居る冬の間で、普通仔熊が娑婆の風に當るまでには五六週間位は要る事に成つて居る。産れた最初には親熊は仔熊の傍去らず居付に成つて居るのだが、私の崖から墜ちた時位の年配に成ると漸々家の周囲の探検を初め、妹熊と一緒に母熊の傍に寐る、此等を相手に戯れる、近所の栗鼠を捉へようと試み初めるのである。

棲家の近所には夥しく栗鼠が住んで居た。此奴は一體大きな形をした鼠色の小動物であるが、隣の樅の木を我宿として、能く我々の近くにやつて来る奴は、珍らしくも全身黒色で馬鹿に飄軽な奴であつた。

始終來ては私共を相手にからかつて楽しむ。若し此方で對手にしないで居ると、獨言のやうに「サア、卸りて行つて、其所の古熊奴の餓鬼共を弄つて楽しむか」と言つては、地面から五六尺の高さに下りて、茲なら大丈夫私達には屈きつてなしと見たら、そこに留つて頭をだらりとぶら下げ、ヌツと瞰下し

ては口から出仕かせ舌の廻り放題な、出鱈目な結名を以て私共を喚んで怒らせようとする。栗鼠といふ奴は恐ろしいあべんちやらの獸で、油紙に火の付いたやうにペラ／＼と饒舌る奴だが、私共の黒公黒いから皆で憚いよのですはまた格別。此奴位に饒舌な栗鼠も珍らしい。奴が何か新奇な言を吐かうと思ふ時は、何でも熊の癩に觸りさうな姿をして尻尾を揮つて見せる。未だ多くの諸君達の間には御存知ない向もあらうが、獸共が寄ると觸ると私達を馬鹿にする。それといふが實の所私共は尻尾といふものを持つて居ないので。尻尾が無いと言はれると癪くなる。それで言草が癪だ、私共が知らぬ獸に逢ふと直に突進つて尻を隠すのは、出して置くべき尻尾の無いからだ、と妹熊と兩箇で百方力を盡して黒公を捉へようと、毎日苦心して居るが、水中の月を撈ふ猿猴同然。勞して更に其甲斐がない。敢て食はうといふのではない。其口が憎くいから、逆引捉へて弄つてやらうといふのが兩箇の魂胆である。然るに奴も白徒それと知つて、私共が木のぼりを知らぬといふ弱味につけ込んで、此方が飛付かうとするとなラ／＼と二三尺も攀ぢ登つて、一

昨日も出でと長い舌をペロリと吐く。かうなると彌癩に觸るので、木の陰へ廻つて、再び下る所を引脚へて遣らうとすれば、容易に下りて來ぬ、いな下りて來ぬばかりか却つて梢にかけ昇つて、私共の所の杉の枝と栗鼠の宿の樅の枝が、すれ／＼位に交叉して居る邊からホイと此方へ飛移つて見せつける。此飛移りに失錯つて、若し落ちて來ることもがなと、兩箇は下て大口開いて、此中へ落込むやうにと願へども、中々落込みさうにもないのである。母熊に勸めて、木に登つて彼奴を引捉へて欲しいと言つたけれど、母熊は首を左右に揮つて駄目だといふ。幹に登り梢を傳はつて栗鼠を追廻すことは、母熊と雖到底力の及ぶ所でないといふ。たゞ一つ栗鼠を捕へる方法がある。それは奴頗るオセツカイな飄輕者である故に、熊が空眠をして居るかさもなければ死んだ風を扮ふて居ると、速かれ遅かれ屹度ヒヨカヒヨカと降りて來て、鼻の上に止まつて見る。此機を外さず引咬へるのである。栗鼠は概して熊の好物であるが、私は實際餘り好まぬ、毛ばかり多くて喰へる部分は極めて少い。但し栗鼠の族でも喰へるものゝ無いでもない。

黒公に次いで啄木鳥のコッコ君が常顧客である。空寂の山氣は沈として一葉の翻る音すら亮かに聴取れる。樹立の間を洩れて聞こゆるコッコ、コッコ、コッコ、コッコの響は一種空廓の響を齎らして終日そこかしこから聞こえる。日も夕陽の頃となると、啄木鳥は木の頂に宿を求めて、齎から齎へ、仲間も互に呼應して、フキ、フキ、と尻聲長く二聲連続した透つた聲で鳴渡る。此聲たる一種何とも言へぬ悲調を帯びた長鳴で、之を聴くと、一種異様の感慨に撲たれるのである。私は此啄木鳥は至つて好もしいと思つた。其扮装は白と黒の模様入の衣に、輝き渡る紅の雞冠。至つて快活な性質で、年百年中斷絶なしに仕事に忙を極めて居る。木の根方へ下りて来ては元々として、コッコ、コッコ、コッコ、をやらかして働いてゐる。と又上つて行つてはコッコ、コッコ、コッコと幹を啄いて、遂に二木の頂を極め、全く遺漏なく一木を點檢すれば、電閃のやうに他の樹に飛移つて更に此單調な響を立てる。渠が欲する所はデムシで他の蟲類は之を願ひても見ない。コッコ、コッコ、コッコ、デムシ、上つては又コッコ、コッコ、コッコ、デムシ、又上つてはコッコ、コッコ、

私共の所の杉の木は頂邊が枯れて居た。コッコ君は毎日のやうに茲に来ては仕事を初める。下に居る私共には枯木の屑が霰のやうに降かゝる。恰も或日ムク／＼と肥つたデムシが一疋、私の鼻先へポツリと落ちて来た。怪しげな小さいものと思ひ乍ら、御馳走に成つて見ると好味い。實に滋味い。毎日お務のやうにやつて来てコッコ君はせるも、恁様なものが居るのなら無理もない次第である。若私に出来るなら昇つてデムシが索りたいと思つたが、生命あつての物種だ。朽木のぼりは實に危険。

此後一家打揃うて遠征の途に上る。行々の途上、森林中には随分種々な御馳走が澤山あるものだといふことを順々に知るに至つた。先づ、朽木の下に數多の獲物が潜んで居ようとは、誰しも最初鳥渡は思ひ付かぬだらう。縦令栗鼠、野鼠共が居ないにした所が、日當の悪るい物陰の地には、必ず白ツボい液氣澤山の菌類が生へて居る。此菌は極めて佳い味を有つて居るものである。殊にそんな所には小虫が群を成して居るので、生へ抜ききの儘逃げて行かぬ菌は第二にしても脚の生へた蟻類の類——蟻、蝨、

テ虫、ケダの類から先づ手速く收めて行くのが順當である。石をメクるのは随分骨が折れるけれど、骨折甲斐は充分ある。大なる石の下などには澤山の獲物はあるのである。

小虫は微細なりと雖も餌としては一と纏にして喰べる。蟻は實際私共熊の餌として恥しからぬ味を有つたもので、野獸のうち、殊に同類相噬の仲間では一度に貯め食といふ事をやつて、次の獲物のある迄は空腹を抱へて居るといふ手合が多い。然るに熊に於ては之とは異り、所定めぬ浮浪の生活をすれば炎天の日中を除けば食を索つて歩み、食盡くれば更に歩み、一日に二三十里も歩むことは罕てない。

恣様な風な其日ぐらしの渡世では、何を餌としているかといふに、先づ青物類——百合の球莖、白菅の根、雜草の根、野生の葱、若芽の蓄及嫩などが主なもので、道すがら嫩を嚼ふ。木根を引抜く。朽木の皮を剥り下に潜める小蟲を拾ひ、小石を起して隠れた蜥蜴、野鼠を捉へる。さもないければ蟻を獲ふといふ階段で、決して前程を食ふことはないのである。

水邊の夏

借愈夏に成れば多く溪川の邊に下る。日盛の燦くが如き炎天には茂みの陰か水邊の藪林の内に暑を避けて、夕暮に成れば流れに出でせらぎの飛沫に當たつてわづかに涼をとる。水涯には種々御馳走がある。第一牧草に水草の根、其外蛙も居ればさまざまの小蟲が藪に隠れて居る。私共の好んで行く浴場は沼のすこし上部のところ。沼は可なり深い、之に注いで居る川の水は浅い。仔熊の私共が深い處で肩高位の深さに出来て居る。沼の縁に差し出た木の枝には例の白と黒の翅の生へた翡翠がツクネンとして、毎も同じ小枝に止つて居て、私共の近づくと如何にも邪魔だといふ風に、退けよがしに轉づる。私共は素知らぬ顔でノサリノサリと水の中に入つて、枝の周圍を歩み廻る。すると先生怒り出してブン／＼として自分の方で逃げ出して、魚も居ない所へ行つて了ふ。

茲で魚を取る方法を教はつた。魚といふものも初である。併し鱒を自分で

捕へるやうになれたのは遙に後年の事に属する。私共は只魚籠持然として痺を切らして、捕る傍に立つて、切りと捕る様を見る役目であつた。大抵草の生被つた崖の下か、枝の差出た岸近くに魚は居るので。茲には居さうだと思つたら音のせぬやうに、成るべく渚近くの岸の上にデツと静に横に成つて、一本の枝を水に、魚の後からソロソロと伸ばす。假令勘付いて遁げ出しても手はその儘に出して居るか、成らば屈く丈に伸ばして待つてゐる。すると其うちに一度は必ずもとの所へ歸つて来るものである。泳いで来ても尙手先をムズリともさせず、静かに俟つて居れば魚は何の氣も着かず圍々焉として歸つて来る。其歸つて来る所を發止と打つのである。

此時五六寸計も遠方で止まることがあるが、此時そこに手が届けば只一ツ時の辛棒で、もう占めたものである。魚は水面に群る蚊を吞まうと思つて、ピンと水を離れて飛上る。幾度となく飛上つて居る内、何時とはなしに釣のやうにして居る手の瓜の尖に尾が屈く處まで来る。其時コクリと手首を動かす、魚の頭の脇に手先を遣つて、屈くやうならバチリと一つ、力を罩めて打つ。

つ。打たれたら渠は眩暈し、銀の棒を抛げるやうに潑ばされて、後の岸にはね上る、そこを手速く收むるのである。鯨といふ奴は實に結構である。肥つた薄黒い肌は赤筋の入つた、山川の鱗は海に滋味い。併しこの時手をやる事が早過ぎては失敗である。又手尖が魚の胸に觸つたらそれが最後。魚は逸し去るだらう。併しながら此待つ間の呼吸が頗難事。私はよく失策つて、食事の際には兩親熊の裾分を頂戴して居た。段々慣れた後には巧く捉へるやうに成つたけれど。

全く日が暮れ果つると溪から上つて、山腹の草原に寮込むこともあるが、大抵は一晚中彷徨さ廻り、日の出前溪に下り、日の入迄の間ねこむのが常であつた。

夏の月夜などを山中で彷徨くのは寔に爽快なものである。雷が鳴つて、ドツと一時に夕立のした後、雨餘の大地に充滿した松の葉の香などは又格別、莓の實が漸く黄み初めると青莓、ツルコケモ、野莓、些し後れて晩莓。凡そ果實の中、その外食へるものといふものゝ中で、私が仔熊の時の最初の夏

に味べた毒程甘味かつたものはなかつた。

人間と雷挺

かくの如き有様で此夏も水草を追ふて轉々流浪の生を送つて居たが、或日奮の故巢を訪ふてそこに一日を暮すことに成つた。

丁度灼々と日輪の輝く暑い日盛であつた。ふと誰かやつて来る氣配がするのて、一同は午睡の夢を破られた。折ふし風は物の氣配のする方から通ふて居たので、見ずして其来るものゝ何者たるやを知つた。彼は私共同族の熊である。何て此日中を熊たるものが遠しくも救の中などに憑圖ついで居るだらう。負喧嘩か、但しは外に大事でも起つたのか。と目を時て、待つて居ると、推量違はず起つた起つた。開闢以來の大事變が起つたのである。

後方から颯と一陣の勁風を捲いて、私共の居ると知る迄は眞一文字に此方を指して駆来る一頭の熊がある。渠は吾々の從兄分の寫色の大熊で、一本の脚は跛を曳いて全身は血塗である。それと見るより怪我をして居るとは直ちに

に知れた。私共の姿を見るなり忽ち大地に腹這つて、眼を挑む體度をする所から察すれば、余程氣が細く成つて居るらしい。但し此方は深く同情を表したので兄貴は初めて安心して私共の近くに寄つて來た。

「奈何したといふんだい」と父熊が訊ねると、何事ならんと氣配つて居る一族は、目を見はり横に控へて聽耳を立てる。

「人間だ」と高く唸つた。此一言は深い底から響出た、此世の聲とも思へぬので、私共一同は全身にゾツと悪寒を感じ惣身の毛が彌堅つを覺えた。

人間だとよ、あの人間だとよ。父熊から豫て聽いて承知して居るあの恐ろしい人間だとよ。父熊も眞物は未だ見た事はない、話丈で、祖父熊も見事はない。只我々一門のものがズツと以前、麓に下つた時に聞き、毎年雪の頃に平地に出かけ、春に成つて歸つて來た獸達から幾度となく聞かされたばかりであるさうだ。狼は人間を能く知つて居て非常に恐ろしいものと言つて居る。鹿も知つて居る。名を聽いたばかりでもブル／＼と震へる位に懼れて居る。大虎も知つて居る、此奴は恐れもし且つ深く／＼憎んで居る。凡て我

人間を知つて居るといふものは、一箇として恐れないものはない。それに吾々がまだ人間を知らぬのは先づ、と喜んで居たのに、今は其奴が来たのである。而もあの強勇な大熊が見る影もなき有様に零落れて、脚の骨を打碎かれた所から察すれば、世間の評判も決して詐ならぬ事が知れる。

大熊は事の始終を物語る。語る所に據ると、渠はもと此山嶺の、一つ後の谿間に親代々棲つて居たのであるが、互同様、人間の来る氣遣はない、と高を括つて安心して居たさうだ。處が春に成つて冬籠の床から寤めて見ると、其人間が来て居る、而も間近く迄寄せて居たといふてはないか。最も初の程は極めて少數であつたのが、漸々と數が増えて、来るは来るは、遂には山の中まで分け入つて来る。然も何故に茲に來たか其理由は些も判らぬ。皆谷底に群れて居て、何か切りに穴を掘つて居るらしい。さればと言つて萬更此穴に棲み込む様子も見ぬので、尙能く見て居ると、渠等は木を伐り倒し、長さを定めて切り、其を組んで家を構へる。穴の内に起臥した方が余程手間も取れず、棲心地も好さう

なものに、さりととは恐やと、恐ろしい内から嗤つて見て居つた。木を伐るにした處が親譲の齒を用ふてはなく、棒のやうなもので撲つて、撲り倒して居る。

然るに茲に又渠等は火といふものを木で拵らへ、家の前で毎日、焚いて居る。それは實に恐ろしいものだ。人間は之を些も恐るゝ氣色なく、平氣で側に寄り付いて居る。夕方からは一層盛に此火を焚く、而して食物は生ごと食ふことなく、皆火で焙つて居る。

大熊の話す所は略かうである。

このやうな話は私共も以前聞かされて居た。今大熊さんの言ふ所は以前の話と符節を合する如く合ふ。さすれば今迄正可、と鼻尖て待遇つて居た所も、かう實地の経験に逢つては彌風説は確實、人間は恐いものと定まつて、ひとり唇の破れた爲に齒が寒いどころの騒ではなく成つた。

然るに大熊さんの話で尙吃驚するのは、こんな事もあつたさうだ。此頃の晩に渠は人間の中に出掛けて見ると、渠等は材木造の巢の内に眠つて居る。

見れば焼肉が横にあるので、有無も言はず平げて了つた。サア其好味い事好味い事。其味が骨肉に沁みて忘れかね、其後といふものは毎夜く出て御馳走に預つて居た。

所が昨夜、モウ人間も大概寐静つた頃と、時分を見計らつて行つた相だ。すると未だ家まで入らない前からブーンと芳しい焼肉の香がする。ハテ何處からか不知、と見廻せば家を組立てる積りか何かで、溪川の縁の立木を听倒したのが、恰熊の肩高位に積つてあつた。得も言はれぬ香はその積木の間の切株の上から來て居る。是だくと早速そこへ歩み寄つて行つた。

その切株に鼻が屈くか屈かぬ内、家の前に物の氣配がする。何ぞと見返れば藪には隠れて見えなかつた、積木の後に人間が腹遣になつて居る。と私がふり向く途端、何か棒のやうなものを此方へ向けた。(いふ迄もない、是は豫々聞いて居た雷挺で、人間は間を明けて居乍ら生物を殺す飛道具である其利那、奇麗な火花か棒の尖からバツと散つて、野分の風に木の條が折るやうな響がして、足にビリと痛いものが觸つた。此が見る通りの怪我をさせた

曲物で。それと見るより何かはなしに逃げた。急に臆病風から誘はれて一溜もなく、一目散に山の中に逃歸つた。すると跡から又續けざまに、ピカリ／＼と火の玉が飛んでパチン／＼と響がする。五寸と置かぬ身邊の木の幹といはず岩角といはず、何者か劇しく音を立て、衝着る、木の片石の碎が箆のやうにふりかゝる。

逃げるも逃げたり後をも見ずしてひた走りに走つた。痕の痛に耐兼ねて、或時は糞の中で一と休、またもや息を切らして遁出した。落行く先は何處とはなしに、人間の居ぬ所といふので、道を擇ばず道々の體で闇雲に逃げた。と、息も吐き敢えず物語して居る内にも、母熊は心から哀を催ふして、此不幸な大熊の痕跡を嘗めてやつて居る。父熊は首をうな垂れて、太い息を吻と吐いては、怒つた時にするやうな恐ろしい聲を立て、獨り噎つて居る。私共仔熊は世はどうなる事かとわな／＼震へ乍ら、さめ／＼と泣いて話を聞いて居た。

サアそれでは如何したら可からう。人間は未だ遠いだらうか、といふやう

な事を私共仔熊が口を揃へて尋ねる。大熊の怪我が夜中の事で、今は午。三
 四時間は草叢の中に寝て居たとして、餘は一生懸命に三本脚で跛を曳きなが
 ら、眞一文字に此方へ走りづめてあつたといふ。では人間の速力は速いかど
 うかと訊くと、餘り速い方ではない、後足二本で歩むのだから頗る緩慢く見
 える。而も今迄四本の足で歩む人間は見えた事がない。二本足で歩くのは木の
 家を造るのと同じく、随分恐らしい話だといふ。兎に角人間は夜分には滅多
 に外に出ないのだから、まづ當面の危険は此處にはないと言つても可い。其
 上人間の目指す處は大抵谷間ばかりで、到る所には大な響を立てるのだから、
 直ぐにそれと知れる。縦令知れない所で遠方から人間の臭がする。幾ら人間
 の香を知らない熊でも人間の香なら直ぐ知れるものだ、と物語つて聴かすの
 である。

これで稍安心だ。はじめて聴いた許では青くなつて胆をつぶしたが、是聴
 いて幾分か落着いた。併し兎に角我々の生涯も今後は漸く多事に、形勢も勢
 からず穩かならぬ事と成つた。今迄は行かんと欲する所に行き、爲やうと思

ふ事をして憚るものもなければ咎め立をするものもなかつたが、今や人間が
 手近に居る。あの生殺の權を掌にしてゐる人間が、間近くに押かけて来て居
 るのだ。而も腕づくして勝つて他の動物を殺すのではなく、私共には到底敵對
 の出來ないやうな、又譯の分らぬ隠微な術を使つて生物の生命を奪る人間が、
 眉目の間に迫つて来て居るかと思ふと、夜となく晝となく臆病神は影の如く
 身に附纏ふて離れない。薄の穂のゆれるにも若し人間の來るのではないかと
 心を配り、風に鳴る枝の葉々の囁きも雷艇の響かと驚かされて。縦令口に出
 して人間の事を話し合はぬ迄も、一家の者共は皆誰も彼も、念頭去らず此勁
 敵に心を惱まされぬものなく、飛目張耳、殊に鼻をひこつかせて競々たる月日
 を送つて居つた。

大熊は、ナニ此處なら大丈夫だ、併し成るなら此憎い人間奴から遠ざかつ
 て居た方が得策だ、と言つて居た。無理もない、生れも附かぬ不具にせられ
 ては誰がさる憎むべき生物に接觸することを望まうや。
 大熊と別れてから父熊と母熊は、今後の進退に就いて評定を始めた。此日

といふ此日は夜の目も鎌々合はず、食を求めて出歩いて居る内も、風聲鶴唳。あらがねの大地踏しめ歩行いても、身は宛然に薄氷を踏む思。疑心暗鬼を生じて、見るものとして聴くものとして、嗅ぐもの毎に魂驚かさぬものもなかつた。常に風上に鼻を向けて歩み、地を掘る音の高く響けば人間に聞えはせぬかと恐ろしく。木の皮を剥つてヂムシを捜す内圖らず高い音を立つれば父熊が、怖ろしい顔付で睨付けては陰る。此時母熊も後から尻部を掌でビシャリと叩く。而も索め出したヂムシは兩箇で奪つて頬けて喰べるのであつた。

此後幾日間は言ふに言はれぬ焦慮で、其不安の状體も永續した末には神経衰弱症を惹起した。私共が初めて人間を見るに至つたのは大略こんな徑路を踏んだ後の事なので。

始て人間を見る

一生經つて見れば物の道理も自然と判つて來るものだ。一身上に降つて湧

いたといふ災難でもよく考へて見れば身懲りからか、さもなければ物珍しの惡戯より、要らざる所に手を出した報に外ならぬ。私が豪猪に虐められたのは全くの物數奇からであつた。大能の災厄は愆に迷ふてぶた食つた報である。私共がさばかりに思ひ怖れた人間に接觸つたのも愆と好奇心の二筋道に掛つたので、恐いもの見たさの好奇心がその七分通りはあつた。

大熊の話があつた後は用心に用心を重ねて居て、而も不識々々人間の居る方角へ迷ひ歩いて居る。コリヤ浮雲いがと氣は付いて居ても、どうも其所には口へ出しては言はれぬ日はくがあつて、誰も皆口を緘み、それと覺しき方角へ絶えず進んだ。ア、人間は恐くないが煩惱が恐ろしい。只大熊の話の人間とはどんなもの、焼肉の味はどんなだらうと、淺ましい愆に驅立てられたのである。

恣様な風で十日か廿日位も、彼方此方と彷徨いた末或る朝の事。生れてまだ聞いた事のない物の響が行方の森に響いて聞こえる。丁、丁、丁、丁、と時を置いては又響き、又止んては又響く。ハテ何だらう。啄木鳥の音とは違

始て人間を見る

ふ。丁、丁、丁、丁、丁。似た所はあるやうだが、掛籠の鳴音でもない。丁、丁、丁、丁、丁。全く人間の爲す業に相違あるまい。

此響は遠方から響いて來て居るのではない。風向が違ふので遠く聞こえる。迂回をして風下に出るとブーンと強い人間の嗅がする。私は毛髪の一時に豎立するを覺えた。見れば父熊は力なく首を垂れて、鼻尖を喉毛の裡に深く埋めて居る。其毛髪はツンと堅つて、非常に強い感動を起した時の状をして居る。

忍びやかに、足音を偷て、尙も音する方へ近づいた。寄るに随つて人間の悪臭は咽返るばかり強くなつたが、藪に遮られて姿はよく見えぬ。輒ち朽木の仆れた上に窈と乗つて、四箇は此踏臺の上から藪の草木の梢の外より、十間計も向に働いて居る奇妙な姿を認め得た。是が人間といふものである。大熊の話に違はず後足二本で立つて、前二本の肢で木を伐つて居る。私共の聞いたのはその音である。渠は一生命に成つて、丁、丁、丁、丁、丁、丁、丁、丁、丁、丁、丁、丁と働いて居る。手に持つて居るのは、今では斧といふものだと知れたが、其折は例の

雷挺に相違ないと思つた。其棒で丁、丁、丁、丁、丁の響を立て、居る。成る程木の碎片は霰のやうに飛散る。やがて斧の手を休めて、何物かを拾ふやうな姿勢で地面に俯伏た。急に姿を見失つたので妹熊は、爪立つて伸上つてよく見極めようとした。途端に生憎足が二つて、ゴトリと音を立て、下に轉げ落ちた。此時我を忘れて咄嗟と叫んだ妹熊の聲の高すぎた爲、人間は耳聾くも聞答め。スックと立上つて四邊を眺めた。私共四箇の視線と人間の見廻す視線とピッタリ行逢ふや否、寸時の猶豫もあらばこそ持つたる斧を抛棄して、人間は一目散に逃げ出した。私の考では何でも渠は生命限りに駆出した積てあらうが、大熊の言ふ通り後足ばかりで駆けるので速力が極めて緩い。路は下り坂なり後足で駆ける姿。遠望頗る奇観であつた。

かくと見るよりデツとしては居られない。早速跡をつけて私共四箇も駆出した。併し捉へてどうせうといふ考は些しもない。捉へた所が何の役に立つものか知らなかつた位だが、遁げ行くものを追もかけず、見す／＼逃がすといふは如何にも出来ぬ。若此時捉へようと思つたら掌を返すより容易に捉へ

始めて人間を見る

られたのであらうが、雷艇が有らうかと心忖れて、可也の距離で踵て行く。私共の駆行くのは藪といはず藪といはず、木立の中でも流の中でも、蹴散らして行くので、人間は勢からず周章して、幾度か晴艇返を打ち、這々の體で逃げて行く。其姿の淺間しき滑稽さ。可笑さと鶴意との餘り思はず快哉を連呼したのである。

一體追ふことが無上に愉快な事である上に、遁げる方が自ら萬物の靈長など、大な貌をした人間と来て居るから溜らない。平生濫面の父熊までが得意高幅、喜悅の餘り咽喉を鳴らして駆出して行く。

其内段々と人嗅い臭は多くなつた。歩調を緩めて下つて行つて見ると、木造の、家といふものだらう、向に見を出した。鳥渡立停つて靜動を伺ふと、人間は尙足に任せて家の方へ逃げる。家の前迄着くと、スボリと中に入り、入違へて四五箇の人間が出た。見れば手を舉げて何か切に語り合つて居るらしく、太く激した模様である。其内二人は家の中に引返し、間もなく取つて返した。正しく雷艇を持出したのだらう、と信じたが、果して當つて居た。

「此度は我々の逃る順番だ。サア逃げる」とひた逃に逃げた。

昇り阪は降りより速力が出る。今は一生懸命なのに、一體熊は昇りに妙を得て居るので、風のやうに驅昇つた。雷艇の利く距離はよく知れないが、何でも無難な方へ逃ぐるに如かじと、息も繼かず逃げた。二時間計は殆んど無中。何事があつたか全然知らずに、逃延びて吻と一息。熊が急げば二時間に十里は行く。是が初めて人間に會つた次第だが、私共は見ぬ頃は只恐ろしい者とはかり、人間を誤解して居つた。是ならば案じた程のものでもない。

前代未聞の大珍事

が、まづ面會は無事に済んだもの、七里結界、もうくまたと逢ふものではない。此度一度で懲々した。思ひ出すさへ身の毛が竦立つ。夜は通宵追はれ詰めて果なき山を駆廻る夢。四邊に心を配り物にふれ事につけて魂銷たことが幾度とも知れず。漸く葉の裡に隠れて僅に目睫を交めるとすれば儼に

立つ人間の姿。つるべうちに打出す雷艇の響。殿のやうに飛亂るゝ木片の屑。止むなくそこを逃出して彷徨ひ廻る内、大熊の如に前足を打たれ、流て洗ふ間もなく、来る日も来る日も山の中を追はれ通して駈廻り、峰を越え谷を涉り、森を潜り獲を分けてゐると、母熊が丁と叩くに眼が痛めて、まア夢で可かつたと冷汗を拭つたことが幾度とも知れず。聞けば私の呻吟聲で母熊は、
 ることが出来なかつたさうである。

併し私許が憐れくして居た譯ではない。昔の者の氣質が此頃は妙に一變して、氣が苛々しくなり憤りツボクなつて、樂しかつた昔の氣輕さは何處へやら落して了つたやうである。私でも妹熊でも鬨つたり飛んだりする時は、「コラッ、静にせい」と頭から一喝を浴せかけられる。いや我々一家許ではない山のものは、人間といふと一縮に縮み上がるやうに成つて居る。

所が茲に暫時の間、人間の事を忘れるやうな大事件が起きた。

私共は故里の周圍を彷徨いて、去りもやらす安らひも得ず、脚踏懸々として日を送つて居た。それといふが、此所なら大丈夫だと思はるゝ上、土地の

案内は一から十迄知つて居たのだから。其頃の數週間といふものは頗る暑氣が強かつた。土地は龜裂が入つて、前には押して流れて居た溪流が涸れ果て、石の上を水がポツリ／＼と滴る位迄なつた。かう成ると朝から晩迄水邊の草叢を寸時も離れず轉かつて居た。

ある日の緯。もう暮方に成つたのに、落日の光は今にも沈む夕の日の色とは見えぬ位強く。彌日が入つて了つても西の空は依然として紅く照り、夜の空も闇は来ないで益明るなるばかり。空は死んだやうに成つて、風の氣は些もなく、頭の痛む熱苦しい晩であつた。此晩に限つて誰も快く寝付かれない。終夜父熊は西の方に鼻を向けて嗅ぎ乍ら、何か獨て「ウー、ウー」と唸る。其うちに夜は明けたが西の天の朱いのは些も除れない。それに灰色がいつた雲が掩被せたやうに遠山の上に掛つて、紅いものと正體を藏して了つて居る。どうも氣分が悪るい。耐らなく成つて床に入つたが午頃になつて復起上つた。寝て居ても些も氣分が好く成らぬ。起きて見て事の仔細が漸く判つて來た。

眠つた間は極めて僅であつたが、其間恐ろしい夢にうなされ通し。人間が

来る雷聲が来る。足の骨を打折られる。恠様な事で夢が破れて見ると、西の方から微風が僅かに吹いて、其風には鼻を刺すやうな苛々した臭が混じて居る。いや酷い臭ばかりでなく、風につれて其方角から怪しげな雲が飛んで来る。満山は漸々と霧のやうな薄い氣に包まれる。平素なら日が上れば消ゆる霧の霧が今日に限って段々と厚く立軍めて、殆んど日光をも遮るまでに成つた。ハテナ此不思議な霧は山の中を動いて居ると見える。さう思つて居る内種々な鳥共が物に怖れたといふ風に遠しく翔り廻り、栗鼠はペラ／＼饒舌り乍ら飛んで来る。凡そ生けるものとはいはず、動いて居るものなら何でも皆申合せたやうに悉く西の方から移つて来て居る。聞けば何方も全じ事ださうだ。

「世界は火事だ。さあ事だ。逃げる、逃げる。逃げた、逃げた」と栗鼠共は叫き散らして私共の頭上を、木から木に飛移つて行く。「火事だ、火事」と更知鳥は飛び去りがてに啼渡る。「火事々々」と懸巢鳥は鳴連れて飛ぶ。狼は「世界の最終が近づいた」と觸れ廻つては、ヨチ／＼と足を曳ずつて泣いて来る。

虎は鬚を逆立て齒嚙をなしては吼え乍ら、側の物を奴鳴り散して八當りに當り散して、洞巻いて居る烟の間を暴び狂ふ。鹿は眞一文字に駆け来ると、スカツと立停つた儘、暫く惘然と立つて居たが、又た急に驚いたやうに藪の中に駆込んで了ふ。木の上を飛ぶ鳥、地上を驅ける獸。皆てんやわんやの大混雑で、全じ方角へ抜けてゆく。

やがて後れて来たのは我々の同族で、親子四箇の道中姿。仔熊は泣く／＼も親熊の後から踵いてくる。見れば私共と同年配の年格好である。此大混雑のうちにも私共丈がテツとして居るのを見て小父熊は内の父熊に逃げようぢやないかと訊いてゐる。父熊は幼少の昔、山火事に逢た時、祖父熊の智慧で水中に潜つて助かつた事があるさうで、此勸告には首を揮つて應じない。免ても今に疾風が起つたら、幾ら逃脚の速い獸でも助かる事は難しい。餘程火の脚の方が速いから、初めの二三日はどうかして逃げもせうが、終には喰はず睡らず駆りづめては疲勞れ果て、而も何處へ逃げて可い方角の辨別がつかぬやうに成らう。若し人間の方角にでも逃込んだら袋の鼠と成る譯で

ある。そんな浮雲い話より水に入るが上策だと、反對に説いて聴かせた。小父態は周章て居て氣が轉偶して、も居るものか、此話は碌に耳にも入らぬ體で、冗な時間を費したといつた風に駈去つて了つた。私は父熊も去れば可いにと心中密に願つて居たものを。

彼是いふ間に黒烟は益盛んに漲つて来る。もう耐へられない、目も口も開けられぬ。妹熊は苦しさと恐ろしさで泣出す。見る／＼三十間先は烟の爲めに少しも見えず。熾々たる天地の間、南から北へかけて空半分は烟の雲に燃えて居る。火は野分の風に松の葉の友ずれの音かとばかり、メリ／＼と燃上る音が手に取るやうに聞こえる。もう早彼是夕暮である。父熊は歩を速めて駈出した。孰れも後れじと駈出したが、それは真西に向つて流れて居る溪川の方角、火の燃えて来る方角で、大方ならず氣味が悪い。一體火事は近いやうて遠いものだが、會釋なく捲来る烟は消去つた火の粉と共に雨の降るやに降る。烟こそ見えぬ空は火のやうに赤い。耳も聾がるばかり、生木を焼倒す音が劇しく響渡る、火事場の間近くにある事は最早疑を容れぬ。親熊達は

ザブ／＼と水中に飛び込む。後れじと飛び込んだ。鳥渡々々水を離れても見たが、到底居溜れない。凄じい勢で焼け擴がり、焼け落ちてくる音は一刻一刻に劇しくなり。天を焦した朱の色は彌濃くなり勝つて。前面は渦を巻いて漲つて来る黒烟で見も出来ず息も出来ず。世は真闇すみに包まれて、時々發々と風が持来る火氣と黒烟と混つて、焦熱地獄の責若に逢ふ心地。もうかうなつたら百年目と目を瞑つて觀念し、頭を水中に突込んだ。

此時沼の中のものは我々許ではない。翡翠は見えぬが鼠色の狼が一雙來合せて居る。狼は山中でも第一の智慧者だと兼々聽いて居た。此ものがする事には間違はなからうから、父熊が此所に留つたのはマア可かつたと、大船にても乗つた氣に成つた。其内に五六箇連の鹿の群が驕然に沼の中に飛込んで來た。多分此處に停る積であつたらしい。然し逸る心は長く尻を坐えない。一つは狼に恐を爲したのか、頓て一箇が物に撞へたといふ風に矢庭に飛出すと、他のも皆バラ／＼と跡を追ふて森の内へ逃込んだ。

私共が沼に入つた時には一つ山を隔てた向ふの山で焼けて居たので、上の

山は黒い壁を作して、吹出す烟は天地の窻から一時にはみ出すかと怪まれる。此所に火の來るには谷を越さねばならぬ。谷には風がないから余程時間を要するだらう。と待つ間もあらず、さきの黒壁の上の天が活と明るく成り、炎々として真紅の烟はグワ／＼と喰み出す烟の間から、メラ／＼と幾條の蛇のやうに隠見する。一陣の風が颯と吹渡ると、ゴ／＼と音を立て、千丈の炎の舌は全山を一呑に呑盡す勢で押寄せ來り、侵掠の威を逞しうする。其凄じい響は坤軸も碎くるかとばかり。やがて又横さまに煽り立てる風に伴ふて火足は木から木に移り、枝から枝へ擴がつて、残さず剩さず物もいふものは皆、其猛烈な力の下に、何物の障礙をも燒盡して、威服させて了はねば措かぬといふ威を示して居る。見る／＼全山は一面の炎と代つて、世界の大破壊が行はれて居る光景。吾々はその大火の真只中に在るのであつた。風に追はるゝ火足の速いことを父熊が嚙に話したが、今眼のあたり見て成程と點頭かるゝ。若し沼を去つたら必然燒熊の運命は免れなかつたらう。後で知つたら火は流の兩岸から燃擴がつて、此沼の所で二手に分れ、先で合し

て一つと成り、燒え擴がつて行くのである。

此時は熱さと烟とで目も口も開かず、水中から顔を出すことも出来なかつた。時を置いては頭を擡げ、息を吐いては又沈めて居た。此苦患は何程の時に直つたかよく判らなかつたが、實に一刻千秋の思がした。全く火足が遠ざかつた頃には沼の水が湯に成つて居る。

フト此時面を擡げて見ると、父熊が水面に頭を擡げて居るので、力を得て頭を擡げた。暑さは随分強かつたけれど最早恐ろしい音も弱り、烟も大方薄らいて、目も口も開く。見ればあの恐しい火柱は、一つ後の山頂に立つて、今荒び狂ふて燒下つて居る邊は古里であらう。あの杉の木も燒けて居るに相違ない。何方向いても真黒く焦げた野面、太い幹ばかりが高く残り、捧坑のやうに立つて未だブス／＼と烟を擡て燃えて居る。嗟々、つい今の今迄立派に生繁つて居た草や木や、時の間に變れば變るものか、見る影もなく消去つて、只残るものは消殘た木に立昇る烟と、圓柱狀に列立つた黒焦の立木ばかり。物凄くも淋しい眺と成つて了つた。斯の如くして風の暴ぶまに／＼、山

野の續く限、東の方へ、火は其侵掠の暴威を揮ひつゝ走りゆくのであらう。生物の類はどうなつたらう。三四日前の獸や禽は巧く逃終せたらうか。暫来て復逃げた鹿は炎の下に捲込れはしなかつたらうか。止れと言つても止まらなかつたあの熊だの、栗鼠、狼、虎、種々の群鳥は果して逃延びる事が出来たやうか。いなそれより細い蟲類は、一匹残らずゴロ／＼と無残の焼死を遂げたに相違ない。

併し其遭難の光景は想像に及ばぬ所である。思出して可笑しいと思ふのは妹熊が水中に居耐えずして、頭を出すのを突込み／＼無理に頭を浸させた事である。目鼻の痛かつた事は言語の限りではなかつたけれど、かく生延びて見ると、何となく有難いやうな氣持がする。

所て今後何方へ行くべきかと劈頭の緊急問題である。此荒烟の跡に何處から食物を求めめるか。こんな評定最中に狼が飛出した。難なく岸に上つて何等の故障なく歩いて居る。狼の雌は沼の中から眺めて居た。歩む間鳥後鼻を地上に着けるなり、狼はキャツと叫んで水の内に馳戻つた。鼻頭を焼いたさう

だ。未だ地面は頗る熱いのである。私共も問題の定まらぬ内に耐兼ねて出たが、未だ随分と地が焼けて居るので、水に冷えた足裏も最初の間だけ。やがて居留らず水中に戻つて来た。

黒漫々

何時迄待つたら地が冷へるであらうか。黒焦になつた木の枝の上には枝が重なり、灰となつた木の葉が重なり、未だこれが火事の翌日迄到る所に青い烟をあげてブス／＼と煙つてゐる。時なるかな、此日は、午過から夕立が起つて暮まで雨が降りつゞけ、雨の上つた頃には地上の烟も大方静まつて来た。併し大木は未だ烟を揚げて、雨の中にも幹の内から燃えて居る。燒盡して了はねば止まぬと見える。五六日も経つてから火事跡を掻いて見ると、底は手も觸てられぬ熱さである。何が何と言つても、かゝる荒涼たる光景は到底も想像に及ばぬ所である。滿目一點の青みもない眞黒々の荒野は茫々として、燒殘の幹はズラリと並んで黒木の帆柱の如く、中には殘つた枝が四方に綱の目

のやうに擴がつて居るものもある。木々の間は踏む場もない迄落敷いた黒熊の枝が、縦横無盡に算を亂し狼藉を極めて居る。世界は黒だ、何方向いても黒、黒。世の黒きこと宛然我々の毛色の黒さが如く黒々として居る。

水邊には併し焼残りの木の根草の根が食物となるので、茲に久時足を停めた。只困つた事は此種な根を掘る際、口といはず鼻といはず、黒い塵埃が附着いて、水で洗つても容易に除れないのと、鼻孔や咽喉へ煙臭い煙が入るのであつた。夕立の効益も只束の間で、次の日には悉皆乾上つて、微吹く風にも黒い粉の雲は容赦なく飛散つて耐らない。吸込ひとクシヤミが出る、眼に入つてはチリ／＼螻して涙が零れて、白兎の眼のやうに血走つて赤くなる。

一生涯に此五六日間位辛い目に逢つた事も餘りなかつた。全世界がかくの如く烏有に歸したものと思へば、所詮免るゝ道は無いのだ。然し父熊は流に隨いてさい行けば何時か此苦患を免るゝ事が出来るのだと言つて居る。て湖つた。溪川の縁に沿ふて湖るも湖るも、泉原を極め盡し、河が溪川となり、溪川が小流と成り、小流が山間を落つる點滴の泉となる所

まで湖つた。而して更に燒山を越えて其谷間の泉源に沿いて漸く川下に、此度は逆に取つて降つて來た。世の中に眞に恐ろしいものといふは様々あつても、冥々として全く物音のせぬ深山ほど心細くも物懐く恐ろしいものはあるまい。以前ては夜となく晝となく禽や獸の類が談話をするやら歌ふやら、笑ひ罵り狂ふ聲、それは／＼賑かものであつたが、今となつては滿山空廓、一鳥不鳴山更幽なる情趣も、生きて動いて居るものは只吾々の一行のみかと思來れば、心細さが身に沁みる。

今下つて居る川筋は何時ぞや人間に逢つて騒動を起したあの地へ出るのである。彼是といふ内に古戰場に來た。見れば昔あつた木造の人家は丸焼に成つて、跡には黒焦の棒杭や堆く積つた灰の外には人影らしいものも見えぬ。中に種々奇態なものがある。之は鍋といふもので、其場ではその用途も知らなかつた。人間の食物が澤山積んだ儘黒焼に成つて居る。此日は茲に泊つたが更に人の來る模様もない。如何なつたらう、焼け死んだのか、それとも巧く免れ終せたか。吾々は人間を憐む理由は些もないが、二者に一つを擇ぶな

ら矢張焼けずに生きて居る方が可いと思ふ。考へて見れば人間も吾々同様、
 奇る邊ない動物だ、若し焼死をしたとすると一層不感なものと成るのだ。
 かうして一週間餘経つて居る内に生きたものが續々と現はれて來た。穴熊
 が出て來る。鴛鴦が出て來る。鼠が出て來る。此等は皆穴の内に潜んで居た
 輩で、火事の濟んだ跡で焼跡を押分けて出かけて來たのださうだ。空には小
 蛇どもの群もチラホラ見えて來る。此等は木の幹の奥深く匿れ、或は地の底
 深く潜つて居たのが、いま運出したのださうだ。それから禽にも逢つた。眞
 先は啄木鳥。それから懸巢鳥。此等は焼跡の方へ仕事に出て來るのだが、其
 話に據れば、焼けたのは一地方而已で。未だ助かつた世界は廣いものだとい
 ふ。是を聽いて心に大に勇をなして前進した。ある日の朝不圖も吾々と木の
 葉の茂つた山の頂を遙か行手の方に望見した。此時一家は吻と一息。初めて
 多日の愁眉を開いて、僅に蘇生の思がした。其氣持は何といはうか、地獄で
 佛に逢つたとしてもいはうか。
 まだ、途中で睡ることとせす前進をつづけた。脚の續く限り急いで川崖

を進んだ。と突然上の方から怪しい物音がする。確かにそれと目星を付けて、
 尙近づいて見れば推量に違はずそれは人間で、向から岸傳に下つて來て居る。
 隠れる木蔭は四邊にない焼野原。どうせうかと運擬ぶうち、毛色と同じ野の
 色を是幸ひと利用して、つい近くの焼木の株に身を着けて、ムヅリとせせず
 睨んで居ると、通つて居るのは五六箇の人間で、皆脊には自分達より大な荷
 を背負つて、四箇の熊が十間内に居るとは知らず、何を興じてか高聲に笑ひ
 つゝ、餘念なく話し耽つて行過ぎた。
 難なく人間は遣り過ぎしたので、吾々はズン／＼進んで暮方には半燒の邊
 まで來た。やがて行と溪間の柳、色青々と葉をつけて居る。火は茲までは屈
 かなかつたらしい。茲で燒が終に成つた。山野の風光は舊の僅の青々たる草
 木の間、松の葉の爽やかな香を嗅ぎ、踏心地のいゝ、褐色の地面を歩いて、烟
 に染まぬ食物を獲て、水涯に青々と生へて露を吐く青草を轉げ廻つた時の氣
 持は實に無上であつた。
 この次の日はグッスリ寝込んだ。山火事以來枕を高うして安眠したのは、

實に此日が始めてである。

莓畑

入つて程なく此郷には數多の動物が棲息して居る事を知つた。山火事に焼
 立られた落武者が加はつて、其數を増したのでもあらうが、また食物が多量
 て獲らるゝことが容易なものも、四方の猛獸をこゝに集めた理由として擧げる
 ことが出来よう。随分賑かである。吾々が日々耳にするは獸共の遭難譚。危
 難の間から一條の血路を開いて遁げ來つた悲惨な閱歷談を持ちさりて。就中
 火事場から飛出して暫く水邊に停つて居た鹿の群が、再び水を離れて以來、
 餌はなく身は疲れ、虎や狼に狙はれて苦しさと恐ろしさで、具さに辛酸を嘗
 めた一條は坐に哀を催はさす所であつた。夜に入つては飢へた虎が猛獸の
 爲めに斃れた獸の屍を涉獵つて廻つては高く咆ゆる聲が物凄く樹立の奥に聞
 こえる。獸といふ獸は同類相呑噬し相殺戮して居るらしい。舊來土着の獸共
 は新來者の侵入を深く悲んで、盛んに排外に勵めて居た。私共には誰も抵

抗して來るものがない。他に熊の二家族が近くに居たが、吾々の方から交情
 を温めて行くてもなく、向から情誼を寄せてくるもなかつたが、さりとして
 双方戦を挑むがごときとは決してない。私共は悠遊自適、平和のうちに起
 臥して此新居の周囲の探検に餘念もなく従事して、それを無上の樂として居
 つた。

新居の地は大體に於て故郷に酷似て居る。山嶺の水深い孔の中で、前に
 溪川が走つて居るが。此溪川は川幅も廣く水がりの地面も遭難地の沼の邊
 よりは大い。茲て私共熊に取つては此上なき響應といはれて居る青莓の熟し
 たのを始めて喰べた。此事は生涯の大事件と聊關係があるから、立入つてお
 話せねばならぬ。

此時吾々はいはゞ人間の真中に居るのだ、といふ事を問もなく知つた。嚮
 には五人連の人間に邂逅した。いま又燒跡の界から一里位の所に丸太小舎が
 二軒ある事を知つた。更に此川に沿つて下れば他の川が一緒になつて大河と
 なる所には随分多數の人間が棲つて居る。これは昨年の冬から興つた町で、

この間は始終人間が往復して居るといふ事も知つた。此が吾々には眼の上の瘤で、私共が些し遠方に出ると人間に逢はぬ譯には行かぬ。成るべく晝は内に居て。夜分に外へは出るといふ定めにして、人間を避くる事に勤めて居つた。

が、馴れると恐怖も減つて来るもので、此方では別段人間を殺すなどいふ考は微塵もない。人間が河岸を上下したり、岸邊を掘つたり木を斬倒したりするのは、何の意味だか些も判らぬ。併し戒心して成るだけ人間に逢はぬやうにしては居るものゝ、人間のする事爲す事些しも譯が判らぬので、意味の知れない所に恐ろしさは添ふもの故、此頃の寐癖は頗る安からぬ。併し幸にも生命には別條なく暮して居つた。

父熊も母熊も昔腰を折らした大熊を見た時に比べると餘程大膽に成つた。私共も生れて已に七ヶ月。昔のやうに罪のない悪戯もしなくなり、體格の大さくなるにつれて考も定まり、自づから威風も備はつて来た。熊が七ヶ月となれば已に先づ一匹前の熊と言つてもよろしい。夏の暑さには長い一日を樹

蔭に眠り暮らし、夕景は涼を水涯に納れて、胸高位の深さの、透徹るやうな清水の中で踏心地の可い底の砂地に立つて浴びるのは言はれぬ氣持である。蛙も居る蝸牛も居る。甲虫の類も澤山居る。水涯には葦、汗澤山の水草の根があるのて、食物には事を欠かぬ。夜に入つては出かけて行つて百合の根を掘り羊齒の草を探し菌を涉獵り球根を索める。溪に出れば鱒をとるといふ風だ、日の上る迄は洞孔の中に歸ることは罕である。

何よりの物は毒であつた。

夏も末。太陽は一日チカ／＼と照り付けて、熱した果實の匂は四邊まで覆都として薫る時、毒烟の香を嗅ぐたけても充分であるが、更に其味ときたら到底香ばかりとは同日の論でない。

私共が毒烟へ行くのは毎も洗を出た後、香黄の色がこれから夜の姿と成り初めようといふ頃であつた。その毒烟は河岸の廣場で、樹木は一本もない、一面葎の木が生茂つた縦横一里四方位な如く、中に入れば枝には草果が鈴なりな實つて、顔を導くれば自然に口に觸るばかりである。毎晩通ふものは私

其の外近所合壁の熊中間 前に述べた二双の熊と獨身の熊 此の獨身は熊中間の鼻掴みて、私は嫌ひな上に畏るしと思ふ。此奴は生來意地の悪るい獸で、父熊よりは形態も大きく、初めて逢つた時なども妙に母熊に對して嫌な素振をして、父熊に喧嘩を買はうとした奴である。母熊はその時此奴に對しては一言をも發せなかつた。向ふてはシリ／＼と父熊の訪へ斜違ひに啼え乍ら詰め寄つて、もう喧嘩腰である。實の所父熊は通腰に成つて居た。母熊は物をも言はず、嚮に私の一命を虎から救つた時の様に、昂然として此奴の鋒先に立つた。父熊も之に氣を得て馳向ひ、三箇は一緒に堅まつてゴロ／＼と轉げて居たが、到底彼奴叶はじと思つたか、振離しざま一目散に逃げて了つた。其後毒畑で逢ふ毎に私共を見ては凄じい聲で啼る。私は恐ろしむの餘り一輪に縮み上つて親熊の後に小さく成つて寤んで居る。若し捕まつたら乾度八裂にせらるゝに相違ないと思つて。

月夜に透かして見れば毒の實は黒々として葉の間／＼に白く掛つて居る。其間に黒く班を付けたやうに雜つて見えるのは熊の入つたので、私共は黙つ

て味つて居ると折々は枝の撓ゆる音。森の中てけたましい獸の咆ゆる聲。通りすがりの鼻の聲がするばかり。絶えずひし／＼喰つて居る私共の口の音の外には天地全く静寂である。然るに一夜大變事が起つた。

變事

月の極めて明るい晩の事。私共が毒を食つて居ると、父熊ばかりは不思議にもヂツと扣へて居る。空は微風が軽く吹き渡るばかり。静かな晩であつた。此時風に伴つて遠くに人間の臭がする。一時も經つたが人間の來る模様はない。一同はもうそんな事も打忘れて無中に成つて味つて居た。忽然毒畑の向ふの側半哩位の所で雷挺の響が、静かな空を劈いて響いた。何事の起つたと見返る處もあらばこそ、山腹の木の間を逃げた。脚の續く限り逃げた。其後はもう何の響も聞こえなかつた。其晩は再び山を下らなかつたが、後に聞けば仲間の小母熊が頭に重傷を受け、半死半生で漸く森の中に這込んで通れたといふ事である。さうとは知らぬ吾々は胆太くも翌晩又出掛けて行つ

たのだが、是は寔に浮雲い事であつた。
 ある夜又もや出てゆく途中。圖らずも例の意地悪の歸つて来る所に邂逅せ
 た。妙なものて外の熊なら挨拶の一つもして、何故歸つて来て居るのだと聞
 く位の事はするのだが、鳥渡唸り合つた儘別れて了つた。若し茲て所因を聞
 いて置いたらば或は事も無くて済んだかも知れない。併しながら用心に用心
 を加へて山を下り密かに毒畑の邊に着いたが別段人間の臭もせねば雷聲の響
 も聞えぬ。て、まづ安心と畑の中へ潜込んだ。此時天には密雲深く銷して、
 月は折々雲の絶間に下界を照すのみであつたので、月の隠れたを機會に毒畑
 へは忍入つたので。

来て居ないと思ふた仲間共も月光の射す下に透せば遙の隈に蠢いて見える。
 と此時仲間の姿に放心氣が奪られて、私共は見られたのである。月光の送り
 出づるや、ヌツと頭を擡げた時、雷聲は凄しく響いた。驚波こそと計り仰天
 し、取るものも取りあはず木立の中に逃込んだ。續いて一發間近く聞こえて、
 森に入ると又一發。も早停る氣勢もないので、ひた走りに走つた。親熊達を

先として私、妹といふ順に成つた。人聲は後ろに近く追つて草叢を踏しだく
 音。引續いて雷聲の響。一發一發又一發。

と、妹の居ないやうな感じがするので、ふり返れば影も見えない。何でも
 裏に悲鳴を擧げたやうな聲がした。夢中に成つて逃ぐる最中には心付かなか
 つた、多分それではなかつたらうかと、胸中一道の疑念が生じたので親熊を
 呼止めた。

母熊は假令人間が雷聲を所持して居ようと、構はず此儘取つて返し、山を
 下つて人間を襲ふてやりたい、といふのが腹一坏であつたが之には父熊が不
 服である。討議の末結局は靜かに引返して其場の動靜を窺ひ、臨機應變の處
 置に出ようといふ事に一決した。木立の外まで来た時。遙に騒々しい物音が
 聴こえて居る。叫聲と蹴飛ばすやうな音。次では妹熊の泣聲も混つて居るら
 しい。妹は苦痛と忿怒とて必死の叫を放つて居る。段々近づいて見れば、そ
 も何といふ慘状だらう……。

毒畑の中央位の所で、月光を浴びて無慘や妹は四箇の人間から取巻かれ、

身は荒縄を以て縛々と縛られ、一筋の綱を二人づいて提へて、兩方から牽ずつて行く所である。いや行かじと抗するのを無理に曳くので綱は深く肉に喰込む。痛さに堪へ兼ねて些しづゝ牽ずられて行く。

「妹熊一箇で敵はないなら皆で襲つたらどうてせう、先方も四箇味方も四箇、と思つて父熊に話すと、父熊は唸つて見せて雷挺はどうするのだといふ。それは成程さうである。雷挺を持つたものに敵ふのは幾萬の生命があつても敵はないので、詮方なく、見すゝ其爲すが儘に任せて置くばかり。母熊は始終歎歎。父熊はウン／＼唸つて四道に成つた儘、鼻を胞毛深く摩つて居る。妹が曳かれて行くまゝに後に蹤いて行く。一方は山一方は河。そこ迄出ると廣い路が通いて一哩半許も川下に人間共の住家がある。其住家は群をなして其數も多い。蹤いて下ると妹熊はその内の一軒の奥に監禁められて、人間共は思ひ々に分散つて酪々家に入つて行く。吾々は妹熊を曳込んだ家の周圍に立つて居ると、二三度三四箇の人間が来て内の動靜を窺つて居たが、遂に再び來るものもなくなり、室の内の燈も消えて了つた。多分皆眠んだのであら

時こそ來たれと一行は妹の泣聲を心當に、近くまで忍び寄つた。母熊が、聲をかけて見たが内では森として返辭がない。今一度話しかけると不惑の妹熊はそれと覺つたか、歡喜の聲を擧げて居るのが聞こえる。併し此場合何とも手のつけやうがない。只外部から話し内部から話すばかりでは何の効もない。家の周圍を馳繞つて地を潜つて入込まうとすれど仲々入れさうにもない。その内東方が漸々白んで來るので、思を殘して山中に逃込んだ。

その晩の悲しい思といつたら無かつた。私は是迄妹熊の事を思ふなどいふ事は決してなかつた、一緒に居るのは別に珍らしい事でもない、言はず當然の事で、さうあるべき物だとはかり思はれたので、戯れもした。剛もした。けれども今のやうに居居なくなつたらどうあらうと言ふには考及ばなかつた。然るに夜が明けて見ると妹熊の事ばかり思はれ、いかにも淋しくいかにも物足らぬ氣がせられて、人間共からどんな目に逢はされて居るか、配慮に耐へない。一體私が思ふに人間は何故に私共を捕へようとするのだらう。私共は

人間に災をする考は毫もない。又他の動物に對しても私共は露ばかりも敵意を挾んでは居ない、況んや小さい妹熊が何條人間を苦しめよう。私共の方では人間とは只睦じく仲善く暮して行きたいと思つて居るのに、人間の方では何故私達と睦じう交つて行くことが出来ないだらう。

次の日の夕方。人間の住家近く行つて見たが、妹熊の聲は些もしない。只一箇の男がその邊で木を听つて居る。頓て三人が手に／＼繩を以て下流の方から歸つて来た、此繩で昨晚妹熊を縛つたのではあるまいか。して見ると私共の眠つて居る間に又何處にか妹を連れて行つたに違ひない。左様だ。全く左様だ。

私共は夜深まで待兼ね、思ひ切つて人家近くへ歩み寄つた。推量に違はず妹熊の入つて居た家の戸は開いて人の出入は頻繁だが、尋ねる當の主は脱殻である。で父熊に導かれて嚮に三人の男が戻つて来た。箱川傳ひに下つた。程なく妹熊の足跡の臭がブーンとするやうに成つて来たが、人間の臭はそこら中に充ち満ちて居る。

て、其臭を慕つて人家のやゝ稠密な邊まで行つた。此邊で鳥渡江回して又その足跡と覺しき道を追ふた。流に沿ふて下るに従ひ間を置いては家並が益々密になる。こゝからはもう町であらう。今は一步も進む譯には行かぬ。見渡せば家々の窓を燈の影が流れ出て、人間の聲は手にとるやうに響くひびき渡る。私共は場末の周圍を彷徨ひ歩き、夜が明るると山に歸つて寐るのである。此時の悲しさと腹の空いた念其等だ。今迄殆んど食事を思ふ暇はなかつたのでそれと耐へ難き寂寥。

妹は町のいづくの家にか居るに相違ない。私は此時始終かう思つた。人間は妹熊を何にするのであるか、以前人間の來ない頃一緒に居つて楽しかつた元々通りに、何故妹を私共に返して呉れないだらうか、と。

争闘

妹が居なくなつた事は、私を以前より一層孤獨ならしめた。是は嘗に遊仲間が失くなつたといふ許でなく、生れて始めて獨りて外に出かけるやうに成

つた。これは妹を捜すといふ目的の爲に出たのだ。
 妹が捕まつてから後の数日間、毎晩殆んど通宵場末に待つて居た。が三日
 目か四日目の朝、父熊は到底此では駄目だといふので、母熊がせめて今一晩
 か二晩捜して見たらといふのを強つて思切らせ、山火事後の假住居に一應先
 づ引上げる事にした。て町を後に、私は進まぬ乍ら氣を取直して歸つて行つ
 た。

此時月は未だ望を過ぎて程ない頃であつたので、私はあの晩の月影に白く
 輝く薄煙の光景を圖らずも思起した。今や一頭の熊の影だに見えぬ。私共は
 歩を停むる事なく河岸から百歩の彼方なる豫ての住居へと進んで行つた。見
 ればその昔亭々と聳え立つて居た二本の大樹は折挫げ、縦横に横はつて居る
 老樹の幹の根方には若木の蔓が透間なく生繁つて、左右に枝を横げ葉を重ね
 て屈意な棲家を作つて居る。私共の居た頃には此繁みの内に一條の通路を作
 つて出入をして居つたが、今宵また来て見れば新しい足跡が踏いて居て、
 其跡の主たる熊は餘程大な獸だと察せられる。父熊は足跡を一目見るなり狂

然として唸つた、何者の足跡であるか父熊には判然つて居ると思える。かく
 情したが、此推察は後に見事適中した。

私共の不在の間に、彼の嚮にも一度小さい喧嘩を吹かけた當の敵たる悪性の
 熊が、私共の住家を奪はうといふ下心があつたに相違ない、彼はもと永く此
 地方に棲つて居て私共が入る迄此棲家を所有して居たものである。けれども今
 ては、私共が此季節に一定の棲家を持つ以上此巢は私共の所有と成つて居る。
 今や彼は頑強にも路を塞いで現はれ出で、頭を左右に打揮つて高く呻へ乍ら、
 寄らば打たんず光景を示して居る。私共は歩を停めた。父熊は真先に、次は
 母熊、殿は私である。奴が形熊の父熊より太い事は嚮にも言つた。此が並の
 喧嘩なら買ふのではないが此度のは少し譯が違ふ。一體が此棲居は私達の所
 有であるのだから、彼には指一本も指させはせぬといふ氣はあるし、彼の方
 て又意地悪の本性を現はし、私共を威喝してやらうといふ素振を見せて居
 るし、此方は此方で此数日來の事件で父熊も母熊も、自棄氣味で、相手構は
 ず八ツ當りに怒り散らすといふ時分であるので、頗る事が六ヶしい。

一體熊の喧嘩は始まりが長引くので、互に睨み合ひ乍らジリ／＼と唸つては詰寄るのが一般であるが、此時はバツタリと邂逅したのだから兎角の追はな、その上父熊は一方ならず焦立つて居たので、殆んど遲滞する暇もなく鼻柱を逆立て鼻息を強ませて雲時、敵手が逃ぐる氣色のあり無しを窺つた、が矢庭に身を躍らして飛かゝつた。私はまだ今迄父熊の眞劔勝負をする所は見、た事がなかつたが、此場の熊振は父乍ら天晴なものであつた。相手の油断を見澄して突然其脚に啖付いた。と見る／＼兩箇は糸巻のやうに一塊に成つて荆棘の裡を輾轉る。始の程は如何成行くかと手に汗を握つて見て居れば、追の父の早業も漸く危くなつて勝は敵手のものらしい。此時父熊の貌は敵手の左肩の下に押付けて、緊と咬込んで居る、が常に敵手の下身に成つて今にも敵手から前脛を咬へられさうである。若し一度咬つかれたら最後、骨も肉も粉微塵、脚は一本利けなく成り、假令生命に別條はない迄も一生不具に終らねばならぬ。今や今や敵手から咬付かれんとして危機一髪千鈞。

此時だ、傍て見て居た母熊は猛然として身を起し、兩箇の傍へ近寄りさま、

全身に力を罩めた一撃を敵熊の頭上に曳とばかりに喰はして、萎む處を背頭深く、充分に噛み込んだ。父熊の咬へて居るのは痛い事は痛かつたらうが、敵手に取つて餘り介意する程の者でなかつた。然るに母熊の横槍には妙なからず辟易したと見え、父熊に對ふ鋒尖を新來の後援者に向けて來た。が道の敵熊も多勢に無勢では手に掛けぬに相違ない。敵手が轉じて母熊に向ふとすると觀取するや父熊は、肩の邊を放擲つて牙を倒にして敵手の脛をガクリと咬んだ。此際敵手の探る手段は重圍を脱する工夫よりないので、あなやと見る間に母熊を、母熊が私を引外すやうに輕々と引外し様、叫と一撃喰はせた。狀は、敵ながら目覺しき手腕であつた。と母熊は閃と許り身を躲し、父熊も脛を放つて一步退いた。敵手は得たりと飛退り様朽木の丸太の頭合なのを小楯に取つて、敵來よがしに身構へた。併し此方は争はうといふ氣は些もないので、敵熊が奈何するか道を開いて其が爲す儘に任せ、すると果然葉は隠險らしい身振でムグリ／＼と動き出したのである。

私は此時まで凝然と路傍に立つて見て居つた。敵熊は遽然私の方に向つて

来る氣勢を示したので、父熊も母熊もさうはさせじと身構をする、私は藪の中に逃込んで行く、敵熊は怒つて又兩箇を敵對する事と成つた。併し兩箇は敢て喰つて懸らない、敵手の後に跟いて行く、對手は一步、二歩で立停つては醜くも、孰か一箇に掛つて来るやうな態度を示して居た。雖然、到底も叶はぬ事が明つて居るので退くとはなしに逃げて行く。兩箇は森の外れまで跟いて行つて、影が見えなく成るまで立盡して居る。そして敵熊を遣つて了つて、無事に私の所へ引返して来た時は實に嬉しかつた。

人寰裡の探検

古巢には戻つたが數日間誰も彼も快々として怡まな。私は成長の後若し機會があつたら、彼の老熊に乾度仕返をして遣らねば措かんと心算かに決心した。

皆氣を苛立て、居たのだが、就中最心を惱まして居た者は私で、到頭堪兼ねた末には獨りて出て行くやうに成つた。此時迄私は外に出るには必ず親熊

と同道だから心強く念つて居たが、只獨り出て見ると大な熊に逢はうといふ恐怖心に常に兢々として居る。併し漸々自ら恃む心を生じ、爾後は全く獨りて夜毎々々、町の方へ遠旅をして恐るゝ所はなかつた。一夜町に入つた時は人臭い中を戰慄し乍ら戒心して深入をして、人家の軒下を辿つて行つた。行く／＼食物は其處彼處に求められる。味は違ふが珍らしい者で無上に滋味。人間が未だ眠つて居ない事は家の間から洩れ来る喧しい人聲で察せらるゝ、又家々の暇々から明い火影が黒闇の内に煌と射して居るので判る。光明を避け乍ら、食物を涉漁つては、飛目張耳で妹の所在を嗅ぎ廻つて居た。

斯様な風で朝雲頃まで町に止つて居る、或時の如きは私が近くに在ると知つて、何家からか烈しく狗が吠え立てた。すると人の聲が聞こえたので、急々とそこを通りすぎ、夜明も近し、山の中に逃歸つて、日の出前に兩親の許に歸着くと、父熊からは私に人間の香がすると言つて酷く呵められた。

翌晩又町へ出た。此度は道筋は略判つて来て、昨夜吠付いた犬の居る家も知れたので、近付かぬ事にした。かうして夜中に出て見ると、私ばかりでな

外にも種々の獸が澤山町に出掛けては食物を探し廻つて居る。猫だの、山
 猫だの、野鼠、それから熊。此熊達は森外れの家の處までは始終出て行くが、
 町の中に這入るのは私許りである。私は最早人間にも町にも馴れて来た。人
 影がすると、チャツと物陰に身を潜ませて遣り過す。此が何とも言へぬ面白
 味がある。人間といふ奴は私達に比べると風體も變てあり、臭も悪い臭がす
 る。併し近くに寄つても毫も私達の居るのには氣が付かぬらしい。まづ伴だ。
 三晩目か四晩目頃。日比よりはもつと深入をして、明るく燈の點いた家の
 側まで来た。と私は訝しさの餘りピツタリ立停つて沈と聴耳を立てた。ハテ
 不思議。どうしても此は疑もなく妹の聲である。知らぬ人には怒聲とも思は
 れようが私は丁と知つて居る。誰れかと巫山戯て居る聲だ。私と一緒に戯れ
 て居た時のあれだ。怒つた様な振をして居るのだ。マア安心だ、妹が息災で
 居て、戯れて居るやうては是は一ト先づ安心した。が戯れて居るとは怪しか
 らん、對手は何者だらう、と思つて聴いて居る内漸々狀は判つて来た。がど
 うも不思議、不思議、不思議でならぬ。そんな筈はないのだが。矢張さうだ。

奴人間と遊んで居るのだ。

聽いて居ると妹に對して怒つたやうな人間の聲がする。よく聽いて居ると
 矢張妹と同じく怒つた真似たといふ事が知れる。其聲は光明の一番明るい邊
 から聞こえて居るので、兎やせん角やせんと言ひ沈吟した末、彌決心して今少し
 近よつて、せめては内の模様の見へる所まで行く事とした。て成る丈光明を
 避けて軒下を廻りながら、そろ／＼と逼り込んだ。忍び込んだ所は究竟の場
 所、現狀を一目瞭然たらしむる事の出来る邊であつた。此家は周囲のより
 も大い建物で戸といふ戸、窓といふ窓は悉く開放し、燈火の光は名残なく暗
 中に這り出て居る。入口の戸の前で燈火は圍まれて五六箇の人間が環を成
 して居る。その中央に妹が、首に環を飲められ、環に鎖を付けられ、鎖は柱
 に繋がれて、妹が居る。一箇の人間は身を屈めて何をか與る手様をして居る。
 多分食物であらう。妹はそれを取らうとして手を延すと、突然手中の者を彼
 方に抛棄さま、他の手で妹の頭をビシヤリと撲る。併しく撲つたのでないか
 ら戯てあらう。すると妹はさも怒つたといふ風で唸り乍ら後足で立上り、代

る。手を一本宛出して此男を撲らうとする。いやさうはさせじと身を隠す。観者一同は之を見て大笑をやる。有時には此男思案貌て歩み寄り、私共兩箇がまだ仔熊の時あの杉の木下で相撲て居つたやうに妹と相撲ふのである。併し妹は力一杯出して居るのではない、また人間に怪我を爲する積もないらしい。人間の方でも妹に怪我があつては成らぬといふ様な風が見える。

兎角して人間達は妹丈を残して皆引舉げて彼方へ行つて了つた。が未だ開放した戸口から新らしい貌の人が入つて来て、之が出て行くと又代り合つて入つて来る。私は妹に近づくなり、私の茲に居る事を知らずなりしたいと、心ばかりは逸れども奈何にも爲す事が出来ない。て私は家陰に潜んでテツと状況を見て居つた。其所を通る人毎に皆妹の傍て鳥渡々々立停つて、何か話をしては行き過ぐるのであつたが、暫に見たあの妹と巫山戯て居つた男よりは妹の身近く迄寄り付く者はない。目の當り其爲體を見て居ながら萬事が私には些も曉得ない。但し兎に角之を見て居ると私は恐ろしく淋しい思がしてならぬ。何故とも知らぬが、妹は新らしい友達が出来たからではないのか知

らん。而も其友達を尊敬して居るとは誰が見ても知れる。其に引換へ斯程近くに寄り乍ら。話をする事さへ出来なではないか！

終に成ると澤山の人が家の内から出て来る、私は見付からうかと怖く思つた。左に行く人があり右に行く人があり。私は始終其間に匿場を代へて巧みに人目を避けて居た。恁様な風てやつて居る内、何時か私は町の中程からずツと行過ぎて場末近く迄来て居る。驚いて引返さうと思へば人の笑ひの、しる聲が驚しいので、山の中に逃歸つた。而して今宵始めて、親許に返らずに、幾林の内て夜を明かしたのである。

翌晩又私は町へ出た。而して昨晩と同じ實況を目撃した。併し今宵は風があつて、私の居る方向から、燈が點いて、其前に妹が出て居て風は其方向へ吹いて居る。と巫山戯て居た妹は咄嗟の間に屹と成つて、驚いた様な風て切りに風上の方角を嗅ぎ始め、やがて私の名を呼ぶのである。私は茲だと言ひ度いは山々ながら悲しい事にはそれが出来ぬ、必定妹は私の茲に居るのを知つて、而もそれと名乗つて出る譯に行かない事迄會得して居るらしい。妹

が切りと私を呼んで居ると、今迄一緒に成つて戯れて居た男——昨晚も居た例の男——がツカ／＼やつて来て妹の頭をホカリと撲つた。すると妹は眞剣に成つて憤り出し、件の男に撲ち掛つた、男は捷くも身を翻して之を避けた（私は此時妹が其男を引捉へて了へば好いと思つた。暫くの間、妹を離して復た戯れようと試みて居たが、到底駄目だと見たか此男も、自餘の觀客も家の内に入つて了つた。て妹は私の方へかゝりさりに成れた。人の影が全然見えなくなつたので、私は妹に聴こえる位の聲で話を初めた。妹は飛び立つばかりに悦んで、鎖の届く限りあちらに走りこちらに駆け廻りして、繋いてあつた杭に鎖を繞付けて身動きもならぬ如くにして了つた。かやがてクル／＼と杭の周回を廻つて、巻付けた鎖を解いて、隅から隅へ駆めぐり乍ら、私の名を呼び立てるので、私は駆け寄つて抱きも上げたい思ひかした。併し私は貌出しは仕ないて、昨晚のやうに中に入つて居る人が出て了つて、方々へ散々に歸つて行く迄待つて居た。此人崩れの際に此度は私は山へ歸らずに人目を潜び、隅々この暗がりに躲れ、妹に逢ふ機會あれかしと望んで居

た。やがて家内が諍静と成つて、妹を戯らして居つた男丈残つて居ると覺しく、室内の燈火も漸々幽に成つた。私は家の人が戸を閉めきつて世間の人が燈を消せば直に眠るやうに、眠つて了へば好いと思つた。併し室内の内から洩るゝ火影が見えて、妹の傍に行つて鎖を抗から解いて、何でも家の後の方へ連れて行くらしい。妹は身悶へをして人々の爲る所に抗つて、引外して遁げ出しもせうといふ勢であつたが、鎖をキユツと絞つて牽かるゝので、詮方なく跟いて行く。もと妹は人間に畏服して居て、人間に向つて眞に危害を加へる肚がないらしい。てデリ／＼と牽かるゝ儘に従いて行くのである。私は後を跟けて行く。と檻のやうな屋根のない埒の、高い壁で四方を圍んだもの、内へ妹を引込み、人間は家に歸つて、やがて家の内に燈火が消えて四隣が静寂として來た。

私は檻の傍へ忍び寄つて、聲を潜そめて壁越しに物を言ふと、妹は聞き付けて、躍り上つて喜んで、鎖を牽すり乍ら室内の内をあちこちと跳び廻つて居る狀である。昇れないかいと訊いて見たが、何しろ滑かな立板で爪の立場が

ない。又飛び越さうには高過ぎる。併し地面の際の板に節孔があるのて、其處に双方から寄れば鼻が觸るばかりであるのはせめてもの慰藉である。私は久しく此處に停つて、其後の顛末を話して聞かせた。——他の熊との喧嘩や、妹を便す爲め夜毎に町に出て來る事を話すと、妹は又身の上話をし、聞かすのである。此時は未だその話の七分通はよく了解が出来なかつた。妹と一緒に成つて巫山戯て居つた彼の男、妹を檻の内に閉込めた彼の人間の上を話すのを聞いて、私は憤を禁じ得なかつた。妹は其男を畏れて居る。不思議にも、父熊や母熊を畏れるやうな風に畏れて居た。其男を慕ひ懐いて居るとは奇性千萬だが、實際此頃の四夜五夜氣を付けて見れば、疑もなくそうである。妹が其男に心を傾けて居ると、其男は妹に生活の要品を給して居るのは明白である。其男の力て妹は澤山の食品に有付くので、若之が居なかつたら食ふものはない。其男が妹の所へ來る毎に何か食品を持って來ない事はない。適には實に結構なものを携へて來る。堅い脆い白い四角な石のやうな、密よりも滋味く密よりも甘い此食品は殊に結構だといふ事である。私は

今では勿論之が砂糖である事と存じて居るが、其時は其味を思やつて、戯るる時には何時でも人間が隠套の中から抽出して與られると聞いては妹が羨しく、自分も一所に仲間に入つて戯れて見たいと思つた。

夜なく、恁様な風に出かけて行つては話をして居たのだが、或時は夜も明方に、又或時は未だ宵の内から人家の戸口を窺ふて、妹が主人と戯れては砂糖を貰つて居る所を見た事もあつた。此時妹が味つて居る状で見ると其味も悪ばる。私は屢々危い所て人間に見つかるのであつた。それと言ふがもう此邊には馴れて了つて、人里に在つても心は森林を小迷ふ思て居たのだから。一度ならず二度ならず、私は思も掛けず人間の側近く來て居た。此邊は人間の臭だらけて、一人や二人近くに居たからと臭に何程の違も無い所から鼻で嗅分ける譯には行かぬので、私は耳と目を利かして逃げ隠れして居た。

永別

處が或晩の事、一大事件が起つた。

妹の入つて居る檻の戸は外から堅固な鐵の鍵が上げ卸して開閉する様に掛かつて居るので、私は此鍵を断つて戸を開けようと思ひ、長い間種々に術を盡した。が何分後肢で立つて前肢で戸を押へ、鼻を鍵に壓付けて居るので、戸は私の重みの爲めに閉ぢられた形である。それを此時迄私は更に思ひ付かなかつた。然るに或晩私は例の通り鼻を鍵に壓當て前肢を、戸ではない其戸の側の壁に凭せかけて居た。恰も私が鼻で鍵を上に乗げた時、妹は内側から前肢で扉を押して居た。何と驚くまい事か、此時颯然として扉は私の鼻の先で入文字に開いて、妹は軋々と轉がり出たてはないか。(若し之が早く氣が付けば鼻の皮を摩刺く迄もなく、初の晩に開けたらうに。)天祐といはうか幸運といはうか、此時の嬉しさは譬ふるに物もない位、一緒に山に歸つて親熊と棲ふかと思へば餘事を慮る迄もない。(山に歸るのは楽しいではないか。)と私は妹に訊くと、妹もそれは楽しい、といふ。(もうもう、全く人間には逢ひもすまい、又思出しもすまいよ)、と私が言へば妹は、(さうね……だが……)それは嬉しいわね、だけれど……と甚だ返答が羨切らぬ。(あの白いもの……砂

糖……を人間は持つて居るから、一遍……たつた一遍人間の所へ返つて来て一塊か二塊も貰つてから、といふ末練が存るのではなかつたか。

私はムツとした。(貴様の食心張から折角幸福なるべき筈の吾々の一統が滅茶々に成るのだ、決して再び人間の所へ立返つて成らぬぞ)、と妹に吩咐けた。(今一度人間の許に行つたらば復再びと奪ひ出す事は出来ないてあらう、一刻も早く父熊や母熊の許へ歸つて。人間の居ない奥の奥の山奥へ越して行こうではないか)、と説勸めて見た、然るに妹は喜んで此説諭に應ずると思ひの外、酷く鬱ぎ込んで物思に沈むのである。(勿論親熊に逢ひたいは山々だが、が、が、……、いつもがの字付きの曰はくは人間と砂糖のさせる業である。賺しつ和めつ話する間に、早や町を去る刻限が近づいた。刻下の急務は、先づ速かに山に入るにある。山に入つたら町に返る念を翻さするのは譯もなと思つたから。(ぢやア人間の許に行きたくば何時でも行けば可いのだから、兎に角茲は進め)と促がし勵まして、例の道筋を辿つた。が一步進むと例の妹の首環に繋いだ鎖が氣に成る、歩く度に鏗々と音を立て、地上を牽ずつて行

くので、頗る邪魔ものである。併し速急に取外す道といつてもない。若し此
場丈け甘く逃了せたらどうかして取外さうが、今は只成るべく早く町を去
るといふのが焦眉の急務であつた。

兎に角私達は歩み出した、歩み出して見たが何分にも妹には初めての道で、
物といふ物が皆珍らしく、何か在れば直立止つて、寄つて行ては嗅いて見る。
初め傘へられて来た時一度は通つた事もあるのだが、其時は見物などの騒で
はなかつた。此時東の空も漸々と白んで来て、あちこちに人の起き出る氣配
もする。一度の如きは突然町並の家の戸が明いたので、棒として物蔭に隠れ、
出て来る人を遣り過したのであつた。こんな風で町の中は甘く逃げ了せたが、
町外れて由々敷事件が起る事と成つた。

町外れの家は小さい堀立木舎の類であるが、殊に山際に一軒離れた小舎が
あつて、そこには例のよく吠える犬が居る。此時妹は是非此家の所へ行つて
食物が求めたいと言張つて私の止むるをも聽かない。何、狗には馴れて居る
のだから大丈夫だといふので、措はずずん／＼獨て出掛けて行つて、壁の周

圍を捜して居る。私は速く歸つて来るのを待兼ねて居た。

家の一方の側を普ねく喚ぎ廻つて、妹は更に背戸の方へ曲らうとして居る
途端、突然と件の狗に衝着かつた。と狗は聲を放つて吠え立てる。妹は狗に
馴れて居たのだかどうだか知らぬが、自分の頭の大さ位の小狗から不意に吠
え付かれたので、面食つて、周章もとの方へ引返さうとした時、家の角に些
とばかり身を觸れた。觸れた、と思ふと素顛倒と身を踴らして前に轉んだ。
かくと見るより小狗は得たりと飛付いて来て、滅多無精に吠え立てる。私は
肝を潰して何うしたのかとよく見れば、生憎や鎖の端が木の間に嵌つて、杭
に緊いだ様に成り、引張つてもしやくつても離れない。狗からは盛に吠えら
れる、氣は苛立つ、急に離さうには佳い工夫も出ないといふ危場に陥つた。
時を移さず家の戸は颯と開いて、一人の男が駈け出して来た。手には例の
雷挺を提げて居る。妹と狗は一塊に成つて地面を轉げて居たが、男は狙を濟
して銃口を妹に向けた。咄嗟といふ間もなくあの恐ろしい音は空を劈いて響
いた。

私は一生懸命人間の見ぬ内狗の知らぬ間にと、足に任せて森の中に逃げ込んだ。跡にどんな事が起つたか畏怖の餘り願うもなかつた。だいたい逃げ延びたと思ふ頃、立停つて熱と耳を澄して聞いて見たが物の音もせぬ。妹が續いて逃げて来て居る様子もない。漸く我と我氣を取直して故の處へ引返して見れば、折々は狗の聲がして人間の話聲も聞こゆる。猶も程近く忍び寄つて見ると息は如何に。人立の間から静かに地上に横つて居るものがある。周の人に細を携へて居るものはなく、只妹を見下しては何か互に話して居る。血塗に成つた妹は人間の前に寂然として驚て居るのであつた。

不和

今や私は沁々と身の淋しさを感じた。父熊や母熊と離れて居た二三週間の間に、私は自ら恃むといふ念は覺えて來、また毎晩妹に逢ふ所から、皆と分れて居ても格別淋しいとも思はなかつたのが、今早や町に出て来ても要事はなし、彼の夜の光景は彷彿として眼底を去らぬので、又と人間は見るものでない

切に感ぜらるゝ。

私は始の内から何故かしらぬが人間が恐ろしい物に思はれて居た。漸く馴るゝにつれて幾分か恐怖の念は薄らいたが、此時に到つて再び初の念は萌え出して、剩へ一種嫌惡の情さへ加はつた。自體私は人間は長い長い、之に向つて、微塵も惡意は抱いて居らぬ。恰も私共が鹿や狼と一緒に、仲善く暮して居るやうに、人間も私共も銘々平和に暮ら、暮されぬ事はないのだと思ふのだが、人間にはそれが出來ないのである。私共も今はもう如斯希望を抛つて、全然それは斷念して了つた。斷念して了つて却つて深く人間を惡む、怨骨髄に徹して憎むしと思ふやうに成つた。て、若し雷挺の處がなかつたら、私は町中を横行し、他の熊族を一擧して見當り次第人間といふ人間を屠り殺し、人間種族を塵滅して呉れようと思ふが、夫は願つた所で逆も叶はぬ事だから、せめては獲身の雷挺を有たぬ人間と出會次第目に物見せて呉れようと、決心の臍を堅めたのであつた。

事のあつた翌晩は愈々人間の町を後ろに立去らねばならぬ。けれども何と

なく未だ妹の居るやうな気がして、踏嗟逡巡、後髪を曳かるゝ思であつた。未明の頃漸く決心して、親熊の許へ還るべく歩を運んだ。彼の猛熊と戦つた棲家を指して出て立つたのである。

母熊は私の顔を見て大變喜んで呉れたが、父熊はさる氣色は露ばかりも無い。私は是までの動靜の一部始終を話して聞かすと、父熊は格別氣に止めない状態であつたが、翌日に成つて、人間から成るべく遠い所を求めて移住しようと言出した。

翌日は午後、一同當所を引拂ひ、流に随つて又例の火事跡の方へ漂ふて行つた。満目の光景は未だ蕭條を極めて居る。が二ヶ月の経過は驚くべき變化を來たして、常に焼跡に生へる灌木は熊の背丈位に延びて、梢には早くも紅の花を著けて居る。來ん春には他の下萌の草木も生へるであらう。年の内に芽を萌ぐものは柳蘭といふ草ばかり。野面一面に幾り生へて、處々に兀然と立つた黒熊の梢は杭の如く、物淋しくも哀れ氣に殊に眼を牽くのである。

行く／＼溪涯に人家を望見すれば、迂回して之を避けて居た。鶴や類の告

ぐる所では、一團の人は夏の間に流を溯つて彼方へ行き、その内數名が歸つたばかりだから、火事跡にはまだ多數の人が停つて居るに相違ないとの事である。併し吾々は火事跡に棲む氣は初からない。第一食ふ物が不便な上に、未だ冷灰の層は地に堆うして、攪き立つる度に灰神樂を起して、目といはず鼻といはず、咽の奥まで飛込んで來るといふ始末であるから。焼跡の境を辿つて一行は、北へ／＼と深入をして行つた。此あたり全體の地勢、峰巒相連り、巖谷相繞る所は經歷の地と異つた事はないが、踏破するのは這回が初めて物新らしく感ぜらるゝ。

夏も過ぎて山は寒い頃と成つた。旅とはいへど指してゆく方も定めぬ旅。只恐ろしい人間の傍から一歩たりとも遠らうと思ふばかりで、全く人間の入り込まぬ地があつたら、そこをこそと望んで居るが、今や彼奴等は四方八方から續々と侵入して來る。其姿は見ないが、鶴や鵲翠、獺などの見聞する所はいづれも符節を合す如く、人間の徂徠は此邊にも及んで居る事を物語るのて、一行は益々北へ落ちて行くばかり。

日の經つにつれて妹を懐ふ念は薄らいで来て、町の夜なくや、さまざまの物の響、燈の影、さては人間の臭まで身にまつわつて抜けなかつた記憶が、夢の如く朝風に狭霧の吹拂はれて消ゆる如く靡るげに、幽かに跡なくなると、もとの深林を懐ふ情、廣野を慕ふ念が漸く強く成つた。其間に私はズンズン發音して来た。母熊は私の背丈なり體の達配也が急に伸びたと云つて居る。町に出て例少ないさまの艱苦をしたのが薬石と成つて、度胸が坐り、生れて一歳の私と同年配の仔熊でも、親熊の手許で育つたのと比べると、私の方が遙かに勝つて居ると思はれる。實際又私の方が丈も高く力も強かつた。だから今ならどんな虎にせよ指も觸せはしないのだ。然るに爰に一つ困つた事が出来た。それは私に對する父熊の仕打が漸く冷刻に傾いて来る事である。これさへなくば天下太平であるが、父熊は私を出て行けがしに扱ふ。是は抑何の爲だか私には些も了解が出来ない。兎に角、私は成るべく傍に寄りぬやうに、話も成るべく爲ぬやうに、食物も成るべく頼めて貰はぬやうにして居た。私が戻つて来た晩の事。父熊が朽木の上を轉げて廻つて居るので、私は

母熊と二個で何事かと思つて駆付けて見ると、父熊は私を睨んで酷く呻へるので私は怖毛立つて、引下つて見て居れば、父熊は母熊と齒を分けて食べて居る。是限り私は近くに寄り付かぬ。私は獨りて食を求め得るのだから些も構つた事はないのだが、成らふ事なら今迄通り睡じていた方がいと思ふのに、父熊は實に残酷である。私の見付けた食物を否應なしに横取る。或日偶然蜂蜜を得た所を、父熊突然掠奪つて、私は指を啣へて見て居る傍で、母熊と二個で美味さうに喫けて了つたのである。

行く／＼一行は一すぢの流の涯に出た、獺の話には人間は未だ一族中誰も見た事がないといふ事。流は西から流れた、川といひ得る位の廣さのものである。流に沿ふて二日三日下つて見たが更に人影もせぬ。て更に踵を轉じてもとの所へ引返し、又二三日歩いて山の中へ入込んだ。人間の居ない所に土着するといつても、そんな所があるかどうか頗る覺束ないが、此所ならば孰の方角に出ても七日の道程では人間の住居には達しない。人間の入込んだのは遙かに後年の事に屬する。兎に角その間は先づ／＼無事に暮らせる譯であ

つた。

此所に棲家を定めてから、周圍僅か許りの地を廻つては得られる丈の食を漁つて居た。もう彼は冬も近いので、冬期の眠に入る前には集食をやつてムク／＼と肥るものである。此頃は随分雨が多し。一體山地では晩秋の季節に際しては氣候が濕潤で日毎に霧は雨のやうに降る。此時私共は柔い土を掘返しては木の根をくふ。見當り次第青葙の晩熟を摘取る。ツルコケ桃、接骨木の實、適には又胡果を拾ひ當る事もある。併し第一等の好下物は蜂蜜を推さねばならぬ。

酷くあれて寒かつた晩の翌朝。山は雪を積んで居た。最ふ雪の頃であらう。寒は日々に強く、身は日々に眠く懶く成るので、父熊は冬籠の棲家を探す事となつた。幸茲に暴風雨に倒れた巨木の作つた究竟の棲家があつたのを、父熊は別に求めに出た。私が蹤いて行くと、蹤いて来ては不可いと怒鳴り付ける。それでも私は霎時蹤いて行くと、今度はふり返つて噛み付くやうに時え付けて、貴様は自分で勝手な棲居を求めろが、いゝと一喝せられたので、私は

何故そんな事を父熊は言ふ人であらうと考へて見た。併し何れにせよひとりて冬籠をするかと思ふと情なく成つて來た。

冬籠り

場所は直見付かつた。谷間の水源、もとは水の流であつた跡らしい所に、傾斜の地面に對して一本の木が半倒れかけて居る。木の後の地面を少し掘れば棲家には偏竟な場合なので、造作に取かゝり二三時間で可なり大い洞窟を作ら、松の落葉や柴の葉の類を摺き集めて内に布き、その上更に又入口が一杯隠れて了ふ迄布き立て、僅に外に通ふ口を開けて、朝夕出では食を求め飽充すれば歸つて内に眠る事とした。やがて寒は一層引緊つて、全山の生物は悉くその影を潜め、時に風雨の訪ふ外は洵に落莫たるものと成つて參つた。第一に鹿は未だ冬に成らぬ内から窺の中に入つて了ひ、山狗、狼の類は山を下つて麓路の人里近き所に冬を送る。野鼠は夙に其穴中に眠り去り。鳥の内では啄木鳥、交喉、其他小鳥の類が松の梢を飛廻り乍ら残つて居るばかり。

流の縁には氷が張り氷柱が吊る。翡翠と鶴は氷らぬ所を擇んで涉つて廻り、
 獺はその水涯の棲に深く潛んで、在るか無きかを疑はしむる許である。
 その内に冬が来た。寒いも寒いも、私は手足が痺れて了つた。或日の事、
 朝からポツ／＼と、綿を断つて抛げるやうな雪の片が降り出して、午頃まで
 降つた。霏々と飛んで来るのは太した事もないが、大な塊をして墮ちて来る
 のは段々と積もるので、鳥渡の間に天地は一望の銀世界と變じて了つた。私
 は入口の所から目ばかり出して、雪の降る所を眺めて居たが。積ひは／＼遂
 には積つた雪が戸口まで岡へさうに成つて来た。
 併し幾ら積んでも、棲家は餘程巧妙に堅固に拵へてあるのて、雪が棲家の
 内に闖入する氣遣もなければ、又吹雪が吹き込んで来る心配も要らぬ。て、
 私は巴疋とふりしきる戸外の雪と悠然として落葉の櫛に安座しながら窓の暇
 から眺め遣つて居ると、其晩一晩降り徹し、翌日に成つても尙止む氣色はな
 い。翌晩は雪に戸口を塞がれて毫も光明が通らぬ位になつた。私は生れ落ち
 て以來始めて、自分の拵らへた暖かな棲家に只獨り居ると思ふと、快よい自

負の念に堪えないので。掌と咬ぢつて眠んで居る内、段々眠氣が催して来て、
 前後正體も覺ゆればこそ、剩へ日光は射さないし何時朝になつたのか知らな
 い迄熟睡した。翌日も暮方前から睡に入つた、其後四ヶ月といふものは外界
 の雪は消える時なくふり積るので、人間が其家の内に安住するやうに、私は
 夢路にあつて此安宅に住して居たのである。
 殆んど五ヶ月間も引續いて眠つた擧句。借目が醒めて見ると全身恐ろしく
 痺痺して了つて居る。五ヶ月の間から終まで眠通しては無く、昏々として
 他愛もなく夢現の境を辿るのであるが、頗る好い心持のもので、寐床の中に
 は光線が一つ射込んで来るのでもないけれど、よく壁は見え、又世の中は絶
 えず雪が降りしきる。降つた雪が積り、積つた上に降り積るのや、颯々と音
 を立て、暴風雪が狂ふ状やは、暖かに氣持よく寐て居る枕に通ふて、幽には
 了解るのである。氣候の變化は身邊に近づいて來ないので、獨りて鼻歌でも
 唄つて、掌を咬ぢり乍ら腹這つて居ると、さま／＼の事が胸に浮んで來る。
 それが夢に續いて、一つの夢が寤めない内に他の夢が入れ代り、寤めたりと

思ふと今度は現とも別かぬ幻と成る。そんな風で頭の中が混雑して来る、もう何も蚊も別らなくなり、前後も忘れて了つて又グッスリと眠込んで了ふ。すると何時か知らぬ間に目が痛める痛めて見るとどの位眠つたか自分には些も了解らぬ。了解らぬけれど了解らなくてもどうでも可い。只鼻詰をやり、掌を骨め、夢を見る丈の事で、併し適には肩や腰の痺れたやうな氣持がして寐返を打ちたいと思はなくても可い、モウどうでも可い。何も角もどうでも可い。その内漸々氣が遠くなり目に壁の黒白が知れなくなり魂はふらふらと無何有の郷に飛んで行つて、一時間か、一日か、それとも一週間も引續いて眠つたのか少しも知らぬ夢路の熊と成るのである。

新春の生活

最後に成つて愈目の痛めた時は、冬籠をして以來幾度も痛めた時より判然目が痛めるのであるが、此時宇宙の森羅萬象は全く新面目を呈して現はれ来る。先づ身の周圍が濕氣を帯び、爽やか物の匂は煦々として暖かい風の匂と混

つて四邊に充滿ちて居る。見れば最初寝た儘の姿で殆んど五ヶ月を寝返りつ打たなかつたらしく、位置は毫も換へて居ない。先づ其姿勢如何にといふと背を壁に附けて後肢で踏み、前肢を揃えて胸の所に鼻に推付けて居る。睡り乍ら得肢を張つて伸びくがしたいと思ふが、尙其儘で居る方が氣持よく、外方へ出たら賑好いだらうと思ひ乍らも、矢張出ようとはせず。更に一方の前肢を骨めては鼻歌を唸り、昏々として又もや魂は華胥の國に遊ぶのである。こんな事が度重なるのだが、一遍は一遍より外界の光景は層一層と變つて来て、新春の山野の香は一段と強く一段と迫つて来る。その内に日光が射して来る。見れば眼前の雪は融け去つて、射込む日光に伴れて諸鳥の囀り交はす聲は聞の戸を訪ない、木啄鳥のコッコツ、コッコツ、の響が近き邊の木に鳴り初める。併しかくの如き春の氣の迫りも、此方て肚に得耐へぬ思が催はして來ない限りは、容易に此が爲めに外に出ようといふ氣は起きて來るものではない。是即ち空腹の感である。此時飢餓の感が催はす、恐ろしく空腹の感が込上げて來ると、もう此時は決して好い氣持とは云へない。何しろ五ヶ月

と云ふものは些も咽を通すものはなく、出かけて行つて捜さなければ近くに食物があるてなし、斯う成つては掌を背める丈では納得が出来ず是非なくのそくと起上らなければ成らぬ。

起き上がるといふ事は太儀も太儀、餘程太儀で。肩の凝は筋が痙攣けた様に痺れて了ひ。足は尻の下に布いて居たので全く知覺を失つて硬ばつて了つて、是でも先々通りに柔かに成つて自由が利けるのかどうか頗る疑はしい位。先づ目が痛めると頭を擡げて欠をする。此度は胸の所から前肢を擡げて伸々とするのだが、此時前肢の骨々は折れて行くかと思はれる程憂々と鳴る。それが済むと輾々と臥床の上を轉げ廻はり、後脚を代る／＼伸ばす。そして彌四脚でそろ／＼と立ち上るのであるが、戶外へ躊躇げ出ようと思ふ内に何時か自分では知らぬ間に出て了つて居る。

此時は漸と東の白んだ位で曉も未だ深い頃であつたが、山の腰といふ山の腰は眞珠とも擬ふばかりに狹霧が纏ふて居る。それでも久しく日の目に逢はぬ眼には光が強過ぎて刺すやうに感ぜられ、濕氣のある新土の香、松の木

樹脂の匂は芬々と襲ふて鼻を劈く許りである。霧の一方を打眺むれば露色の山土が生地を顯はして居るが、谷底から一方の側にかけては狹霧の間に未だ消残る白雪が斑に残つて居る。到る所樹木の梢から墜露雨の如く、雪融の水はそこら中一面に漲り、低きに就いては谷川、小河に流れ駛るのである。歩行して居ると脚が非常に躊躇付いて、眩暈がするやうて身に頼がない。けれども飯は益甚だしく、それに朝風に吹かるゝと一層食慾が催進めらるゝので、何より餌を索るのが剥下の急務に感ぜらるゝ。て行く／＼岸邊に木の根を掘り、掘つて食つては又進み、其處彼處に萌え出した若嫩を摘んで食つて小迷ひ歩く。日は漸く昇つて、暖さが増すと四肢の倦怠を覺え、食慾が稍に充たさるゝと益判然と目が痛めて来て、身邊のものゝ興味を牽くことも以前夢中て居た時にも倍して、茲に全く新春の生活に入るのてある。

恁様な次第で春を迎へるのであるが、熊に仍つて覺醒に迅速なきを得ぬ。然し其心持に至つは毫も變りはない。痺の切れる事、物の匂の強い事、光線の強く感ぜらるゝ事、饑の甚だしい事皆誰も同一である。て誰も始の五六日

は食ふ事の外に念慮を煩はす遣はない。食ひに食つて之を堪納したと思つて居る後から直ぐと餒しく成る。そこで又食物の詮議が始まり、腹が充つるとまた返つて来て睡り去る。

今歳の春も仔熊の時の去歳の春と其状態は些も變りはない。栗鼠は木の上を饒舌つて廻り、啄木鳥は頭の上でコッコッ、コッコッ、と忙しげに働いて居る（疑はしきは件の黒公で、あの山火事で焼死の最終を遂げはしなかつたか）。まだその外に野鼠といふ奴が居る、ムクムクと肥つた、ヨロヨロと歩む動物で、私と同じ天井の下に棲つて居たが、私より先に目を覺して出掛けを行つた。初め目の痛めた朝。私が深川の方へ下つて行く途中で例の悪性の熊に出逢つたが、私は之を撲らうともせず。水涯で鳶色の獺奴が切に魚を捉つて居る状をも見て過ぎた。

内から溪流までは一町かそこら位あるのだが、初日は漸と此所まで位しか歩けなかつた。併し食物の考慮がなくなり、種々な事を思ふやうに成つても昨春妹と丘の上の杉の根方で遊んで居たり、雪の中に陥ちた時の私と、今歳の私を比べて見た。始終そればかり考へるといふのでもなかつたが、思ひ出す毎孤獨に耐えぬ情は益々切になると覺ゆる。父熊や母親達は冬籠の地點を此近邊に卜した所から見ると、直近に居るに相違ない。こう思ふと、矢も楯も溜らず一所に成らうといふ氣に成つた。

別れ路、孤影零然

て冬籠を出て彼は一週間許も後の事であつたらう、尋ねに出た時は苦もなく場所は見付かつた、が又思設けぬ事に出逢つて一驚を吃したのであつた。

近づく儘に熊の聲がする。「ハテナ、妹の聲宛然だわい」と思つた。いや決して疑もない妹の聲だ。私の後肢を咬へて岩の上から引下ろした時の聲だ。私は歩を速めたが、一見して忽ち真相は了解つた。

私はチツとも思掛けなかつたが又二頭の仔熊が産れて居る。聞いて居ると他の熊が来たから用心せい、と言つて母親が孩熊を喚ぶ聲がする。て私が近づくと母親は母親の側に馳寄り、身をすり寄せて、私を怖いものでもあつた。

やうに腕んで居る。私は鳥渡氣後がして、母熊が又私には全然知らぬ熊のやうに思憐された。が暫く立停つて又其状を見成りつゝ近寄つて行くと、母熊は様嫌克く私に會つてくれた。併しそれが全く自分の仔熊に對する態度でなく、あかの他熊の友達か何かに出て會つた時の態度である。此時仔熊は母熊の陰に小さく成つて目を鑿て居る。私は懐しういふと母熊も満更私を可憎敵熊とは思つて居ぬらしい。只驚いたのは側に立つて見ると、私の思つた程母熊の大きくない事である。

程なく母熊は、父熊が歸つて来たから用心せよと言ふ。て私はより肉いて見ると、山腹を此方へ指して来るものがある。私の影を一ト目見ると父熊はハタと停つて猛く一吼した。初の程は父熊が私たる事を知らず、只他の熊が母熊と話などして居るのだと思つて、驚いたのだと思つた。然るに私といふ事を知り、私が會釋をしても尙疎けなく地邊に座つて高く睥ては、又頭を左右に打揮つて近寄つて、何しに來たかと言はぬ許りである。爰ても私は父熊が思つた程に大きくないのに又一驚を喫して、向ふてその氣なら何、喧嘩

をしたつて構はせぬといふ肚にも成た。私は双熊と一緒に居たいが山々で、幾ら父熊が疎んだ所で、又憎んだ所が、もとは親子。敵對の心も苟且は起つたが、併し幾ら身丈が伸びた所が、父熊の力には及びもつくないし、假令謀反氣を起して見たつて、到底それは出來ぬ話。加之母熊は只私に只柔しいといふ丈で、父親を説いて親仔睦じく棲はうといふ考があるかないか不明である。

て父熊が寄つて來ると、私は些しづゝ遠退く。仔熊も父熊と一緒に成つて、見も知らぬ此他熊を咆え立てる。是て父熊も強に私に喰つて掛るでもないが、母熊の側に寄つて、是は自分のものだといふ風で毒めてやる。私は爰を去るに忍びない。て父熊も早晚思返して呉れるだらうから、まづ停る事にせうと思つて、そこに座ると、父熊は大喝一聲。其様には用はないから匆々此處を立去るんだ、とさめ付ける。

私は是迄寂寞には馴れて居た筈だ。又現在肉身の父熊から疎まれた爲めに今更慘な者と成つたと云ふ譯はないのであるが、實際私は慘な者である。妹

が初めて捕へられた翌晩でも、又妹の死骸を見た朝でも未だ私は眞の孤筆とは思はなかつたが、母熊の傍を離れて山を下り、自分の古巢にすごとくと返つた時、初めて我身の寄る邊なき孤影を顧みて、眞の寂寥を感じたのであつた。返れば栗鼠も在り啄木鳥も居る又野鼠もそこら邊を駆廻つて居るが、今は彼等も却て思々しきものと成つた。私の身に取つて彼等が何の友だらう！私は孤獨だ。私は族熊の中で一箇の同伴が欲しい。

今や私は眞に裸一貫。頂天立地只の一熊法師の熊と成つて、自分獨りて廣い世界を食つて渡つて生きて居る境涯と成つた。勿論導いて呉れる熊もなければ、世話の要る時に世話をして呉れるものも無い。四顧皆我敵で、速く死ぬがしに皆が私を遇らふのである。

此時圖らずも私は熊の日の獨り者の熊の事を思ひ出した。彼奴は他の空巢を横領して我物顔にした奴で、今後逢つたら熊の日の復讐をせねば指かぬと迄私は思込んだ奴であるけれど、今に成つて見れば其節に意地悪るくも他に衝突つた胸中も推測することが出来るので、今逢つたら私は乾度越しく交ら

うと云ふに相返ない。

私は熊に諸の獸共が私の死ぬのを喜んで居ると言つたが、是は決して他の野獸から熊が敵視せられて居るといふのではない。私共が殺して食ふものは甲蟲其他の小蟲、蛙、蜥蜴、田鼠などのやうな小さい獸に過ぎないので、彼の狼や山猫や、虎だの跡だのが一に他の動物の血と肉とて玉の緒を繋いで居つて、山中の族の怨敵であるのとは同日の談でない。而も大概の小動物はいなく吾々を恐懼れて居る。吾々熊の屍は飢に狂へる諸動物には一種の養應と見做されて居るので、若し熊が一身を支へ兼ねた場合には他から救助を仰ぐ譯に行かぬ。併し前も言つた通り一匹に成つた熊ならば山中の生物何物に對つても之と對抗して畏懼する要を見ない。但し人間は例外である。

此度は恐怖の念も孤獨を憎む情に比ぶれば物の數にも足らぬ。人間の事を思出ても一向不安の念は起らない。未だく人間の影は此十里四方には還入つて居ない事は確かだが、蛋語は粉々。今にも來るやうに言つて居る。併し私は人間は熟知つて居るので、未だ見なかつた音の様な、又山中の族が今でも

抱いて居る様な、惧るべきもの、不可解のものといふ觀念は事もない。私は人間が危険千萬な動物で、殘虐をも敢てすること言語同斷なることは充分知つて居る。知つて居るから憎いとも思ふ。が又翻つて考ふればその愚その盲寧ろ憫むべきものがある。渠等は全然盲目で、鼻が利かぬ。幾度か町中て人間を避けて隠れ、暗中に立つて其行過ぎる後影を見成つたか知らぬが、奴等は露ばかりも之を知らぬ。山の中には人間程目の利かぬ、鼻の利かぬ耳の利かぬ動物はたゞの半匹も居ない。若し人間が雷艇も何も持たぬ空拳で山に入つたならば跛の鹿より弱いものに爲られるだらう。

最初の數十日間は身の孤獨を啣ちつゝ、目的もなく漂流して食を求め、暮になれば各籠の古巢に歸つて寝て居た。然るに夏期が近づくとつれて、溪流に浴ふて各地を跋躡し日中の炎い盛は水邊の牧草の間に睡り去るのである。私の最も樂みとする所は魚を捕るので、其法は環て母熊に教はつて知つて居る。大抵な熊が飢えた時は魚を捕るには時間が掛かる。故に之を自分の食用に供することは爲得ぬのであるが、私は氣永くかゝつて之を捕へ朝晩の

食膳には大抵鱒を上ぼすのを習して居た。豎くが如き炎天には日暮を待つて草葉の下に身を横へ、清冽な溪水に身を浸し、利腕を伸ばして鱒の近くのを窺つて居る程氣持の好いものはない。來たと見るや一撃を與ふると、瀾たる鮮魚は柔かな夜風の裡に躍つて我掌中のものと成り、味多き食卓の饗應を羞むるのである。恁様な風で漁は頗る巧く行き、日毎の經驗で撃てば必ず外れつこなしに獲られる迄執達した。

次に手の取れるものは蜂蜜落してあつた。が之では骨折甲斐は先づなかつたと云つてもいい。十のものが九つ迄は木の深みにあつて中々手が届かない。徒らに蜂の刺から螫され損て終るのである。

又溪川の岸に澤山の葎林があつたが、嚮に妹熊の一命を賭した畑の葎に比べれば遙に少い。併し此季節に當つては充分に草の實を食ふ事を得た。魚を捕え、蜂蜜を落し、草根を掘り、莓を摘みて、一夏は暮れた。私には今故郷とも稱へ我家とも名づくべき一定の住居がない。て成るべく父熊や母熊の近くに居ないやうにと思つて、夏の間は西へくと放浪し漂泊して、山の

深みに分け入つて行き、秋とも成れば再び取つて返して南を指して下つて来る。天己に寒さを告ぐる比には昔の棲居から近いところに居をトすることゝした。此間に經來つた跡を數へたら殆んど山路の百餘里にも及んであらう。併し今歳は平穩無事の一年間であつた。再三大熊に邂逅したけれど、巧く外して逃げ延びた。一度人里に近づいたけれど之も難なく避くるを得た。殆んど毎日のやうに他の熊の誰某達には面を合はせて居た。或る時はそれらの群の一員として、莓林を訪ふ時の如きは一緒に成つて居た事もあつた。けれどもどの群もこの群も私といふ一匹並の二歳熊を容れる餘地のあるものは一つも無い。兩親熊揃つた仔熊連には最早用はない。二歳熊と見れば大概双もので、私の逢つた内て孤獨の熊といふ熊は殆んど私共より年長者の雄熊に限られて居るので、適逢ひは逢ふたけれどこれぞと思ふ夥伴は尙當らぬ。逢ふもの毎に驚いて居る事は私の齡に似合ぬ大柄であるといふ事で、同年生の熊も私の眼には仔熊としか思はれぬ。二歳齡上の熊さへが背高は遙かに低いのを多く見た。多分力も及ばぬであらう。是全く羸にも言つた如く其死生の巻

を出入して來た實であらうと思はれる。遺憾にも冬が來て山嶺已に白く灰色の空に輝く頃まで、眞に腕試をする機會は來ず、孤獨に處し、寂寥を負ふも南船北馬。愈冬籠の地をトしたのは昨歳の古菓と遠からぬ山腹の、幾年の昔か棲むだ熊の跡と覺しき荒れ果てた洞窟であつた。

初陣

年は明けたが、春の來るのは大變遅く、漸く暖氣が催はすがとすれば又餘寒が酷しくて、平素なら今些しは暖かであるべき頃を、私共は半層かゝつて凍つた雪の中から食物を索めねばならぬので、其困難は寒さの時とて大變であつた。木の根、若芽も思はしく得られぬ。野鼠、栗鼠の類も容易くは手に入らぬ所から、今迄は骨で手もつけた事のない田鼠を掘つて食はねばならぬ仕誼と相成つた。こんな風で兎に角月日を送る内、花咲き鳥語も春の候に成つた。最早私も成長して一匹並の熊に成つたので、遂に他の親熊に逢つた所が、道を譲つて遁匿れしなくても可いのである。

機會は端なくも到來して、私の眞の技倆を發揮し眞の價値を試験することを得た。

或る日大木の幹の小高い所に蜂蜜の巢の懸けられてあるのを發見した。之を捕るには木に攀昇るより外に途は無かったので、私は昇つて行つた。然るに之が骨で話した通りの難物で收果が勞力に當らない。巢は木の股の陰の間に狭まつて居て、私の腕が挿込めない程であるから。鼻先では蜂蜜の芳香が蒸々と薫る、私は寧ろこんなものが無い方が佳いと思つた。て三本の肢で木に捉まり、前肢一本を巡ばして蜂房の中を掻き廻すと、蜂蜜は會得もなく飛來つて、顔といはず、双眼といはず、鼻尖から耳朶まで透間なく溢し散らすので、痛い事夥しい。得耐えず私は到頭木から這り落ちた。

地上にありた時だ。ふと見ると一匹の熊が遠からぬ邊で此方の動靜を窺つて居る。只窺つて居る丈で、別にどうせうと言ふのでもないのだから何も苦狀を言ひ立つる譯は少しもない。然るに蜂からは驚し立てらるゝ、氣は苛急つ、餘憤の洩し所の欲しい折ふし、力試しの好む對手御參なれと、其姿を一

目見るなり喰つて懸かつた。此熊は年並は奇つて居るが、背丈は私と對位である、併し此方は初陣、對手は數度の場を踏んで來た、老練の剛の者であるかもしれない。けれども怒氣憤々。一身が如何ならうと少しも構はぬ。只何でも角でも喰倒し、撲り倒してやれば佳いといふ所に持つて來て、向ふは些しの用意もない、人間の所謂裁から棒に吹かけられた喧嘩、ハッ當りの傍枝と喰つたといふ氣味であるのだから、私の第一襲は惡辣猛烈、殆んど對手が支ふる事の出來ぬ位なのは當然である。最も對手の方でも私の體度に應じて早速に身構をして對つて來た。

何かは以て猶豫ふべき、蝶蜂の如く固めた私の鐵拳は見事渠が頭上を見舞つた。と隙をも見せず飛付き様、盤上に轉かす毬子の如く、二態は一の塊となつて、大地の上を押轉ばされる。此時の一撃は確かに奴の頭の骨を徹底に叩き碎いたに相違ない。若し私が渠の脛に喰付いたらそれが最後、奴は一命を爰に抛たねばならなかつた。そこは場敷を踏んだ丈、練れたもので、引外すや否や、雲霞と遊延びて了つた。此時奴から酷く喰付かれた肩の痕は

永く痛んでまだその痕がとれて了はない。
 双筒が喧嘩の真最中に例の蜂殿は容赦なく飛來つては所搦はず螫し散らすので、一方ならず苦しかつた。て幾ら怒つて見ても詮ない事だから、對手が居なく成つて見ると、もう蜂を相手に喧嘩も出來ないので、追つて來るのを拂退け、遁げられる所まで逃げ延びた。てまづ此所までは蜂も來ないと思つたので水涯に休らうと一息。螫された痕を水に冷しながら、有りし事ども思浮べると、自分ながら自分の突飛な振舞に驚かるとばかり。實際たつた今の其間際まで他と喧嘩をせうのなどの意志は卵の毛の先に置く露ばかりも思ひ寄らぬ事、殊にあの熊に限つて喧嘩を吹懸けねばならぬ譯も何も有つたものではなかつた。若し私が只尋常の途上であつた熊と出會つたものなら、虜度私は友誼を結んだものである。若しあの時でも平氣に考へたら、餘程大切な事件でも此間に蟻つて居ない限りは、無關係のものに喧嘩を買ふなどいふ事が出來るものではない。兎に角事は咄嗟の間に降つて湧いた事なので、何とも自分にも了解らぬ出來心からであつた。併し今度生れて初めて眞劍勝

負を試つて、對手に勝つた。此一戰の経験が多量の知識を與へてくれたので、之に仍つて凡て喧嘩には先んじた方が常に勝つ、そして全身の勇を奮つて一舉に迫るのが最も有効確實の兵法である事が證明せられた。て、私は蜂には螫され、自分にも知れぬ氣紛れから妙な事を構へたのに一驚を喫したものの、衷心無限の満足を感じた。

實際私が發つて初陣を試つたのは、所謂戰鬪の世に立つ首途のさいらちを背からしめたので、至極佳かつたかも知れない。熊といふものは生涯幾多の戰鬪を経ねばならぬ。只其熊々の持前から、或は戰鬪の勢いものもあらざし、多いものもあらうが、多少は避くる事の出來ないものである。殊に一生涯の關ヶ原ともいふべき一戰は否應なしに、是非共男熊たるものは一度は試らねばならぬ。則ち雌熊の爲めに戦ふ戦ひである。勿論一戰で勝つとは限らぬので、一敗すれば更に再舉を圖る。再び敗るれば三たびの戰を試る。併し熊の内でも生涯到底雌熊を娶る事の出來ないものはない。又或る者は一たび雌熊を娶つて置き乍ら、更に他のに鞍代へをやらねばならぬといふもある。

併しと交れかきまれ一度は、自分の仔熊に母熊と言はれる奴を掃らへる爲めに、喰を胃さねばならぬ事に成つて居る。

生涯の危機 雌熊を贏得

私の生涯の危急存亡の機は此夏に當つて到来した。思ふに多くの熊は一ヶ年若くは二ヶ年は獨身で遣つて行くやうである。

此一夏も蜂房事件以後は昨歳と同じく先づ無事の方で、山中を縦横無盡に踏破して、或は漁業、或は蜂蜜落し、草の根を掘り、甲蟲を探し、毒を摘み、朝夕は涼を追ひ炎を避けては木下に憩ふ山住居をつゞけて居た。併し氣が荒くなり、喧嘩好になつたやうな氣がした。他の熊と道を争ふた事も再三ならず有つたと思ふ。恚那時でも他の熊は皆道を譲つて私の我を立て通してくれたので、私は山の大將を以て自ら任じ、山中を横行して自ら快しとして居た。けれども寂寥は依然、此夏は殊に甚だしく寂寞を感ずる。

然るに此春の不順の天候で葎林は勢からず損害を被り、今年は甚だ毒の凶

作である。従つて荷も毒の果實の生つて居る葎林なら、寄つて採つて熊共が付いて居る。て、今は殆んど平げて了つて、唯一つ残存つて居るのは小さい毒畑ばかりなので、私も直近所だから或夕暮に其處に出掛けて行くと、恰ど叔位の背格好の熊がやつて来た。此奴一番喧嘩を賣つて遣らうと思つて近寄つて見ると、奴は雌熊なので、而も一見甚だ氣に入つた。對手が私に對する狀が又頗る好望的である。

私は是迄に未だ女熊に思はれた事は一度もなかつたが、誰教ゆるでもないけれど、此場合の措處は丁と心得た者で、デリ／＼と鼻で地を嗅ぎ乍ら脇の方からにちり寄つて行くと、雌熊の方でも待て居たといふ風で私を迎へる。段々と近付いて一段ばかりの距離まで寄ると思ふ頃、忽然として彼の葎林から一頭の雄熊が現れて来た。と卒然と私を目がけて壁へ立て乍ら、數の四邊を嗅ぎ立て乍ら喧嘩を挑む狀である。もとより此方も望む所と、應戦の準備をした。さなきだに喧嘩とならば敢て辭せない方であるのに、搦てゝ加へて、雌熊の方では新來の雄熊より私の方が氣に入たと見えて、奴に對して牙を現

はすので、雄熊の身として何と阿容々々無事に此場が退れよう。千万の荷の
 林も、世の中にありとあらゆる蜂蜜も、何であらう。愈よ生涯の危機は近づ
 いた。思設けぬては萬更無つたが、唐突にも今や其時と成つたのである。
 對手も私と同じ肚である。て、屈強の雄熊二頭は呼吸を測つてシリ〜と
 詰寄する。殆んど兩者の間には多くの軒轅を見ないのである。私は心ばかり
 も背長が高い位であるが、對手は老功の古兵と見受けらるゝので、體の建配
 も、貫目も私より上手である。一體私共の族が唯一の武器と持むはその前肢
 である。若し小獸が此一撃に逢つたら頭腦は微塵となつて碎け飛び、稍大柄
 な獸でも眩暈をして打倒れるか首の骨を粉碎して了ふ。併し大抵同じ體格の
 互同志の戦には此術は巧く利かぬ。態に格別の相違があれば兎に角、大い
 方は對手の貌を撲つて眩ませ、進んで戦ひ得ない位迄に爲せるのが關の山で、
 それも圖抜けて大柄な熊が小熊に向ふ時は、劣者の腕を叩き折つて、拳の雨
 を降らせ、對手に到底叶はぬと諦めて逃出させる位の違は有る。併し我々三
 個は殆んど體格に大差なく、最初の打撃は執にせよ左したる効果は裏らぬ所

から全身の力を牙に罩めて、接戦して雌雄を決するより途はない。然るに嚙
 の日蜂房事件で経験した所では、凡てこんな氣合ものには最初の突進が極め
 て大事なもので、どうしても體の大い方が勝腰が強く、イザ接戦となつては
 筋骨の逞い方、ドンシリと肥つた方が優勢である事を學び得た。て今や戦はん
 とする此場合、私は全身の勇を絞つて一舉に敵を倒さんと決心したのである。
 先づ戦端を開いたのは對手であつた。兩箇はデリ〜と隙を覗つて近寄る
 内、渠は左拳を延ばして曳と打下した。若し此時避外したら私は半分耳を失
 くしたかもしれぬ。大抵の喧嘩なら何方か一方の弱る迄この撲り合を續ける
 のだが、私はそう迄は待てない。敵の一撃が私の頭上を掠めて空を撲つと見
 るなり、翻飛と身を躍らせて敵の足元に飛込んだ。と拳を堅めて了々と、息
 もつかせず滅多打に拳の雨を降らせたので、對手は不意を撃たれて狼狽し其
 儘そこに仰向に倒れた。得たりと私は打跨つた。
 併し戦は是て未だ幕が明いた許である。私は敵の機先を制したといふので、
 氣の持ち方が大分違ふ。最も熊がいざ真劍の勝負を決するといふ時は、一

遍の迫撃て委む事は決してない。到底格闘する事が出来なくなる迄は戦つて見る。吾々の戦は半刻許りも續いたが、中で二三度引分れて息を繼いだ。一生懸命の働きだから、力を休め氣を新たにせんでには到底駄目である。息を休めて再び懸つた時は毎も例の戦術で、驀然に敵に肉薄して、彼を倒し、未だ牙を用ひて争ふに先ちて、先づ敵の荒胆を挫ぐ事をやつた。果然此術は多少の効果を収めた。否、勢くとも自分も是れ度此喧嘩では勝つのだといふ自恃心を得た。此の事は有つた。

敵の死命を扼するといふ筆法は、先づ其鼻端を力の限噛み付くに在る。て私は危い所で對手から此術にかけられようとした。其時の古疵が此通り此鼻の横の瘻で、奴の齒痕の名残である。幸ひにして咬付くは付いたが甘く外れたので先づ助かつた。此術は甘く行けば好いが、若し外れたら體中に虚を拵へるのだから、頗る危険な法といはねばならぬ。此時私は其虚を衝いた。腰の邊右の後脚へ思ふ存分に深く喰ひ込んだ。こうなつたら渠の肉も骨も微塵と成つて碎け、今は何如する事も出来ぬ。只一の希望は私の耳の後に噛み込

めば、私が離す、其隙に乗じて逃げ出さうといふより外に術はないのであつた。がそこに如才はないのだから、さうはさせじと私は右脚で渠の鼻端をばね除けくして挑み争ふて居た。

此時だ。凄いと云はうか痛快といはうか、觀者の位置に立つた覺がないから、推察すればさうもあらうかと思はれる。兩箇は一振身と捻ると膝と其場に頭倒して、彼が上に成るかと思へば私が上に成り、互ひに劣らず揉合ひつゝ、軋々と轉げ廻つた。

併し私は下に成つて居ても、上に成つて居ても喰込んだ齒牙は些も弛めず、却つて漸々深く噛込むばかり。渠は私の耳の後を噛まんものと焦る。私は之を脚でもつて盲滅法に掻除けくする。幾度となく頭の上で渠の牙が空しく外れて鳴ひく音を聞いた。愈渠は死物狂に成つて狂り狂ふ、私は依然離さない。私は物をも言はず噛付いて居ると、彼は恐ろしく呻へ立て喰ひ廻る。其聲は漸く烈しく凄しく成つて来る。私の齒と齒の間は益近づいて、何うやら骨が紛紛に酔けて來たと思はれる。咆哮の聲は次第に悲鳴の聲と成つて來

るので、サア占めた、勝は我物だと思つた。
 此時若し今一ト噛み付いたら、渠奴が足は痺れて了つて利けなくなるのである。私は彼奴を離しざまと衝いた。彼奴はたぢくと三本脚で跼蹐け乍ら退く。私は又もや飛付いて發止と一ト打、又一ト打。撲つてく打のめして突と衝いた。未だ彼奴は戰はうといふ氣勢を示して居る。併し幾ら剛氣な奴にせよ、全く一脚を失つては最早其甲斐はない。私は歩一步彼を窘迫して平地から山側まで追詰めた。かう成つては道の彼奴も再び盛返す勇氣も挫けて、一本の脚を曳擦り乍ら力を限り逃げ出して行くより途はなかつた。
 此喧嘩の始終を見成つて居た雌熊は、勝負の付く迄一言も發しなかつた。此間私はその方を見返る進もなかつたが、中で息を繼ぐ時、其居る方を見向く毎に渠は態と眼を駈らして、何事が爰に起つて居るか頓と知らぬといふ風をして、大空の雲の徂徠を眺めたり、體の其所此所を掻いて見たり、種々に自分は無頓着だといふ風をして見せるのであつた。が決して無頓着でない事はその態と空々しくする素振で充分讀めるのである。

今戦ひ果て、近寄つて行くと、直側に近づく迄は素知らぬ顔をして、私の方
 は見も返らなかつた。て私かヌツと鼻尖に顔を出すと、怪しからぬ振舞かな
 といつたやうな態度で甚く唾を。但し其真意は決して左様でない。私は甚
 だ憊れた。その上身内中には、十ヶ所も手痕を負つて、鮮血が流れ出て居る
 ので、十歩許も去つて、地上に平伏して憩ふて居ると、渠は熊はやをら身を
 起して、私の側に近寄つて、鼻尖を私に擽り付けては、嚮の心にもない仕打
 の詭言を言ひ、私の痕口を吸ふて呉れる。

恁様風に勞はつて呉れる傍、私の武者振が實に立派なものであつたと言つ
 て褒め断るので苦しい瘡痕の間からも嬉しく、誇らかに感ぜらるる。尙彼は
 其身の上の話を互み代りに話して聞かせた。齡は私より二つ老けて居て、負
 けて逃げた牡熊は一つ上であつた相である。彼奴と知音に成つたのはツヒ三
 週間許り以前、自分の雄熊と二頭の子熊に死別れて間もない後の事で、其雄
 熊も子熊もかの雷挺で殺されたのである相だ。其所は此地から遙かに距つた
 東の方で、其時から人間の居る邊を遠退くやうにしたとの事。

此を聞くに更に憐しさの情が増して来る。て私も妹の事、我身の上の語をして、二夏の間の孤獨を訴へた。併し今や卿の勢助を得て寂寥を忘れたいものだと云つて聞かせた。彼は未だ三歳位の青二才だけれど、此私なら身を任せても佳いと言つた。若し此儘に發育したら、次の年の夏には恐らく山中の熊に私に敵ふ熊は一匹もあるまいとの事である。尙いふには、初めて見た時から眞實見上げた熊と思つた。て喧嘩が始まつても、どうか克つて呉れれば佳いがと祈るやうに思つて居て呉れたのだ相だ。併しそれと氣色に表はす事は如何にも出来なかつたといつて居る。實際私は妹と一緒に居た昔よりも何となく幸福なやうな氣がする。

私は充分疲勞を癒してから、身を起して、月光の輝く下を河邊へ下つて行つた。爰て私は血痕を洗つて瘡口を清めた。て暫く経つて又もとの毒烟へ返つて夕のものをしたため、更に相双んで森の中を彷徨ふのであつた。渠は私を極めて親切にして呉れ、その親切をするのが楽しみだと言ふ。又實際樂みであるらしい。兎に角私にはこんな事は初めてなので珍らしい。かくて星影の輝

く下の草原に眠るのであるが、目の覺めた時には傍に渠といふものが居ると思へば些しも物淋しいと思はぬ。私は丸て知らぬ新規な世界にても入つた様な感じがするのである。

目が醒めて見ると果して渠は横に居た。併し體中疎んだ様に硬張つて身動も成らぬ。直に起き上らうとしたが身の内の骨々は折れて行くかと思はれ、物身は岑々と疼く、其内に渠は目を覺まして、私を介抱して起こしてくれた。て千鳥足を曳ずり乍ら食を索めて少許歩いて見たが、物を掘らうと言つても腕が利かないので、渠が掘つた木の根を頰けて呉れ毒を摘んで候を凌いだ。て頰然疲れて了つたので、輾と横に成つて翌朝まで睡つて了つた。

此身内の疼痛の除れたのは數日の後の事で、瘡の全然癒つたのは數週間も後の事であつたが、其痕は今もまざくと斯くの通りに殘つて居る。あの喧嘩に負けた雄熊が懲りずまに、我雌熊を誘拐す目的で、此邊を徘徊して居る。思つて見れば可愛相な譯で、今では生れも付かぬ片輪と成つて跛を曳いて廻つて居る。私は喧嘩を挑む氣は些もない、また毫もさる必要がな

い。我雌は奴を見ても一言も言はず、尻眼にかけて些しも取合はぬ。餘り近く寄つて来た時には牙を怒らして喰えるのであるが、其意の何たるやは誤りもなく了解せらるゝ。私は實際身に覺のない事もない所から其孤獨が可愛相てならぬ。雌どもを見ない前なら兎も角だが、それは他から取られて、自分には只獨り法師と成つて居るのだと思へば實に氣の毒千万である。併し暫の後には所詮駄目だと諦めたと思えて、其後再び影も見せなかつた。私共も又久しく一所に停る事なく殊に此夏の間は涼を追ふて漂浪の生を續けて居た。私共兩箇は申分もない似合の配偶であつた。嗜好が同じで、身丈も殆んど對て、力も互角の間に有、双方共人間が嫌ひて、成るべく人間を避けたいといふ希望を有つて居た。私は雌位嗅覺の鋭い熊は未だ見た事がない。又蜂蜜を落す事には頗る妙を得て居つた。兎に角熊が伴侶を得て一緒に居るといふ事は何角につけて益ある事て、先づ見る眼が二對聞く耳が二對、嗅ぐ鼻が二對あつて一箇で動かぬ木でも石でも、二箇かゝれば容易に動かす事が出来る。私は只獨り居つた時に比ぶれば、侶を得たといふ今は實に身に餘る程幸福である。

ある。只小事件に關しては雌奴、時々女權をふり廻す。是は母熊も父熊に對してやつて居たので、結局それが氣に入つた。

懷古、人寰

夏以來私共は一緒に暮したが、雌も私同様で頗る此境遇には満足の體である。豫ての期望は事實と成つて現はれた。私の背丈は漸く伸びて、今は此山中に敵ありとも思へぬ。最早如何なる熊でも私共二箇揃つた所には指一本も指し得ぬ程である。雌の身長は私の肩丈位だが、ドッシリと出来た體軀は肉付堅く臂力又頗る強い。それに胸の邊に一團の白斑が生じて居るのだが御自身頗る之が得意で、汚がさぬやうに大切に居る。一緒に成つてから一度故郷を歸省せうといふので、引き連れて彼處に赴いた。行路は約一週問程。近づくまゝに驚かすのは桑海の變の迅速なる事である。此處を去つたのは三年許の昔に過ぎないが、今は古の道も分かぬ迄、人間の棲家を以て充たされて居る。その邊から怖毛立つた雌を勵し乍ら、用

心に用心を重ねて、流の際に點綴して建つた人家の邊へと近附いて行く。二條の流が合した邊は既に儼然たる都市を成して居る。燒野の跡には尙ほ黒い幹が轟々と當時の面影を偲ばせ顔に立つて居るが、地は一面の緑の叢と青草が繁り、葉は勢よくその梢を延ばして居る。右を見ても左を見ても人工を加へた結構經營ばかりである。

行き／＼てかの火事の際に一命を拾ふた流の陸まで達した。そこら一面沼に沿ふて大な建物が打續き、前には山を拓いて青草の毛々と生茂つた廣場を造つて居る。私は此時初めて牡牛と言ふものを見た。私は今迄随分騾馬や小馬が大束の物を背負つて人間の造つた山逕を牽かれて行く處は見たが、爰ては流に沿ふた街道を車を曳いた馬の歩くのを見た。併し晝間は憚ある事なればかゝる経験も多く黄昏頃から夜分にかけての事で、臭や聲でそれと見分は付くのである。

夜に入つて廣い街道に出た時、二頭の馬が車を曳いて來るのに會つた。此奴面白い物に逢つたと思つて、用心し乍ら近づいて木影から其状況を見て居

ると、恰も私共の居る前途來た時、風に臭の傳はつたか、馬は愕然として狂ひ出した。その儘後に引返さんと躍り上つて身を翻す途端、バタリと立木に衝突かつた。と首を垂れて身悶へして、向ふ見ずに街道を後の方へ驅け出した。車は馬の後からガタヒシ、ガタヒシ音を立て乍ら、今にも毀れん許の勢を以つて揺れて行く。人間は聲を限に叫び乍ら、切に鞭を加へるのであるが、狂ひ怖えた馬の耳には東風の吹くほどにも聞こえず、颯風の如く一目散に驅け去る。と道の曲り角の所でガチリと馬は立木に衝突つた。其時の事變はよくも見えなかつたが、車は見る影もなく破碎して、北へ行くと馬は猶其破片を曳ずつて居る。而してそこには最早人の影は見へなかつた。

私共はその曲り角の道に出て見た。粉碎せられた車の軸や輪や其他の器の間に、半分は山半分は道と成つた所に人間が横はつて死んで居る。暫く遠く巡した末、愈死骸に近付いて鼻で觸つて見て、肢で動かして居る時、又もや森々と車の轆轤音。逸早く私共は木かげに身を躲した。此度も馬が恐れて騒ぎ出したが、それは私共の臭の所爲か、人間の亡骸の所爲かよく判らぬ。人間

は下りて来て熱々死骸を點檢する模様であつたが、それを携へて馬を急がせて去つて了つた。

夜明頃まで此邊をぶらついた末、愈昔の家居のあたりを探檢せうといふので、半哩許も人家の續いた邊を行く。行くに随つて軒の稠密の度は加はつて来る。これでは到底杉の木があつた昔の家、私の雪中に轉げ込んだ邊、黒公、栗鼠、啄木鳥の居た邊に出るのははむづかしいと思ふ内、夜も明方近く成つたので、二條の川の沼に落ち込む邊へ引返した。最早爰も熊の國ではない。

山林に生息するものに取つて、人間の侵入がどんな意義を有するものであるかといふ事が、今始めて曉り得たのである。以前人間の都市も見た。流に沿ふて上下する人間も見た。がそれらの人間は決して茲に永住するものではないのだ、とはかり私は思つて居た。豈圖らんや彼等は到る所に町を造り、牡牛を飼ひ、馬を役ふ。其計の存する所永遠を期するに非ずして何であらう。彼等は山といふ山の立木は之を斷倒すので、茲に住する生物は皆遁げざるを得ない。彼等は山嶺を變じて坦地とする。だから私共は久知古跡の地と雖も

之を知る由もない。私は適々故郷に歸つて、其荒廢の異常なるに驚きもし嘆きもした。遂には到底極め盡す事の不可能なるに断念して、悄悄と北を指して歸つて行く私共二人は、實に快々として樂まなかつたのである。

此邊では四周に人間が居るといふので寸分の油断もせぬ。彼等は溪流に沿ふて掘るはく、掘つては又掘り又掘るのである。何の爲めに絶えず掘つて居るか毫も分らぬ。其勞作して居るのを見ると、地上から何物も拾上げて食べて居るやうな模様も見えない。適々掘つて居ない時には木を伐倒して居る。多分此は家を建増したり流に橋を架けたり又枝は火を燃く薪にするのであらう。だから人間到る所森林は其姿を失ひ、河川は其形を變へて溝を拵へ砂利を積み、青草一つ生へぬ場所を成して、食物を索めようと思つても見附からぬのである。て行くく私共は成るべく流に遠かつて、山腹を微行し、波らねばならぬ時に限つて水涯には出たのである。幾晝夜かの後又圖らずも人家の稠密な地に小迷ひ出た。恰も朝風が人家の方から吹渡つて居たが、雌は突然地上に腹這に成つて呻くやうな聲で一言、「豚だ」と叫んだ。

私も豚の事は以前聞及んで居た。雌は身命を賭して之を味つた。其時の苦は今も忘れぬが、矢張世界中の食べ物では豚が最上の味を持つて居るものだという説には左擔するを吝まなかつた。私も嘗て町へ出た頃芥溜の中などで拾上げた御馳走は、我は豚であつたかも知らぬと思つた。併しそれは料理した鹽豚で今殺した儘の朝鮮な生豚ではない。熊の最好上味とするのは即ち此生豚の肉である。今雌が嗅ぎ付けた香氣は私には初物だが、何だか滋味さうな匂がする。

此香の原は大な建物の傍に在つて、妹の閉込められて居た檻に似て甚しく低い圍の内からである。雌が四這になり私が其背に上つて窺へば、檻の内の状況は恰も犬小舎のやうで、泥土の床は片隅に鳥渡した屋根造の箱の中に、白と黒毛の母豚と五頭の小豚が無心に眠つて居る。若し此檻の内に入れたら、箱に出入をするは容易なものだと思つたので、些も猶豫はず一躍して檻の内豚族の真中へ飛込んだ。驚波事だと豚共は騒ぎ出す。其喧噪の状といつたらなかつた。宛然熱湯の沸くやうに、上へ下へと奔ぎ騒いで居たが、一拳

を加へて手近かな仔豚を即死せしめ、口に咬へて檻を出た。

が直に爰で食はうとしなかつた。死物狂になつて豚共が鳴き叫んで騒ぎ立てるので、人間が目を覺しては面倒だと思ひ、匆々に件の豚を携へて山の中に逃込んだ。此時好くも逃げたものだ。今暫くも遲疑して居たら大變であつた。逃げて行く後に方つて、戸が鳴つて、犬の吠える聲、人間の罵り騒ぐ聲が聞える。一里余も落ち延びて溪川の頭で豚を預けて味つた。聞きしに勝る好下物である。世界廣しと雖、種々の食物——蜂蜜、莓、砂糖、料理した物さま／＼に多しと雖、豚の右に出づるものは恐らく無いであらう。

餘りの甘さに堪兼ねて、若し私が一人だつたら、翌晩又取つて返し、今一頭をと掠奪を企てたに相違ない。而して其場に一命を落したに相違ない。併し雌が昔、話した事がある。前の雄や子供達は此術でやられたんだと。其次第は矢張今回のやうに家畜の豚に逢着したので、始の晩に三頭斃し、翌晩に又二頭掠めて歸つたさうだ。すると三晩目には人間に乘ぜられて、今の雌一箇しか免れ得なかつたといふ事である。で、最初此度二年振に豚の匂のした

時に渠は兢兢へて居た。私が豚小屋の内へ入つた時も恐懼の念に耐へなかつた相だ。幾ら味は佳くてももう二度と行く所でない切に私を引留めた。前にも言つた如に貧飽が野獸には過失の基である。私も食指頻りに動くを禁じ得なかつたが、待て雌のいふ事が有理だ。豚は無くとも死はせぬ、生命あつての物種だと思ふので断然と思ひ切つて、初の方角へ漂流し続け、再び人間の巷へは出まいと決心したのである。幾日かの後、爰ぞ人跡未だ山林の聖を汚さないと思はれる地に達した時、兩箇の歡喜は譬へん方もなかつた。悠々自適。晝行き夜行き。怨敵の危害に念慮を煩すこともなく心暢やかに我々の生を享樂するを得たのである。

頃は美はしき秋であつた。思へばこの頃が私共の花ともいふべき盛時であつたらう。出づれば累々と熟した葎があり、止れば心長閑な山住居の樂あつて、前年とは雲泥萬里の懸隔である。然るに心地よき秋日私の季節が打續いた末には今歳の寒の忍ばるゝ氣象を呈して來たので、逸早くも冬籠の準備に取かゝつた。

あか／＼と日は照り續く秋の空を、早くも諸鳥は翼折並めて南の方へと遠げに翔りゆく。聞けば北地は早や白いものが降り初めたとの事。狼や山狗は麓路へ下り行く。朝晩は中々の寒さである。集ると群ると誰も彼も今歳は随分寒い事だらうと謂ふ。併し私共は已に冬籠の準備が出來て居るので一向驚かぬ。兎角いふ間に愈冬と成つて一日遽に雪が降り出した。

其日から穴居の族と成つた。春までは例の昏々として夢幻の境を出入した。自然に醒め來つた時には、雄は未だ出て來ないので、入口の木葉を掻除けて見れば、恙はいかに。何やら聞き馴れぬ聲がすると思ふ箭先に二箇の仔熊は現はれた。私共は親熊と成つたのである。

親心、狼と鹿

何の仔でも同じ事。之を育て上げて一箇前のものと爲るには、其親達の心配は仲々一通りや二通では行かぬ。我々熊に在つて些も變りはない。先づ

猪の刺に螫される、急瀬の波に捲込まれる。此時は母熊の手で生命は助かつた。豪猪の刺に掛つたのは私の幼時の同じ経験が思出された。水に陥つたのは雪に埋まつたと能く似通つて居る。此時全身シヨボ滞に成つて上げられて来た所は機にも可笑しい。母熊は丁寧に舐めて遣つては、ボカリと頭に參るのである。

我仔乍ら見る毎に可笑しいと思ふのは、形状の極めて小さいのと、褐色のムク毛がモヤ／＼と生へ居る事で。自分も昔はかうもあつたらうかと思へば、成る程する事なす事が皆一々に身に覺えのある事共である。

娘熊の方は、死んだ此娘の叔母熊、即私の妹酷似である。仔熊の間はよくやる事だが仲奴が惘然、中空を見つめて立つて居ると、娘は窈然後から忍び寄つて、忽然仲奴の後脚を噛む。て、一場の葛藤が起ると思ふと、後は仲善く成つて樹上の栗鼠と進廻はして、終には口を擴げて其落ちて来るのを待つといふ始末、私共の幼時と其状は些も違はぬ。私は又丘の上から曳落しごつてを救へてやる。先づ私は立樹を楯に立つてさあ来いと兩個を壓くと、一方か

らは仲奴が黙つてデリ／＼と執拗く寄つて来る。娘は又一方から聲を放つて時々乍ら旋風のやうに猛り狂つて飛付いて来て、何所でも觸り次第に噛み付かうといふ氣勢を示すのである。此が又數年前の私共の儼と同一である。兎に角好い兒だ。私共雄雌は好い兒熊を持つたと互に話しては自慢の種である。次には食物の好し悪し、又それを獲る法を教へてやる。先づ百合の根を掘るには双手で土を掘上げるては不可い、横から土を除けてゆくものだ。蟻蛭を開くのは上から窺と掻きのけねばならぬ。野蒜は香て嗅ぎ別けて食べよ。萱の根は恠々斯々だと一々に教へてやつた。思つたよりは伶俐な仔熊共は手頃の石とさへ見れば必ず見道かすことなく、引起して下を探り、又同じ石をあちこちと轉がしても駄目な事だといふ位は直に心得て来た。又倒れた木は残さず丁寧に吟味して、甲虫かケダの類の居さうに成つて朽ちた處は皮を剥いて見、重くなければ轉がして捜すのであつた。又石や木は先づ野鼠やムグラの類が下に居るかどうかよく／＼嗅いて見よと教へた。若し新しい臭がするやうだつたら、一本の肢でそつと、木石の類を擧げて、出て来る所を他

の肢で叩きつけるやうにと教へた。

野鼠の奴は中々の手餘りものであつた。居つたと思つて叩きつける手元をツツツと潜つて、後脚で中空を躍然と飛んで逃げて行く。忘れもせぬ、棒が初めて自分に此奴を見つけた時、口の中へ野鼠が飛込むやうにと、鼻を地べたに付けて、窃と石を引起した。案に違ふて野鼠は石の些許も起こされたと見ると、鼻を地べたに付けて、鼻の鼻から頭にかけて登り背中へ飛んで山の中に逃込んだ。棒は得たりとより向きさま、已に十間も先に逃げて居るとは知らず、背中に留つて居るものとのみ心得、クルクルと身を旋らして探す身振は耐へられぬ可笑しさであつた。

或時は又水邊に出て、水草の根を探る法も教へてやり魚を捕る道も稽古させたが、子熊には辛棒がないので漁丈は甘く行かぬ。

幸にして棒は虎の災難には一度も逢はなかつたが、或る日一大事に遭遇した。一體外に出る時は常に親熊の間に挟つて行くのだよと百度千度も教へてあるが、一日それを打忘れて獨りて出掛けて行つた。俄然悲鳴を擧げて叫ぶ

ものがあるの、雨筒は風の如に驅付けて見ると、二頭の灰色の狼が棒を倒して今にも喰殺さうといふ所である。何かは以て躊躇ふべき狼目がけて飛付かうとすれば、這は叶はじと逃げてゆく。見れば頸筋に齒痕が残つて居る。杖に踏つたが、棒は酷く神経過敏となり、以後といふものはどうしても私共の傍を去らぬやうに成つて了つた。然し油断はならぬ。狼は断えず私共を踏んで居る。棒か娘か間があつたら取つて餌食にせうと心掛けて居るらしい。

私は狼は弗々の嫌である。其體格といひ、臂力といひ随分立派であるに關らず、極めて卑怯な獸である。而して只一頭で、外に加勢がない日には決して小さい獸でも對つて行くことをしない。熊と來てはそれとは違つたもので、一頭で戦ふばかりでなく、假令味方があるにしても助太刀をして貰はぬ方が本意である。尤も雄雌の間柄か、對手と格が非常に違ふ時は格別だが、熊の性質は隠險な事が大嫌ひ。何でも遣れば正々堂々とやる。旗色を鮮明にしてかゝる。決して曖昧な態度に出る事はしないのである。然るに狼は之と直反

對である。何事も狐鼠く〜と陰てやり。兎角他の耳目を避け、自己の力に頼る事をせず、衆を恃んで他を脅かす。實に狡猾な卑劣な奴である。

私共の知つて居ない事でも狼はよく知つて居る。併しそんなに私共は何も角もを知る必要は毫しもない。奴等は私共を指して阿房者といふ。が決して私共に近付いては來得ぬのである。狼が群をして熊を殺したといふ例は屢聞くが、決して其手段は山の中で正々堂々と戦ふたのではなく、五日も十日も後を跟けて餌と疲れとて弱りきつた所を、大勢で速かに襲つて、虚に乗じて斃したに過ぎぬ。若此時熊の方で向つて行けば狼は必ず敗くるに定つて居る。狼が山中に居るのは夏の間丈で冬に成ると里に下る。熊が多くやられるのは冬の山里である。私共が冬籠の穴中に至つては狼輩の敢て窺ふを得ざる處である。

悴を襲ふた奴等も長く私共を跟けて居たのである。幾ら隠れて狡猾であつても風向には抵抗が出来ないので、奴等か仲間同志で殺した獸から一場の喧嘩を起して叫び罵る聲を遠音に聞くことは屢ある。一體それが自分であつて

も又悴であつても、他から跟けられなどいふ事は決して氣持の好いものではない。以後は皆く用心に用心を重ね、悴に獨歩きをさせぬやうにした。一時は怖毛立つて怯れて居たが、悴は他に頼る事の好かぬ、物事を投遣にする事の嫌いな頼母しい子熊である。

所が或る日の事。狼から跟けられて居ると承知して居るので、悴を手離さない様に歩行いて居ると圖らずも一頭の鹿を連れられた鹿の一行に逢つた。悴は何の氣もなしに鹿と一緒に遊んで見ようといふ好奇心から、危険があらうとは夢にも知らずナイと近寄つた。オイ不可いぞ、と留む暇がない。一體鹿は仔煩惱な獸で、極臆病な癖に鹿の事と成ると、戦をも敢て辭せないものである。力は強し又のある角は持つて居るし、決して相手にすべきものではない。悴はそんな事は知らず、仲好く遊ばう位の氣で鹿に近付いたが、折よく牡鹿が近くに居なかつた爲め驅寄つて來る間に、辛くも急場は救ひ出すことが出來た。雌は牡鹿に向つて戦の氣勢を示したが、牡鹿は逃去る氣色は毫もなく、戦へば當然劣けると知り乍ら、雌を相手に雌雄を決せんと、頭を垂れ、

鼻を鳴らし、大地を掻き乍ら雌に向つて進め、掛かれと罵つて居る。雌は驚に倅に向つて角ふり立て、來たのに腹を据え兼ねて居た。けれども私が種々に賺し和めて立去つた。願れば牡鹿はまだそこを去りもやらず、前の姿勢で戦を挑んで居る。若此時戦つて居たら鹿も鹿も共に鹿にするは譯もないが、此方も一箇は其角にかけられて助を貰かれ、重き痛手を負ふものが出来て居るは必定である。

狼が先から私共を狙つて居る事は前にも言つた通りであるが、此時鹿の一行を後にして間もなく後ろの方でけたましき擾動が聞こえた。其物音の何たるやは蓋し察するに難からぬので、狼の叫ぶ聲、木の枝の折れる音、牡鹿の角の鳴る響は其消息を洩らすものである。私共の後を跟けて來た狼が鹿を以て好き餌と做し、牡鹿の反抗は圖らずも一場の修羅場を現出したものであらう。私共は現場に臨んで鹿を助けて戦に加はらうかとも思つたが、立止つて熱と聽いて居ると、さしもの物音急にバツリと止んで再び何たる騒ぎもしない。好奇心から寄近づいて見ると、未だ全く喧嘩は濟んだのではない。怒

れる牡鹿の咆ゆる聲、大地を踏鳴らして猛れる響は尙止まないうて、其場の光景は實に目も當てられぬ悲惨なものである。

其所は圓形の空地に成つて居て、四邊の樹木は見る影もなく折れ、地面に生へて居るものは木といはず草といはず、蹄にかけて蹂躪せられ、角にかけ廻返されて、元の姿は跡方もない。牡鹿は其中央につつ立つて喘いで居る。其前には雄狼は全身見分けのつかぬ迄血塗に成つて鎧れ、牡鹿の肩先からも鮮血が滴り、角は自らの血ならぬ血を以て紅に染返して居る。空地の縁には雌狼が片息に成つて横はつて居る。最早立上つて戦ふ勇氣も挫け果て、牡鹿の襲來にも抵抗ふことが出来ないのである。

牡鹿は私共を一目見るなり、新手の敵と見做してか後ろに控へて居た雌鹿と鷹に合圖をして、先づ落とさせ、自分は殿と成つてじり／＼と退却を初め、立木の中に入つて了つた。雌狼は其退却を終ゆる迄ヂツとして見て居つた。時々私共の方を見ては唸つて居たが、私共が戦ふ氣配の無いと見定むるや、起上り様雄狼の尸の所へ歩み寄つて、揺り動かして居たが、頓てそろ／＼と

舐め初め、亡夫の咽喉を引咬へて自棄肚に成つて咆え乍ら、尸の上に打臥した。見るに耐ず私共は此恐ろしさ餌に付いた獸を打すて、此所を立去つたのである。

茲で一先づ狼の災から免れたので、安堵の胸を擦り下した。

子煩惱

自分の仔熊が災難に逢ふにつけても、昔は無兩親に種々の心配を掛けたらうと、今更に仔を持つて親の恩が知られる。一度は娘が過つて木の下に足を敷かれ、高い崖から落ち相に成つて居た事もあつた。蜂蜜を落とす積り木の股に首を挟んで悴が頻死の災難に臨んだ事もあつた。世間の熊は此様な風を命を墜す事は珍らしくないと云ふが實際、若し此時外に助けるものなかつたら一命を墜すのである。

此等の事件は屢起つたが、先づ幸ひにも難なく、平和に月日を送つて居た。私共の幼時は思はぬ山火事の災難から、遂に人里に通込んで、妹の墓ない最後を遂ぐる事となつたが、此年は未だ人間の影をも見ない。成るべくならば人里に近い方には行くまいと、皆言ひ合せて居る内に或夏の日の事、北の空が赤く雲を焼いて三日四日、歴史は自らを繰返すとやらいふ、又候例のてはあるまいかと静心もなく懼々して居る内に、風は西南から吹いて居るので共は伴にも事なきを得たのである。併し方角から考へると先の山火事のあつた場所の近くに相違ない、聞く所に依れば人間は到る所によく山火事を起さうと、極めて早魘の時は木々の友摺から火の出る事のないでもないが、生き物の内で火を起すものは人間ばかりだといふから、此度の火も人ある里に出でたるは明かである。

夏も盛となれば涼を追ひ流に沿ふて居を移す。此時常に家族を伴つて行くが、悴は多く母熊に随ひ、娘は私が連れて歩く。片親が遠く離れてゆく時は残つたものは一つに成り、離れて廻るにしても喚べば聞へる距離を保つのであつた。こういう事を言ふと可笑しいが、熊仲間でも私は先づ子煩惱の方で、仔熊もよく懐いて来る。夏の間は私はよく他の熊の男熊と一緒に成ることも

あつたが、矢張家族團樂の樂に比ぶると遙かに劣る。實際私は子煩悩といふ事を白狀して恥ぢぬ。私は我仔の成育を見て非常に樂しく思ふ。人間はよく可愛いものゝ事を熊の兒のやうだといふさうだ。私が仔熊の可愛さも無理でない。あの人間でさいさう見えるのだもの。中で娘は雄の生れ變りとも見らるゝ様に、氣質までそっくり、咽の月の輪まで出来て居る、悴は行未天晴の雄熊と成る氣象を示して居る。共に快活な温順で且又壯健な仔熊で、よく食ひよく眠る、私が始めて毒畑に連れて行つた時の状は今も忘れぬ、爾後といふものは毒が欲しいと常に請強むのであつた。

冬と成つては又例の冬籠。今歳の冬は別状もなく各自以前から穴居の準備をなし、彌冬籠をするに至つたのである。

再び人寰に入る

最う如何なる事があつても又と近付くものでないとなれ程堅く決心して居た私共だけれど、今から思ふと奈何な氣て其堅い決心を翻したものか殆んど

了解に苦しむ。是ぞと取り立て言ふ程の譯もなかつたのであるが、ふらふらと人家の近くに又もや出て行く事に成つたのである。多分は知らぬ間に人里近き方角へ漂泊して行つたのであらうが、自分達には自分の行つて居る事は丁と了解つて而も其事を行つて退けたのである。

明けて二歳の仔熊を引連れれた同勢四箇、威風堂々、眼中毫も怖るゝものなく、勢満山を壓して山中を横行した。今は雷挺の響かざる限、大熊の族に逢つても何等避る所はないのである。初は目的もなく北へ北へと深入をして居たが、不圖あの妹熊が一命を墜した暮年の毒畑を、今一度見たいといふ好奇心が胸に浮んで來たので、其慘ましい記念の地を踏んでみたいといふ念の内には靡ろげな希望だが、若しやあの怨重なる舊敵に逢ふ事もあらば舊怨を雪いて多年の本懐を遂げたいといふ念も單つて居つたので、數へ立れば怨は深い、私を威脅した事も再三にして止らず、常に私は逃げ匿れして居つた、是も恥辱の一である。私共の故巢を押領し刺へ母熊の援助が無かつたらば或は父熊も生命も危くせうとした、此も忘れ難き無念の一である。殊には又

月夜の宵の暮烟に、自分で行て知つて居る事だから、危険か危険でないかは判つて居よう、普通の熊なら途で逢つた時、教へて呉れるのが本當である、さすれば私共も行かないし、妹熊も人手に落ちずに済んだらう。畢竟妹熊が一命を擲つたも、もとを糺せば此奴が業であるのだから、返すくも此儘には捨置難き奴と、私は常々思つて居た。若し逢ふ事もあつたらば存分に腹巻しをせねば措かぬと思つて居た。て一度此事を胸に浮べると悲憤の情に得耐へぬので、大地にどつかと腰を鉤し、鼻をもつて胸を擽つて獨り唸るのであつたが、情を察して雌どもも、全じく思ひやりの念から、聲を合せて唸るのであつた。

其夏は北を指して、嚮に妹熊の落命後辿つた途を後返へりするのであつた。或る時は一所に十日も足を停め、又二三日も歩んでは停るといふのだが、其間人影を見た事も一度ならずあつた。併し人間は毫も私共の姿を認めない。私共は數々場敷を踏んだ文に、人を避ける道は心得て居たからである。然るに人間の方では到る所に永住するのではなく、矢張轉々其場所を換へて居る

と見える。三年前に私の見て肥臆へて居た家は今は住む人もなく荒れ果て、柱は傾き軒は朽ちて雜草深く生ひ茂つて居る。猫の話す所は決して昨てはなかつたのである。

人間が山中に入る理由も漸く判つた。人の飼つた犬が山中途を失して、野獸の群に投じ、山犬などと親しむ事があるさうだが、此等の狗から聞いた所といふ山犬の話が擴かつて、私共の耳にも入つた。其狗と近付きの山犬から直接に聞いた話だが、人間が探して居るといふものは黄金である。黄色に光つて居る物で川床の砂の中に有るさうだ。人間が其黄金を以て何にするか山犬には一向判らぬ、狗も能く知らぬとの事である。併し食へるもので無い事は判つて居る。而も人間は之を取つて仕舞つて置いては又他の所を探がす、河床を掘りつゝ流に沿ふて探がす由である。若し此河に無かつたら次には彼の河にゆき、探し當つたら其所に家を建て居付く。随つて人は漸く入つて来て遂に都市を成し、街衢を造り、馬を飼ひ牛を放ち、私共が閱歷したやうな所が出来る。て山犬の告ぐる所は私共の見聞と吻合するので、殆んど詐な

らぬ事を知る。一體からいへば山犬も狼同様餘り信用の出来る動物では無いのである。

再び人里に入つた時私は其不思議な黄色い物を見たさに堪なかつた。土を盛立て、流から斜に長い溝を掘つてあるに、誰も其邊に居る氣色は見えず。私はツカ／＼と溝の中に入つた。そして溝の中を歩き乍らそこ／＼と喚ぎ廻つて居る時、忽然數歩前から人間か出た。私は吃驚して足の踏む所を忘れた。人間は私よりもつと驚いたらしい。アツと一聲叫ぶなり未だ私は思案の付かぬ間に土堤を上つて傍にある小さい木にすら／＼と攀ぢ登つた。私は人間が木に昇れるものとは今初めて知つた。見る／＼第一の枝まで達し、私共を瞰下して何か切りに叫ぶ。多分私共を嚇すのであらう。併し手に雷挺を持つて居ないやうだから、恐るゝ事は毫もない。て私も後から跟いて登つて行かうと思つたが、木の幹が細くて到底も熊には昇れ相にない。仕方がないから降りて来る迄下で待つて居た。けれども仲々降りて来さうにも無い。其内他の人間が来はすまいかといふ懸念が起きたので、勿々とそこを立去たのである。

一つ困るものは雷挺である、此奴は全く恐い。

一體其は何だらう。如何すればそれで人間は遠い距離のものを殺し得るだらう。抑又何の位の距離なら殺せるのであらう。と思ひ来れば常に解決に苦しむのである。

溝の中で人間に逢つた直後の事であつた。生れて初めて舟といふものを見た。最初は舟も一種の動物だと思つて居つた。其兩側の楫は翼であらうと思つた。所が中から人間が出て来たので初めて真相を解する事が出来たのである。此時川向の岸に松の木があつたが、恰も此時魚を獲つて飛た鵜は舟に飛いて飛去りざま松の梢尖に止つて舟の過ぐるを待つて居た。然るに舟中の一人は雷挺を鷄に擬したと思ふと、躍飛と身を眺らして鷄は落ち、後にドンと一發發砲の響を聞いた。

此時まで私は雷挺の効用を地上のものに限つて居つた。だから若し雷挺に逢つたら手近の樹の上にかげ登つて難を免れようと、我々仲間て話合つたのであるが、今あの高い梢で鷄の殺されたのを見ると木登りも詮ない事と成つ

再び人里に入る

て来て、雷霆の恐ろしさは以前にも倍するのである。
 此邊は馴れた道であるが、折ふしは人聲、騾馬の鈴音なども聞ゆる事があつた。鶏事件の後数日、彌人里に入つて見れば昔の家の外に澤山の家が建て増されて周囲には弘い原が出来、原には長い草が波立つて茂り生じて居る。此は麥である後に知つた。其麥畑の周囲には杭が立つて刺のある針線が引張つてある。此んな針線も此度初めて見た。悴は物珍らしさに先づ鼻で觸つて見て急に引いた、次で私が觸つて見ると、鼻の邊から著しく出血して居る。此邊一杯に此針線が引張つてあつて容易に近付けない。併し畑の中の麥は丁度好い食物だと思ふので、奈何にかして此を取除ける工夫はないものかと思案した。雌には好い工夫が付いたので、即ち一本の杭を双手で押折つて、更に次の杭を折り、其暇から埒の中に闖入し、食ふもくも曉方まで、息をも吐かず食ひ食つた。生れて此位大食した事はなかつた。
 恰も熟しさに成つて居る麥の穂の事として其味も一入であつた。後で流に下つて水を飲んで又山中に遊返つたのである。併し二度全じ事を繰返すは前

轍の鑑があるので、再舉は思止つたのである。

舊冤を雪ぐ

最ふ此頃は人里の中で彼方此方の小部落の間を行くのだが、危険一方ならず、人間の経験のない熊ならば吃度失敗するのであるが、私共は一列に成つて肅々と通る、人間は鼻が利かず耳が利かないから、視線を避ける丈で充分である。
 兎角する間にかの毒畑は前面に現はれて来た。見れば四邊の立木は悉く伐り倒され、毒畑のみは昔作らの姿を存して、折柄の月光も空にかきやく。妹熊の災厄もかゝる宵の事であつたと思興せば感慨の胸に溢るを覺えた。
 私共は毒林の中へは入らず、古い住居はどうなつて居るか、それを今一遍見たいと思つて、山坂を昇つて行くと、古の仇が思ひ出されて無念の餘思はず一聲ウーと叫べた。何の底事を多年の仇は今宵今我が眼前に現はれ來つたのである。

悴が脇道に陥込んだと思ふと、突然唖ゆる聲が聞こえて、間もなく渠は風のやうに私の傍へ駆け戻つた。と後の藪影から一箇の熊がニョツと面を出したのである。私は一目見るなり其何者たるやを情知した。悴の如き未だ稚い仔熊を劫かすのが彼奴の癖であるのだ。而も過ぐる歳、其居を奪はうとして失錯つた雌雄の熊の孫たることは知らず由もないが、吾々同勢の姿を見るや、悴を追ひ来る足を停め、背を窘めて憤然と咆哮てた。私は目寸法で以て、自分の身長の父親より遙と高い事を知つたのである。何故かといへば親熊よりも餘程高いと見た此奴が背長といはず横張といはず、私よりも勝れて居ると思はれぬのである、正に是れ一雙の好敵手、併し勝目が私に在ると思ふのは、此方は正義の戦である。而も不倶戴天の敵と覗つて居たのだから、どうあつても難を復さねば措かぬといふ大奮發心があるからである。

最早私は運擬する邊は無い。驟然起つて渠に對し、實は以前から付狙つて居たのだ、此所て逢つたら千年目、覺はそつちにある筈だサア尋常に勝負をせよと潔く名乗を揚げて戦を挑んだ。向ふもそれと勘付いたか、後れず戦

の準備を初めてゐたのである。

此時の戦況は多く語るを要しない。常に勝ちに慣れたる彼の氣は昂ぶり驟れるものであつた。然るに猛烈なる我一撃は豫期に外れて、妙からざる狼狽を渠に與へた。體驅は偉大、臂力は強大而も老功の剛の者なる渠に向ふのだから、私は死力を盡して戦つた。殆んど息も繼がせず戦ふので漸く負色を見せて來た渠も、遂には死物狂に成つて逆襲をする。併しさしもの狂猛も其甲斐なく漸々と溢れ出る鮮血と共に悲鳴を擧げて弱り行くので、生かすか殺すかは此一舉に。其時私は窮追せず逃ぐるが儘に任せて置いた。其足は全く跛と成り、再び戦に向ふことの叶はぬ身にして、生命だけは助けて逃がした。後に至つて林中の生物は悉く道を避けて渠を遠けた。渠は獸仲間の鼻摘み者と成了したのである。今迄は暗に全山の強者を以て自ら任じ、弱を虐げ暴威を振ひ、殘忍に至らざる所なかりしが、積惡の報は免るゝことを得ず、遂に落魄して他の憐れも買ふことが出來ず、好い氣味だと彈指せらるゝに至つた。實に私が渠の脚を挫いたのは公善の爲めにした者といつて可いのである。

私の怪我は淺手であつたので、雌の懇な介抱に依つて程なく癒えた。不思議なものである、此喧嘩が果つると双肩から重荷がとられた様な氣がして、大方ぶりに古巢にねて左右に雌仔を擁しつゝ眠る心地は、實に何ともいはれぬ満足と愉快の情とであつた。

山羊

一度は満足の情を喚んだ故郷の地も、今は人間の手中に落ちたものであれば、久しく戀ふる地ではない。嚮に歸を復した老熊も落武者の一箇で、他は悉く捕はれたり殺されたりしたと見えて、今は此邊に熊の影も見えない。て晝は茂みに隠れながら近く人の聲を聞き過ごし、夜に入つて穩密に、危地を通過する時の方法に習ひ一列と成つて落ち行くのである。然るに此夏の季は炎暑殊の外甚だしかつたので、一つには暑を避くる爲、一には人間に遠かる爲め、山並を辿つて北へ北へと向ふのであつた。進めば進むほど地は高まり木は疎と成つて、一定の地域以北には全く樹木が生じなく成り、下から仰げ

ば丸いやうに見えた嶺々も近付いて見れば圭角稜々として、夏の末にもかゝわらず班に雪の消残つた所が凹みには見える。絶頂に達すれば平坦な廣場と思ひの外、地は急に脚下に傾いて、渺々として青を浸せる一壺の湖が横はつて居る。此一坐の山は宛然是れ千古の靈泉を溢へた大瀆である。下より仰いで少しも知れぬ此神秘の天工に接すれば、昔父熊から、此山中に湖水の數多ある事を聞いたのを想起す。

此聖なる山嶺には山羊が群を成して居る。湖畔の草原に其通路が明いて見え、岩角などに擦り付けた綿毛の着いて居るので知れる。此時半月形の角をふり立て、飲むらしき一頭の羊が對岸の地平線上、青空にクツキリと其輪廓を現はしたが、私共の影を見るなり驚愕して忽ち影を眼界から殺して了つた。爾後私共は三ヶ月近く此山に住つて居たけれども再び出逢ふことはなかつた。避け躲るゝも道理、私は未だ味はつた事はないけれど、山羊の肉は豚のそれを偲ばするものであると聞く位だから。

大杯の縁の一端缺けた所から靈湖の水が流れ出づる。末は河水に合するの

である。此溪を成せる水邊こそ大草すまなく生じたれば、夏の間には屈竟の涼陰である。私共はそこに留つた。未だ此邊は人間の足跡遠く及ばないのであるから、私共は恐れ氣もなく住つたのである。

冬が近づくに連れて、私共の家族は分裂して二と成つた。決して内訌の生じた譯でもないが、已に仔熊の域を脱した成熊は世界至る所自ら養ひ自ら衛ることが出来るのだから、親親の許に居る必要はない、別れるに至るも無理ならぬ譯である。又雌は雌の通性として私が娘と親しくするのを見て嫉ましと思ふ風も見え、倅と娘は似合はしき對であるといふので、一族合議の上で分れることとした。昔若かつた時父熊から追放たれのも今から思へば、決して父熊が悪いのではない。今倅と分れても渠は獨立して生活が出来、娘を助けて行くことが出来るから胸中何の不安の念もなく、私共にした所が私も痛くない肚をさぐらるゝ事なく、雄も安心して睦しく連添ふことに成つたのである。

倅共と分れて後幾程もなく、空吹く風は冬の來るを知らするのである。山

嶺は冬の領に入ること早く、寒を凌ぐに便よき所でないから、そろ／＼と下り初めて、麓路に來て願れば黄色に灰色かゞつた山頂には已に白雪の冠を付けて居る。

兎角する内又冬籠り、やがて冬去り春來つて起き出づれば又もや新しい倅と、新しい娘とが産れて居る。生ひ先長き此二兒がさま／＼の逢難嬉戲はいく數々かあつたらう。いまは前のと糾錯つたり、忘れたりして居る事もあり、殆んど發育の徑路はいづれの仔熊も同一だから、茲には略する事として、只一言いつて置きたいは、二仔共に丈夫で元氣の好い可受らしい兒であつた事である。

飢饉、蹄係

今歳といふ歳は實に凶歳である。雪は餘寒の春にかけて降り。夏は夏て雨の降ると夥しく、寒に傷み雨に害はれて、莓が實らず、小蟲が居ず。流といふ流は河水氾濫して漁もない。私共は一族見す／＼飢えねばならぬ仕誼と成

つたので、矢鏑に方々を遍歴した。それでも勢に伴つた收穫はなくて充分な食を得る事は出来なかつた。秋も半過ぎ頃から霜が下り初めて、寒さが殊の外酷しい。此儘にすれば私共親子四箇は路頭に迷ふ外ない。併し子供のためには奈何にしても食物を給らぬ事は出来ないの、又もや人里近く食を索めて下り行つた。

獨り私共ばかりではなく、生残つた獸は皆山を出て、麓の里を小迷ひ歩く。就中食を索めて長く近くまで人間に近くものは熊である。従つて熊の話は屢聞いた。貪食の爲めに雷艇に殺された事も屢あつた。併人間は雷艇の外に鐵の額を供へた蹄係を工夫しました。是は餌を吊けて、蹄係は他から見えぬ所に隠し置いて、若し餌を喰はうとすると急に反轉して鐵の額で首を占めるといふ仕組みである。又杭に糸をつけそれに餌を吊るし、餌を引く時は雷艇から打殺されるといふ風の装置にした蹄係もあつた。

こんな事は話して聞いたのだが、其れを耳にして數日の後、地上に豚の片が轉がしてゐるのを見た。て私は單身進んで、身を退けながら捧千切を豚に中てた。途端に鐵の額は颯と落ちて来て、宛然生きた物のやうに蹄係は空中に躍然と飛んで、私の鼻を掠めて落ちた。其光景には思はず身が慄とした。そんな事が二度か三度かあつた後、蹄係は此所から取去られたのである。

其後は人家近くを探し廻して食を索めて居た、それも先づ私が斥候をして返つて無難だと思へば家族を引連れて出るのであつた。或時の如きは何事もないと見たので進んで居る時圖らずも後の材木の陰から雷艇が響き出したので、仰天して引返した。此時肩の邊に些の痛を覺ゆるのであつたが、事はそれ丈で皆無事に引擧ぐる事が出来た。以後又とその家近くには寄付かなかつた。後で聞けば他の熊は同じ術で到頭やられたのもあつた相だ。

併し要するに熊は人間の敵でない。私共の生命は實に風前の燈の如きものであつた。昔未だ人の來ない頃には自由に山を下つて、食なき時には食を求めて居たのであるが、今や其途は人間の爲めに阻まれて居る。百計盡きて殘す所は只人間の間に食を求むる而已である。其食たるや多くは人間の委棄たものである。それを私は兢兢として拾ひ廻る。其後又麥畑を喰つて廻つた。

豚も盗んだ。吠え付く犬を二度迄殺した事もあつた。一度の如きは羊が半身外に出してあるのて、是は多分人間の忘れたのだらうと思つて御馳走様とばかり早速皆で平げた。所が少しく氣分が悪るかつた。聞けば此には毒が塗つてあつたのだと。四箇で食べたのて毒の利目が薄かつた爲に助かつたのであらう。以後は一切放下してある肉には手も觸れなかつた。兎に角浮雲い浮世と成つて来た。此上は自分の経験と力量に恃る外はないのである。冬に成つたが。空腹くて穴居する譯には行かない。て仕方なしに人里に食を求めて居つた。此所はまだ町を成す程の家もないが、流に沿ふて建てられて、晝は盛に金といふものを堀る、私共は夜分に出掛けるので、流を越しては代る／＼兩岸に出没して、決して續いて全じ所を訪ぬることはしなかつた。或朝圖らずも一の蹄係に逢着した。是は多分ワナであらう。明々地に餌が出してある、それは地上でなくて木の上で而も四方開放の家のやうなもの、中にある。私は人間は何故態々蹄係にこんな家まで建てるのかと怪しんだ。腹は空いて居るし、又例の術で鐵の頸に空を撲たせて肉を食つてやらうと思

ふて、戒心してかゝつたのである。

て、皆には後に扣へて居て、私が蹄係を外して肉を奪つて来るのを待たせて置いた。然るに寄つて見ると蹄係はなく、地は乾いた堅い土である。どうも判らぬ。何如するのだらう、と思ふ間も前には肉がぶら下つて居る、膺は全く空いて来て居る、儘よ近くに鐵の頸も見えるのではなし、奪つてやれといふ氣に成つて、近寄つて前肢で當つて見れば堅く縛え付けてある。て口に咬へてキユツと曳いた、途端に後ろに受然と響がして、木頭が後から卸りた。私は肉を緊と咬へ乍ら引迄さうすると、サア出られない。ピツたりと下りた木頭は扉のやうに出口を塞いで了つて居る。

併し私は泰然たるものであつた。先づ力を極めて此扉を押した。が毫も動かない。今度は上へ押上げようとした、けれども微塵も動く氣色はない。地面を嗅いて廻つて見たが、出ようはない。於是少からず當惑した。倍是はど

いふのである。實に窮屈である。出ようは無いらうか——動久く經つて、ア、私には全然是が讀めた、讀めた。是が蹄係なのだ。此室が蹄係なのだ。鐵の鎖なく、毒の付いた肉もないが、此室の内が蹄係だ。熊十頭の手も擧らぬ扉を上から落して、中のものを密閉する、此が蹄係だ。ア、蹄係だ。私は蹄係にかゝつたのだ。人間の術中に陥つたのだ。

未だ——併し全く絶望するものはない。兼々人間の事は頭からばかにしてかゝつて居たのだから、正可彼等の手に捉はることはあるまい、と思つて、手段といふあらゆる手段は盡して見た。雌も外からどうにかして救出さうと思つて全力を盡した。けれども何の効も無いといふ。效のない筈はない、餘り外に居る者の不甲斐なさに私は怒り出した。成つた。若私が外に居たら、一度内の者を救出して見せる、と言つた。併しよく——糺して見ると外でも精一杯に働いて居るらしい。其内仔熊も母熊の素振の怪しい所から薄々事變の起つたのを勘付いたらしく、頻に悲げな聲で泣き出すのであつた。私は最う堪らなくなつた。肉を取つて寸断——に嚙断つて、肉の付けてあ

つた柱を徹底に砕いて了つた。て全身の力を集めて奮然として四圍の周壁目にかけてひた打ちに撲つた。一撃を以て大熊をも挫ぐべき鐵拳を扉の上に加へた。柱を噛み大地を蹂躙して、眼は血走り口は裂けるばかりであつた。外でも私の状を見て仔熊のみならず母熊迄悲鳴を擧げて大地を引掻き廻すのであつた。

若し此が山林であつたらば天地も動がす許りに猛り狂ふて暴び立つのであつたらう。併し嗅いて見れば人里は近い處だし暇も光から夜は朝雲と知らるゝので、思ふ様には働けぬ。程なく聞こゆるは恐怖に慄ゆる犬の遠吠。其聲は段々近づいて来る。而して人間の呼ばはる聲もする。犬の聲の方が餘程近い所から察すれば、先に立つて来て居るのであらう。間もなく犬は圓の外の熊を見付けたと覺しく凄じい聲で咆え立てる。悴が之に應じて劇しく時える。人間の聲が近く成つた。犬と悴の劇しい噛み合の間から雌の怒のウーと唸る聲が聞こえる。犬は更に轉じて勁敵に對つたが、其咆ゆる聲が少し變つた。と思ふ間に一聲の悲鳴、更に又一聲。頓て聲も弱つて行つた。ど

ちも末期の叫びであつたらしい。如何な犬なら仔熊の爲めに憤つた、而も俾のやうな熊に對抗することが出来よう。

此犬の聲が消えたかと思ふ間もなく、爆然たる響は耳を劈いて、倅が斷末魔の苦しみの聲を擧げた。此時私の胸は一時に氷る思がした。次に雌の聲。多分敵を目掛けて飛付いて行く聲であらう。雷挺の響が又鳴つた。同時に雌は咽に物の塞つたやうな怒聲を洩らし、聲を蹂躪する音。更に其物音が起つたと思ふ内に、漸く幽かに成つて、了に山の向ふて消失した。只残る所は圓の彼方で娘が物哀しげに歎息する聲あるばかり、四邊は寂と静まつて了つた。

私は一部四什を傾聴して其意を曉つたのである。身は蹄係の内に存然として誰救ひてもなく行んで、現前妻孥の危難に逢ふのを知り乍ら手出しも出来ず、みすく見殺にせねばならぬ。残念、無念口惜しいと激怒忽ち心頭に發して、再び天地の寂寞を破る大哮咆。前に百倍の猛威を奮つて四壁を亂打し、我れと我が身中の毛を引搔つては叩きつけ、指尖からは血も出む許りに酷く嘯んで、山も裂け天地も崩るゝばかりの聲を放つて、絶望の怒を洩らすので

あつた。良久くして雌の聲がする。心を静めて聞けば、渠は引返して來た。氣息奄々として苦しんで聲を後り乍ら、緯の次第を物語るののである。

倅と犬は斃れた。犬は雌が一撲に打倒し、倅は第一發の雷挺で逝いた。て雌は遠方の人に立對つたが、打出す雷挺に脚をやられた、倒と轉ぶや人は逸足早く駆け出した。渠はのがさじと追つたのであるが遂に人家に追んで捉ふることが出来なかつた。併し人間は雷挺を途中で投出したので、寸々に折つて歸つたと告ぐるのである。今や一本の脚は全く用をなさぬ、而も氣がかりなのは娘が上だ。此場合どうすれば可いかといふ尋ねである。

今は執るべき途は二つとない。只出来る限り二頭で逃げるのだ。併しそれなら私はどうしようも雌は嗜く。どうもかうも私は残らなければならぬ。雌が此處に居たからとて何の益もない事である。永居すれば共死の災難に逢ふばかりだ、一刻も速かに此場を去るが上分別である。私は此事を以て告げ諭した。

雌とても心には此外に採るべき方法の無いのは知つて居る。て後髪ひかる

る思て只娘の爲めに立ち去るのであつたが、斷腸の思とは正に是れ。
 私は娘が泣き乍ら丘を越えて跛ひきゆく雌に跟いて行く聲を聞いた。其後
 如何成行いた事やら弗と消息も聞かない。此時逃げ行く聲の響れすがれて聞
 こえずなる迄チツと聽入つて居ると、最早聞こえなくなり、其聲が耳に入ら
 なくなれば天地全く静寂に歸してもの皆は悉く死せるかと怪しむばかりであ
 る。私の激怒の情は消失して今や名狀すべからざる寂莫絶望の情が込上げて
 來たので、戸口に向つて壁に身を倚せかけ、盛返して來る冤家を今や遲しと
 待つて居た。

人間掌中のもの

私は久しい間待つて居た、とばかり思つたが決して其間は長いのではな
 かつた。日はまだ午頃と覺しきに切りに犬の吠立つる聲がして、人間の近づく
 足音も聞えて來た。やかて周壁を繞つて幾度かすき間から覗込み、雷挺を放
 つては中に俘囚の有無を檢して居つた。併し私はムズリどもせず黙つてもと

の處に踞まつて居た。

すると屋根の上で聲がする、此時闇々たる暗の内に一道の光明が颯と入つ
 て、屋根の丸太が一本除られた。途端に一箇の人間がけたまはしい叫聲を擧
 げた。私は眠つた目で窺と見れば人間共は重り合つて覗込んで居る、併し私
 は身動もせず、假死を扮ふて居た。次に上から繩が一筋卸りて來た、其端は
 輪と爲して自然に私の頸にかゝつた。私は妹熊が繩に牽かれた事を思出した
 のて手早く前肢で之を拂ひ除けた。拂ひ除けたのだ。然るに怪むべし此繩は
 私の前肢をキユツと緊めつけるのである。従つて拂除くれば従つて緊しく腕
 の肉に喰み込み、人は此繩の他の端を強く引く。引くまゝに緊つて來て腕の
 痛を覺ゆるに至つた。茲に至つてグツと疔瘡が起つて、見よどうするかと猛
 然として躍上つた折、又もや一條の繩は下りて來た。そい煩さいと怒に任せ、
 他の手で拂除けると、此も同じく縛られて了つた。双肢共に自在を失つてど
 うともする事が出来ない。其内段々と双方から引上げられ、私の腕は宙に昇
 つて、百方を罩めて争へども更に其効なく、今や後脚で立上つて僅に身を

支へて居るばかり、繩を喰切らうと思つても口が届かない。
 もうこうなつては自棄で、無我無中に狂ひ暴びた。どんな事が身に起つたか微しも知らず、只身の周邊に赤いものがぐるぐると回轉するやうに覺えたが、間もなく又も繩が出て私の後脚を一本縛つて了ひ、次には又頸が縛られた。何如して攀げたか屋根の丸太を人間共は悉く除去つて了つた。此丸太は私共が金剛力を以て打つても撲いてもゴトリとも言はなかつた丸太を容易と除つて了つた。もう幾ら狂つても猛つても無効。私は歩々山を牽下され人家近くに曳かれてゆくのである。

今や遁るゝ道は更にない。屈強の大の男が四名、二箇づゝ左右について四つの繩を執り、其繩は緊と牽かれて居る。若私が立停まらうとすれば人間に隨つて來た二頭の猛犬は、後から劇しく吠え立て、後足に咬付く、縛られては居るしふり向くことも繩に噛み付くことも出來ない。又何方かの人間を襲はんとする時は緊と繩を絞らるゝので足は宙に浮かされ、細目は益深く肉に喰込む。而も後には一箇の人間が始終雷挺の銃口を此方へ向けて、驚波とい

は、打放さうといふ氣勢を示して居る。

一里餘も人家近く迄牽ずられて來た頃は彼是晩景であつた。近づくに隨つて他の人間も加はつて三十名内外と成つた。此時以前からの四名は尙繩の端を持つて私を、嚮の蹄係より余程大きい位の小舎の内へ引込み、壁に孔を明けて私を縛つた繩を貫し、其繩の端を緊と物に結付けて、少しも身動の出來ないやうにした。私は前肢二本を兩方に擴げて居らねばならぬ次第と成つた。細目は益々びしく手首に喰込む。こんな若しい姿勢をさせて置いて人間共は去つて了つた。こんな風で二日二晩置去りにせられた。其間屢奴等は來ては物を言かける、或時の如きは暫時繩を弛めて水を盛つた桶を私の前に出した、私は飢渴の餘狂暴を逞しうするのを緩和する手段だらうと思つた。實際私はその爲めに殆んど狂せんとして居たのであつた。私は首を器に差入れて充分に飲んだ。飲了ると又故の如く繩を緊め、水桶を持去るのである。三日目になつて些許の食物を得水を得た。こんな風で飲食中は繩が弛めらるゝが、濟めば直ちに又緊め付けられる。二日置には變つた食物を呉れて居たが、未だ

腹一杯になるほどには得られない。只辛うじて餓死を免るゝを得るに止まつた。此時より私は人間の間に見分けがつくやうになつた、そして私に食物を運ぶ人が主人公といふ事を知つた。私は茲に自白するのを恥づるが實際、私は其人の來るのが待遠しく成つて來た。

渠を殺さう、と思へばそれは極めて易々たる事である。併し渠は一點私に對して殺意を挾んで居るものでない、私に對する口の利き振は決して怒つたものゝ語調でない。彼が私に物でも呉れる時には必ず「黒と呼ぶ。度々の事そんな名を私に付けたのだと知るを得た。いつても「黒といふ聲が檻の外からする時は、ハハア食物が來たのだナと察するやうに成つた。私は渠が弗々の嫌である。併し饑餓と充足の分れ目は彼其權機を握つて居るのだ。而も彼の幾許の苦痛を私に與へるにしても、最初から私を殺す考は毛頭ない。又私の死ぬのを冀ふのでも決してないといふ事は判つて居る。又妹熊が食物を貰つて遊んで居た人間について、話をして居た事を思出すと、成る程と黙頭かる節の無いでもない。併し未だ誰も私と共に戯れようとする人はない。又私

の届く所まで近づき得る人はないのであつた。併し數日の後にはあの黒と私を呼んだ男が私の前肢の禁を大丈夫と思つたか、程近く倚つては、頭の上に手を載せて、而も咬付かれない用心をして居る。渠は夜盡なしに來るのだが、其來る度毎に必ず砂糖の塊を呉れない時はない。板切の端に載せて私の前に窃と出す。私は是てやゝ腹の充つるを覺ゆるのである。

其内に又一條の繩が鼻に貫かれて、咬付くことの出來ぬやうにしたられ、他の繩も張切れる計り強く張つて、一分一厘身動きも出來ないやうにして、首に環を入れた。恚うなつて見るともう嘔むことも暴れることも出來ない譯である。首環が入ると外の繩は取去られて了つた。

オヤ、飛んだ目に逢つたものだ。私の手首は双方共骨に達するまで切れ込んで、其痛さは耐へられない。四脚に立つのは最初の間は非常に困難であつたが、自在を得た悦び鎖の限りに行動がとれる悦びは口舌の盡す所ではなかつた。よく日數も計算して見ないが、不自由の拘束を受けて身動もならぬやうに成つてからは、一ヶ月位も經つたであらう。

爾後震時の間は全じ建物の内に繋がれて、首には環をかけられて居たが、或日又例の繩をかけようとする。その手は最う此方は喰はぬ。早速地上に股と鼻を附けて繩のある限りは手脚を動かさぬ。が熊は到底人間の敵ではない。人間は此術では到底駄目と見て取るや、術をかへて此度は羊毛の丸めたものを長い竿の先に付け、是を私の鼻の先につき付けたので、私は煩さいと一口に嚙碎いた。其羊毛には何ともいへぬ強い臭のするものが塗つてあつて、私はその氣に撲たれたか、クラ／＼と眩暈を催した。と又何か臭のする袋を頭に被せかけたので、其後は前後不覺に、一時間も其以上も眠つた。らう。寤めた時は已に四肢共に繩付と成つて居た。再び人間共が此建物から私を牽出さうとした時に、最初は多少抵抗もして見たが、所詮これは駄目だと知つたので、静々と牽かる、儘に歩み出した。山を越え水を渡り、夜を日に繼いで兎ある大なる町まで牽かれて來た。此所で此度は人家よりは小く蹄係よりやゝ大い箱の中に入れられた。すると此箱が動き出した。此は汽車といふもののださうだ。それから數日數夜山を出て、平野の旅をした。平野には樹木は

多く見掛けない。只黄色の平坦な土の幾ひろがりである。私は世界の今更廣いのに一驚を吃したのである。

汽車を下ると舟に搭せられ、舟から又汽車に移され、五日餘は始終同じ方角をとりつゝ、旅路を走つて行くのだが、まだ世界の果とも見えない。黒と喚んで居た男は絶えず私の近くに居て食物を呉れる。他の人間が繩を執つて私を歩ませるのが、舟の昇降、車の上下の時私が怒つて狂ひ出すと、例の男が和める。私は自分には何故とは知らず此男の言ふことには従ふのであつた。私が此動物園の此籠の中に入つてからは此男、ノイと其姿を見せなく成つて了つた。此男が去つた後には新しい人間が、前の人のする通りの仕事を私にするやうに成つた。

述懐

二年間、籠の内に幽閉せられて居たのである。二年間、二年といへば籠居の生活には随分永い年月である。けれどもそれも今と成つては最初程には耐

へ難き思もしないのである。併し何故に人間は吾々を籠中に禁縛して置くの
 てあらうか、私には其意味が判らない。又何の爲めに私が籠の中に居らせら
 れるか其理由を臆測するに苦しむ。私は其間といふものは始終此一つ籠の内
 に居ると、平太といふ男が式の如く食事を運び、籠の一方の半分に私が居れ
 ば一方の半分を掃除して又其一方の半分へ移れば汚れて居る一方を奇麗に洒
 掃する。而も人間の群集は續々と押かけて来て、毎日／＼籠の前に立つては
 私を見て過ぐる、種々の食物を投げ込んで呉れる、中には可笑しな紙袋だの、
 手巾だの、果の殻などを投入して行くものもある。此平太といふ人間も私に
 悪く當るものではないと思はれる。いな大變私を親切にし私あるを以て窃
 かに平太氏の誇として居るらしい。其は公衆人間共の前で物を私に呉れる體
 度で推測する事が出来る。併し考へても見給へ、人を散々に苦しめて置いて、
 後に成つて生柔しい事をしてくれたとて、それで何が嬉しからう。そんな人
 間に對して何の親切氣が起つて來よう。平太といふ男も籠の内には入つて來
 るが、私が居ない半分の隔の方へ入るばかり、遂ぞ私の居る處へ入つた事は

ない。渠が假令入つて來た所でどうしようと思ふものだらう、只二度僅の間
 一緒に入つた事があつたが、それも極めて遠方の片隅に居たに過ぎなかつた。
 是果して何の爲てあらう。勿論私だとして平太氏に害を興ふる興へぬに到つて
 は速かに斷言は出來ない。いな私は籠の格子から平太氏が私の頭を搔いてく
 れるのが好氣持だと思つて居る。

私が罕居の中二度牝熊を同伴として私に親ませようといふので納れて呉れ
 た事があつたが、直に取去つて了つた。納れてくれるなら、私の孤獨に思遣
 があるなら、あの雌を納れて貰ひたいものである。四箇の仔まで産ませた仲
 のあの雌を納れて欲しいものである。

私は時々孤獨の感を發する。殊に春、夏の候に於て、ボカ／＼と暖かい頃
 は其感も深い。私は懐ひ興のだが雌と共に冷氣身に沁む深林の内を夜な／＼
 彷徨ひ、露の滴る繁の内を日毎／＼遊び暮して居た時の樂しかつた事。松の
 葉の強く妙なる香、沾ひを持つた叢の肌觸さては柔かな地面の踏心地は實に
 何時迄經つても忘るゝ事の出來ない所である。又こんな事もある。或る夏の

日盛、圖らずも遙右手の方で鷺の長鳴を聞いた。(是も籠中に居るものと想像して誤る事はあるまい、其聲は同じ邊から發して、而も誰あつて之に應ふるものでもないのだから)此事は端なくも蛇行流る、溪流に思を馳せしめた。白と黒の翡翠は水面を掠めて飛交へば、松の梢には鷺が佇然とまつて鳴き渡つて居るあの溪流を想起するのである。又夜に入つて鼻が鳴き鹿が鳴き、虎が吼える聲が耳を刺るやうに聞こえらると、私は身を寸々に切られる思がする。多分是等は皆籠の内に囚はれた身であらう。其側々として腸を斷つやうな哀韻は一として舊時の生活を追慕し山野を懐ふ至情に耐へないものでないものはない。私は歸りたい歸りたい。歸つてあの青々と波打つて走つた山嶺の、夜風涼しく吹渡つて、仰ぎ見る老木巨幹の亭々として並び立つた深林の、黒ずみ渡つた幹の下陰。射す月光に銀の縁をとつた梢のたゞずまい、淡く夢路を寫し出した遠山の景、近く流る、溪流の調べ——あゝ世は我者と思はれ、唯と共に優遊自在の樂を擅にして居つたあの山に歸りたいものである。と、こんな事を思ふ。

實に、私は自在を欲する。自由を冀ふ。いな殊に雌が偲ばれる。私は渠が末路は如何成り行いたか、今に於て想像することが出来ない。果して娘諸共一命を全うすることを得たのであらうか。眼前の手負を勞り慰むること出来ぬまゝに、あかぬ別に杖をしぼつたあの日以來の消息は遂に聴くことを得ないのである。

併し機に觸れては情を催ほし、縁に逢つては念を暮らせて居るはわたもの、平素にあつては私は全く境遇に充足満悦して居つた。兎に角に食ふ物には事を欠かない。世に生きるに當つて最大事といふものは食を得るに在る。然るに其食は勞せずして得られ、得て飽くことが出来るのである。昔は霜の下り初むる頃耐へ難き候を抱いて彷徨した事もあつたが實際今私は眞に空腹を覺ゆる事はない。習性と成つて、捕はれた初の冬は地を掘り、さまざまのものを食として冬籠を試みたが、已に暖かて毎日食の得らる、此室の内では冬籠の配慮も何の必要があらうか。土を掘る必要のない所から爪も漸々伸びて恐るべき長さに達した。身を勞

しない爲めに五體は非常に肥滿する。かくの如く横に成つて居て昔日の苦樂に空想の羽翼を添へ、幻影の境に出没して居る程の快事は天下又他にあらうとも思はれぬ。兎に角これは私は生きて行て居るのだ。私は願ひて自ら毫も疾しき所はない、妹熊の非業の死は吾過失ではない。私は救助に全力を盡したのである。悴は不幸にして短命であつたが、外に立派に獨立して行ける悴と娘とを世に残してある。いな私は両親の爲めに不倶戴天の仇を挫いだ。假令私に自在の境を與へたとて此上何を仕出し得よう。

只雌あの借老を契つたあの雌と其約を果さずして私ひとり榮耀をする、これが老後の思ひ出に唯一恨事である。

黒熊自傳了

明治四十一年四月十七日印刷
 明治四十一年四月二十日發行

黒熊自傳 附

定價金參拾五錢

著者 飯村 辰之助

發行者 東京市本郷區月町壹丁目八番地 村上 俊藏

印刷人 東京市牛込區市谷加賀町壹丁目十二番地 青木 弘

印刷所 東京市本郷區月町壹丁目八番地 株式會社 秀英舎第一工場

發行所 東京市本郷區月町壹丁目八番地 成功雜誌社

●本社振替貯金番號三〇九番●電話下番三三七一番



大賣捌所

東京堂。東海堂。北隆館。良明堂。至誠堂。盛春堂。東亞堂。
 上田屋。盛文館(大阪) 大華堂(大阪) 外全國各書店雜誌店。

松村介石先生述

◎眞生涯の礎 (新版)

菊版 頗美本
定價 卅五錢
郵税 六錢

人間と生れて人生の何物たるを解せず、空々々々として幾歳の如くに人生を空過するは、最も恥づべきの事なり、本書は本邦青年者崇拜の中心たる松村介石先生が深く此事を慮り、現代の青年をして、眞個立志的の生涯を送らしめ、俯仰天地に恥ぢざるの生涯を送らしめんが爲め撰述せられし物、誠には廿世紀青年の何人も一讀せざるべからざるの眞書!!!心に煩悶を懐ける所の者は讀め!!!眞個の大活躍を試んとする者は讀め!!!

三島 霜川 著 (勇壯淋漓たる此珍書を讀め)

◎探検小説 月島丸の行衛 (新版)

菊判 頗美本
定價 四十錢
郵税 六錢

▲巻頭口繪 勇士難船せ 月島丸を海上陸の光景 押入!!!
本書は世人も知れる如く東京商船学校所屬の練習船にして往年暴風海上に荒び狂瀾怒濤を爲せるの際大膽にも大平洋にと乗出し悪戦苦闘の末竟に伊豆半島の沖合に於て其船影を見失ひたりし物幾百の勇士之にあり其の末路や果して如何? 著者は當時の眞事實に基き豐富なる想像を加へて此編を成す唯月島丸勇士の行衛は如何!!! 生か? 死か? 果た世界の一角に於て今尚ほ盛に活動しつゝあるか? 此疑問を解せんと欲せば、請ふ此探検小説を讀め!!!

堀内 新泉 著 (見よ此の大立志小説を!!!)

立志小説 觀音堂

前編 (再版)
續編 (新版)

菊判 頗美裝
前編定價 四拾五錢
續編定價 四拾五錢
郵税各金 六錢

△口繪 前編には眞美なる三色版を添ふ!!!
本書は其材料を最も變化多き生涯に當める現代の大實業家某氏の實歴に採り據り大の筆を揮ひし物、運命の爲めに闘争せられし一貧兒が觀音堂の殿前に於て、計らずも、大恥辱を受け、奮然躍起、自己の手腕に頼つて、健闘勇戦、竟に一世の大實業家と爲るの徑路を寫す編は後編に至つて益々佳境に入り、讀者をして覺えず悠然として立ち天の一方を睨んで大に現下に爲すあらんとするの志を起さしむるに足る眞に是れ當代の珍書!!! 稱世の立志小説!!! 讀め!!!

前南神宮長勝峯大徹老師講述 (初版絶筆切れ再版發行)

記憶長壽及膽力養成之要訣 内觀法 (再版)

菊判 頗美本
定價 四十六錢
郵税 三十錢

▲巻頭口繪 八十翁大徹老師肖像挿入!!!
本書は現代禪門の偉傑勝峯大徹老師が親しく本社爲に其多年間實驗せられし内觀法及び數息觀に就きて講述せられしもの内觀法は世人も知れる如く素と釋尊が其弟子周利盤特迦尊者の記憶力に乏しきを憐みて授け玉ひし秘法なるを以て其記憶力増進法として有益なるは論ずる迄もなく古來禪門の偉傑は此法を修して能く八十歳百歳の壽命を保ちし上級氣猛烈膽力の如きものありしを以て又之を長壽及膽力増進の要訣とも見るを得べし活社會に處して是等の諸徳を其身に備へんとする者は本書を讀め!!!

成功雜誌社編纂

現代受驗法 (新刊)

本書は現社會の渴望最も盛んなるより既往五年間雜誌「成功」紙上に掲載せし最も有益なる受驗に關する記事を蒐めて一冊と爲せしもの誠今日各種受驗者に缺くべからざる良書なり現代の受驗者必ずや一卷を座右に備へざるべからず!!!

〇〇定價 税金 六拾五錢

堀内新泉君著

△口繪「コロタイプ」寫眞挿入!!!

立志 歸郷記 (四版)

●本書英譯 今關東京帝國大學教授東京高等商業學校教授アサヒ、ロイド博士、之を英譯して東京高等商業學校生徒の英文教授用と爲せり、以て本書の眞價を知るべし!

〇〇定價 税金 四拾五錢

米光關月君著

少年水滸傳 (再版)

●本書は支那に於ける不朽の小説水滸傳に倣ひて豪傑少年六人の大活劇を描寫せる物、今日の青年にして是を讀むば意氣は正に五大洲を呑み膽は正に全宇宙を壓するの概あるべし讀め!!!

〇〇四六版 紙數三百四十五頁 定價 税金 四拾五錢

久保任天君著 ●大好評初版忽ち賣切れ再版發行

立志 世界無錢旅行 (再版)

〇〇四六版 紙數二百餘頁 定價 税金 四拾五錢

江見水蔭君著 ●大好評再版又將に盡さんとす

探檢 無人島 (再版)

〇〇四六版 紙數二百餘頁 定價 税金 四拾五錢

◎本書は早稻田大學に於て支那留學生の教科書と爲る以て其眞價を知れ

米國現大統領ルーズベルト著 本社譯(大好評讀め!!!)

米國義勇軍實戰記 鐵騎隊 (新刊)

〇〇定價 税金 四拾五錢

米光關月君著 (大好評!!!)

探檢 短刀英雄 (參版)

〇〇定價 税金 四拾五錢

「簡易生活」著者ワグネ氏著 本社譯(大好評)

現代活動要訣 (新刊)

〇〇定價 税金 六拾五錢

石井研堂君著 (福翁自傳にも勝りし此傳記を讀め!!) ●現代青年者必讀書!!!
自助的 人物典型 **中村正直傳** (再版)
○○定額 價版 税金 四十 錢錢本

米國現大統領ルーズベルト著 本社譯(大好評七版忽ち盡き八版發行!!!)
奮闘的生活 (八版)
○○定額 價版 税金 六拾五 錢錢本

堀内新泉君著 (天下大好評)
立志 小説人 **の兄** (兩編共目下品切れ)
前編(八版) ○定價郵稅共四拾六錢
續編(四版) ○定價郵稅共六拾參錢

成功雜誌社編輯
近世 **大博覽會寫真帖**
○○定額 價版 税金 四十 錢錢本

(以下略)

18
825

